

# 共産主義

共産主義者同盟理論機関誌

宣言

共産主義者同盟第三次大会

ブルジョア権力の打倒と

プロレタリア世界革命の勝利のために  
万国の労働者團結せよ

共産主義者同盟綱領第三次草案

共産主義者同盟規約

民主統「戦線」のゆくえ

綱領討議のために

評評 — ホーランド映画をめぐって

フロフインテルンの教訓

—— 第三次大会から英露委員会まで ——

5

# 共産主義

第5号

1959・10・1

論争社 東京都千代田区神田美土代町7  
振替・東京 82087

論争叢書

現代知識人の必読書

對馬忠行著

## ソ連「社会主義」の批判

B6判・箱入・美装  
定価三八〇円

10月27日  
売  
10月27日  
売

日本における反スターリン主義的マルクス派の第一人者の手になる、わが国最初のソ連「社会主義」の実体の理論的・実際的分析書。待望の発売！本書は、スターリン主義と真正面から対決した社会主義の本があらうか。

レオン・トロツキー著 山西英一訳

## 裏切られた革命

B6判・箱入・美装  
定価三六〇円

トロツキーを知らずしてソビエトの歴史を語る資格はない。「裏切られた革命」を読まずしてトロツキーを喋々することはできない。諸外国では戦前すでにベスト・セラーとなっていたが、わが国初めての完訳・決定版！

レイモン・アロン著 毎日新聞 外部部長 渡辺善一郎訳

## 現代の知識人

B6判・箱入・美装  
予価四五〇円

「彼は、本書の中でフランス知識人が、左翼は何時でも正しい、革命は神聖なものである、プロレタリアは聖なる使命を与えられている、といったマルクスの革命主義の神話にとりつかれている。その結果は、新しい現実在即した思考をやめ、神話を信仰して、その中で陶醉するようになったことを鋭く指摘している」

梯 明秀著

A5 函入予480円

# ヘーゲル哲学と資本論

独自の構想をもってマルクス哲学思想の主体的把握をめざす著者が、「資本論こそはマルクスによって実現された哲学的体系である」との立場から、精緻な論理で資本論の核心に迫る最新の力作11月刊

◇目次◇

第一章 『資本論』の学的体系性	一七〇円
第二章 冒頭文節の体系的意味	一〇〇円
第三章 諸商品集成の感性的直観	一四〇円
第四章 歴史的現実と「経済学の方法」	一五〇円
第五章 現実的な学としての『資本論』	一六〇円

### ◇社会科学ゼミナール◇

グレン・ヘンリー 西牟田他訳	歴史における個人の役割	一七〇円
ルフェーヴル 柴田三千雄訳	フランス革命と農民	一〇〇円
ルツチスキ 遠藤 輝明訳	革命前夜のフランス農民	一四〇円
ルカ・イェチ 平井 俊彦訳	階級意識論	一五〇円
相沢 久訳	組織論	一六〇円
ボスダン 佐藤伊久男訳	イギリス封建社会の展開	一六〇円

東京文京表町七八  
振替東京八七三八五

未来社

### 共産主義者同盟第三回大会宣言

ブルジョア権力の打倒と

プロレタリア世界革命の勝利のために

万国の労働者団結せよ！

——共産主義者同盟綱領第三次草案——

### 共産主義者同盟規約

#### 綱領討論のために

「民主統一戦線」のゆくえ

——世界革命の挫折の教訓——

鏑木 潔……………(24)

時評 ポーランド映画をめぐって

九井 喬……………(65)

現代における革命と労働組合(II)

プロフィンテルンの教訓(二)

——二回大会から英露委員会まで——

清川 豊……………(71)

# 宣言

## 共産主義者同盟第三回大会

全同盟諸君！

労働者の鮮血と苦役を資本家の貧婪な食欲のために供しつつ、おのれの官僚的存在を確保することを唯一の目的としていた自称共産党からきつぱり訣別し、わが同盟がふたたびマルクスとレーニンの旗を高々と掲げて全世界労働者階級の前に現われて以来、すでに八月を経過した。

わが同盟は、今や、新たな第二の飛躍の時期にはいろうとしていく。

革命的インテリゲンチアを中心とした一団の小グループから出発したわが同盟は、全国の主要な基幹産業労働者のなかに細胞を確立し、階級闘争の先頭に立って大衆的な規模でその指導性を発揮しつつ、革命的労働者が現実的に結集してゆくべき一つの強力な前衛組織に成長した。

この過程で、わが同盟は、既成前衛党からの分離に必然的に伴うところの、もろもろの日和見の折衷派を追放して同盟を純化した。トロツキー教条主義者を主とする彼らは、「スターリン主義官僚打倒」を唱えながら、その行動は既成の腐敗した左翼諸党とえらぶところなく、すでに一サークルの地位に転落した。

わが同盟は、日夜ただ革命運動のためにのみ活動する職業革命家を中心として、刻々と政治方針を明らかにしつつ、激烈な階級闘争の先頭にたつて、大膽不敵な系統的活動をつづけるにいたつてい

る。共産党という小鼠をなぶりものにするのに慣れた資本家と官僚は、今や新たな妖怪が労働者大衆の不満と胎動のすみずみに忍びこんでいはいないかと、懐疑の眼を光らせはじめた。

三十余年の深淵を越えてわが同盟がレーニンの躍動的な活動にかけわたしたかけはしからは、すでに脈々とした生命が奔りだした。わが同盟の生みだした理論的思想的潮流は、いまだかつて真の味方をもつたことのない貧苦に喘ぐ労働者大衆の生活に、ともしびを点するものとなつていのである。生気に満ちた労働青年は、固い地肌を破って萌えだす青草の芽のように、全国の至るところから沸々と頭をもたげ、あらゆる圧迫と陰險な中傷をもとせず、昂然としてわが同盟の任務を担い、その拳となり、肋骨となつた。

しかし、これまでいかなる労働者が、そして苦悩にうちひしがれた人間が、情感に溢れた豊かな生活と不羈奔放な人間性の完全な開花とを夢見なかつたであろうか？ そして、「社会主義」をもてはやし「労働者階級の前衛」と称した者たちがいかに狭小な直接的物質的目標のみ幻想され、生きた人間の生命を氷結させ、それをよりいっそう強固な桎梏にとじこめてきたか？ そして労働者の収奪者にたいする火の如き憎しみを、いかに収奪者と被収奪者との平和的な「秩序」の甘美な陶醉によって麻痺させ、姑息な「闘争」と察然たる「目標」とを与えてきたか？

このような自己卑下の停滞した潮流のなかにあって、「資本主義

の打倒、プロレタリア世界革命の遂行、共産主義社会の実現」をめざして活動を開始したわが同盟が、労働者のすべての革命的エネルギーを解き放つことできないとしたらまさに不思議であろう。そして事実、わが同盟は、ここに発展の新たな段階を迎えたのである。

わが同盟の出現と成長、新たな革命的な前衛の理論的組織の発展は日本の階級闘争に新たな彩りを与えた。

十年前、共産党の裏切りに乗じて労働運動の指導権を掌握した社民左派は、積年の露骨かつ巧妙な闘争放棄と腐敗無能とによって、漸く労働者の信を失いつつあり、巨大な資本蓄積をなしたとげた資本家どもに買収された社民右翼は、中枢産業の労働者の獲得に進出しつつある。いく多の英雄的闘争を通じて生みだされた革命的労働者は、既成左翼政党的腐敗によって去就に迷い、まったく非組織的な自然発生的行動を余儀なくされている。強化され、国家権力を動員しつつすすめられる資本家階級の攻撃は、事態の推移にまかせられるならば日本労働者階級の戦闘力を粉砕し併呑するであろう。この一年間の階級闘争こそ、わが革命の前途を、長期にわたつて卜するものであるといわなければならない。

かくて、わが同盟の活動にすべてが賭けられている。半世紀前に破産を宣告され、いままた日本でその無能力を証明された社会民主主義者と、禁治産者たることを自ら示した共産党とに代つて、労働運動におけるわが同盟の公然たる進出が、現実の日程に上らされねばならぬ。資本家階級の安保改定、合理化等の攻撃を迎えうつ闘争を通じて、労働運動の大衆的指導部を、その手に掌握しなければならぬ。

かつて出発した当時の一団のグループの討論に代つて、戦闘的労働者

者を広汎に結集する政治的展望の闡明と、わが革命の綱領の確定が必要である。

左翼的気分の烏合の衆ではなくして、鉄の意思を備えた職業的革命家を中心に、あらゆる特質をもつ革命労働者を不断に至るところに組織し、結集してゆく強靱な統一体をつくりあげねばならぬ。

産業と地域の特異性に制約されて局地的な活動を営む労働者の閉鎖的障壁を粉砕し、散在する革命的生命力を結合してその活動を全労働者階級のなかに解放する、全国的政治新聞をもたねばならぬ。プロレタリア独裁の思想と革命的理論、その戦術は、同盟の全国的組織と全国的政治新聞とを通じて、躍動する労働者大衆の闘争において開花し、多様かつ豊富な活動は一点に集中されて、ブルジョア秩序に対する恐るべき破壊力と階級闘争の無限の推進力とならねばならぬ。

わが同盟のかかる活動のみが、既成左翼政党的幻想を打破し、その桎梏の下で苦闘をつづける革命的労働者をも同盟に結集させるであろう。

全国の同盟者諸君！ われわれの一人一人の不死身の活動が、同盟の今日の発展に結実してきた。そして、今よりのち、同盟の活動の一齣一齣が、プロレタリア世界革命の突破口、日本労働者階級の闘争の血路をひらくものであることを想起せよ！

われわれは冷静かつ大膽に、千里の歩みで前進するであろう。すべての革命的労働者は共産主義者同盟に結集せよ！ 万国の労働者団結せよ！

一九五九年八月

# プロレタリア世界革命の勝利のため

## 万国の労働者団結せよ！

—— 共産主義者同盟綱領 —— (第三次草案)

全世界からブルジョア支配を一掃し、真に人間の解放される社会、共産主義社会を建設するためには、プロレタリアートはみずからの前衛を組織しなければならない。

しかし、現存の自称「共産党」はプロレタリア革命をひきのぼし、敗北させ、資本主義を生きてきた。プロレタリアート運動の危機、それはまさにプロレタリア前衛の指導部の危機にほかならない。これを打開するためには、裏切りをつづける自称「共産党」のかわりに、真のプロレタリアートの指導部——断乎たる革命の決意につらぬかれた新たな前衛党をつくらねばならない。

わが共産主義者同盟は、このためにすべての日和見主義的組織から理論的、組織的に分離し、公然とその活動を開始した。

われわれは、マルクスのなしたげた資本主義の批判と、レーニンに率いられたボリシェヴィキ党の偉大な戦闘の経験とに学び、みずからを新たな前衛党にきたえあげるために、全力をあげて闘うであらう。

共産主義者は自分の見解と目的をかくすのを恥とする。われわれはなによりも次のことを公然と語ることを義務とする。  
労働者階級は、ただみずからの実力でブルジョア権力を粉砕し、全世界にわたって共産主義社会を建設する以外に、自己を解放することができない、と。

### 1 資本主義と共産主義

ブルジョア権力を打倒し  
プロレタリア独裁を樹立せよ！

一人類の最後の階級社会、資本主義社会では、労働者階級はすべてを搾取されている。

資本主義は、それ以前の社会にみられた身分的不平等や、経済的強制にかわって、形式的には身分的平等と個人の自由意志にもとづく社会関係をもたらした。資本主義はまた商品の交換を通じて、

局地的であり、分裂していた旧社会のかべを打破り、全世界を一つに結びつけた。

このことよって資本主義は、かつてない巨大な生産力を動員することに成功した。しかし、この社会では、いっさいの生産手段は資本家階級によつて占有され、社会の基本的な生活手段を生産する労働者階級は、生産手段からまったく切りはなされている。労働者は無産階級として失うべきなものをもたない。

労働者は、生きていくためには、賃金とひきかえに自分の労働力を売って資本家のもとで働く以外にはない。

機械制大工業が生みだす老大な失業者の存在は、労働者階級の賃金をぎりぎりの水準にまでひきさげる。労働者階級はつねに失業の脅威にさらされている。

労働者階級の日々の労働は、ただ資本家階級を富み肥やすだけである。なお、さらに、資本家階級はこうしてえた富を、新たな資本として蓄積し、労働者を支配し、搾取する手段にする。労働者は働くことよって、ますますみずからを資本家の鉄のくびきにしぼりつけているのだ。社会の一方には莫大な富と享楽が集中するのに、他方では、働けば働くほど労働者の地位はみじめなものになる。

資本主義は、人間が自然を交革する生産活動を、商品による商品の生産として耐えがたい賃労働にかえ、労働者を非人間的な機械の附屬物にしてしまうのである。

芸術や科学をはじめとした人類の精神活動のいっさいの成果は、支配階級である資本家階級に独占されている。このような資本家階級がすべての生産活動を支配し、独占していることから、労働者階級の貧困と絶望、あらゆる社会的苦しみがもたらされ、同時に資本

家階級自身の腐敗と墮落が生まれる。

労働者階級が労働の成果をとりもどし、生産活動を自分のものとするためには、資本家階級から生産手段を奪取し、みずからの手で新しい生産の体系をつくりださねばならない。

世界市場を前提とする資本主義の発展は、労働者階級の国際的団結の条件をつくりだした。資本の蓄積は、資本家階級の新しい支配の手段をつくりだすばかりでなく、なによりも彼らの裏掘り労働者階級を生みだすのだ。資本主義はますます労働者階級の組織的結集と反抗を増大させる。

労働者階級が、決然として、意識的に資本家階級の支配に反抗するとき、資本家階級の没落と、労働者階級の勝利は、ともに不可避である。

二 資本家階級は、自己の利害を全社会の名を僭称して貫徹する。そのために、種々の暴力装置をもって私有財産の安全を保護する。ブルジョア独裁の国家をつくりだした。まったく和解できない労働者階級と資本家階級の対立する資本主義社会で、一階級の特権的な利害をはなれた一般的な全社会の利益などというものはありえない。

したがって、労働者階級は、資本家階級を奪取するためには、まず資本家の国家権力を粉砕し、自己の階級的権力をつくらねばならない。

資本家階級を奪取し、すべての勤労人民を味方にひきつけ、共同生産を組織し、反革命を粉砕するプロレタリアートの独裁権力なしに、労働者階級は資本主義を克服することはできない。  
資本主義が生みだした世界市場は、全世界を一つの共同体に組織

する可能性をもたらした。労働者階級は、資本家階級がもたらした民族国家による全世界の分割を克服する。労働者階級は、一民族国家におけるブルジョア権力の打倒と、プロレタリア独裁から、さらにブルジョアの民族国家の障壁を打ち破って世界プロレタリア革命を完遂し、全世界を新たな共同社会に組織しなければならぬ。

三 きたるべき新たな共同社会、それは共産主義社会である。

労働者階級は、その団結した力によってプロレタリア独裁の権力を樹立し、そのもとに、生産手段を資本家の私的所有から全社会の所有にうつし、すべての生産活動を資本家の私的な商品の生産としてではなく、全社会の共同の生産として組織しなければならない。

ここにおいて階級支配は消滅する。人間による人間の支配は存在できない。階級支配の消滅とともに、国家は死滅する。

全人類は解放され、階級支配にもとづく人類の歴史は終りをつける。共産主義社会は人間の諸能力の完全な開花を可能とし、ここに真の人類史がはじまる。

人類は共産主義の最初の段階・社会主義社会を經過して、生産力の急速な発展をとげ、完全な共産主義を実現する。

社会主義社会では、人類は社会的生産を共同の生産活動として組織し、唯一の基準、労働の量にしたがって生産物を分配する。

各人は能力に応じて働き、労働の量に応じて生産物をうけとる。

もはや生産は、価値関係を媒介とした商品の生産というまわりみちをとる必要はない。個々の労働は、直接に社会的総労働の一部となり、社会的労働は労働量にしたがって配分され、生産物は分配される。貨幣・賃金といった旧社会の遺物は急速に消滅する。

生産力の急速な上昇、科学技術の飛躍的發展、教育の完全な普及

が肉体労働と精神労働との対立を消滅させる。旧社会における労働は完全に自由意志にもとずいた人間の自然に対するもつとも主体的な活動にとつてかえられる。そこでは、もはやなんの強制もなく、能力に応じて働き、必要に応じてうけとる完全な共産主義社会が実現される。

各個人は民族のおよび地方的制約から解放され、各個人に固着した人間の職業的分割は消滅する。個人々の自由な発展がすべての人々の自由な発展の条件となる共同社会がつくられ、人類の無限の発展が可能となる。

労働者階級は、資本主義を打倒して、階級社会を止揚して、このような共産主義社会の実現をめざして全力をあげねばならない。

四 社会主義や、ましてや共産主義が、一国において実現されると考えるのは愚劣な空想である。

それは全世界の労働者階級の共同の行動としてはじめてもたらされるものである。

わが共産主義者同盟は、資本制国家権力を転覆し、全世界にわたるプロレタリア独裁権力の樹立と、それを通じた、全世界の社会主義、共産主義建設を、基本的な任務とする。

そのためわれわれは、万国の労働者階級の団結と、全世界の資本家階級に対する闘争の結合を達成するために努力する。

われわれはくさりきつた社会の汚物、資本家階級に対する火のような憎悪と闘争の精神をもって武装し、闘争においてプロレタリアートの利益を守ることを無条件の義務とする。

いかなる理由によるにせよ、両階級の対立を緩和し、おおいさかそうとする反動的幻想と徹底的に闘う。

資本主義の改良や改革ではなしに、資本主義そのものの打倒のために、わが共産主義者同盟は、労働者階級の先頭に立って闘うであらう。

## 2 帝国主義と世界革命の展望

### プロレタリアートはいかに闘うべきか

五 一八四八年の革命で、パリコミュンで、西ヨーロッパのプロレタリアートは、新しい歴史の担い手として登場しはじめた。

一九世紀末になると、資本主義はもはや変革されるべきもの、死滅すべきものとしてのその性格を一層あきらかにした。

資本主義は、自由な競争を前提とした産業資本主義の時代にかわって、帝国主義の時代に入ったのである。

一九世紀末には、資本主義はもはやイギリスだけにどまらず、ドイツ、アメリカ、そして日本が、つぎつぎと資本主義的發展の道を歩みはじめた。

重工業の十九世紀後半における發展は、その経営に要する資本を莫大なものとした。この時代になって資本主義に成長する国では、資本の蓄積は、もはや個人企業によって行われるだけでは十分でない。株式会社の形式を通じて、一挙に巨大な資本を集中し、銀行資本を中心とした金融資本が確立される。そして、カルテル、トラストといった資本の結合が進み、金融資本の支配する資本主義の最高

の發展段階としての帝国主義となるのである。このようにして、この時代におくられて資本主義に成長した国は、直接にもつとも近代的な帝国主義国となった。

帝国主義経済は、技術水準の高まりにもなつて、生産力が圧倒的に上昇し、資本の規模が巨大となるにもかかわらず、労働人口はそれに照応して増加はしない。恒常化した過剰人口は、農村や中小企業に停滞し、その前資本主義的な関係をブルジョア的に分解するのをさまたげる。それは独占価格などによる農民や小企業家の収奪や、労働者の賃金をぎりぎりまで切りさげることと独占資本にゆるすこととなる。

慢性化した失業、食うにも食えない労働条件のおしつけは、労働者階級にも、一般勤労人民にもはげしくおそいかかってくる。

長くつづく不況、恐慌は、もはや資本主義がまったくその歴史的生命を終えたことをしめしている。

金融独占資本は、外にむかつては商品の販路、原料資源の獲得、そしてなによりも過剰な資本の有利な投下口を求めて、植民地の支配にのりだすようになる。植民地の人民にたいするあからさまな抑圧と略奪—ここに帝国主義の腐りはてた本質は決定的に暴露される。

とくに後進資本主義国が帝国主義列強として、世界市場の争奪戦に参加することによって、世界は分裂した諸市場圏の激烈な闘争の場となる。市場の再分割のための激烈な競争と闘争は、必然的に帝国主義間の武力衝突と、帝国主義世界戦争をひきおこす。

資本主義の危機的様相—帝国主義世界戦争において、あからさまになるその深刻な危機は、ただ帝国主義戦争を内乱へ導き、ブルジョア権力の粉砕のために闘うプロレタリアートの手によってのみ

はじめて解決される。

プロレタリアートこそ、社会主義革命によってすべての社会問題を解決しうる唯一の階級であることは決定的にあきらかとなる。

広汎に資本主義以前の関係をのこしたまま、帝国主義国となる後進資本主義国においても、プロレタリアートにとっては、ただブルジョア民主主義的任務の遂行だけを独自の課題とするいかなる中間段階の革命もありえず、プロレタリア革命が直接の課題となっている。資本主義的分解を阻止されたまま、独占資本に収奪される農民や一般勤労人民の要求も、独占資本の打倒なくしては、解決の道をもたない。

帝国主義の分割された世界市場は、そのはげしい競争と衝突のなかで全世界の階級闘争をより強く結びつける。一国のプロレタリアートの闘争は、全世界プロレタリアの闘争の一環である。一国におけるプロレタリア革命は全世界プロレタリア革命の直接の導火線となり、プロレタリアートは全世界的にのみ、勝利しうることはますますあきらかとなる。後進諸国のプロレタリアートも、先進諸国のプロレタリアートの援助によって、直接に社会主義的生産を組織することが可能となる。

プロレタリア革命を一民族社会の域内での、自足的なものと考えた幻想は、帝国主義世界の現実の前に、決定的に破綻する。

六 帝国主義戦争は、ロシアのプロレタリアートをも例外なくその渦の中にまきこんだ。いちじるしい後進性にもかかわらず、プロレタリアートはみずからの階級の立場を守るために、完結したブルジョア民主革命に期待をかけることなく、直接に権力の奪取にまです

すんだ。その偉大な勝利は、壮大な全世界社会主義革命の勝利の口火となるべきものであった。

だがプロレタリア革命は、資本主義の危機の深まりから自動的におこるのではない。前衛の組織的結集と、その正しい政治指導は労働者階級解放の第一の条件である。

事実、ブルジョア民主主義革命の完成を期待して、プロレタリア権力の樹立のための非妥協的な闘いを怠ったメンシェヴィキと、四月の古参ボルシェヴィキとの日和見主義をのりこえたレーニンの帝国主義段階におけるプロレタリア革命の戦術によってこそ、ロシア革命は勝利したのである。だがこのロシア革命によって口火を切られ、ヨーロッパの廢墟の上で闘われたドイツ、ハンガリー、イタリアの革命運動は、資本主義を転覆するに十分なほど強力なものであったにもかかわらず、これを指導する党の生長がおくれたために重大な敗北を喫した。「左翼小児病」のセクト的誤謬を、社会民主主義との無原則的な統一戦線の維持におきかえることによって、一九二三年秋の決定的瞬間における行動をためらったドイツ労働者階級の敗北を最後に革命運動の波は退潮をはじめ、ロシアのプロレタリア権力は孤立した。

この孤立したプロレタリア権力の維持を自己目的化し、レーニン死後、ついにロシア共産党とコミンテルンを支配するにいたったスターリン主義者の誤謬によって、ロシア・プロレタリアートにつづくべき全世界プロレタリアートの闘争は、敗北の歴史をたどることになった。

二六年、イギリスの炭坑労働者のゼネストがうみだした危機は、改良主義的幹部との取引のうちに失われ、中国第二次革命は民主

革命を絶対化し、民族ブルジョアに追従したスターリン主義者の方針によって、国民党のクーデターの血の海の中におぼらされた。社会民主主義者とスターリン主義者との裏切りに助けられて、独占資本は、自己の社会体系を救いつつ、熱狂的な投資によって、最後の蓄積をつづけた。しかし、その熱狂は、やがて大恐慌による沈滞にうつかわられた。資本の破壊の影響は、巨大な新設固定設備による生産能力の過剰としてあらわれ、機械はなん十カ月にもわたって運転を休止する一方、数百万の労働者が、街頭に投げだされた。株式の大量売却が生みだした株式恐慌の危機の様相は、従来の金融資本の蓄積の様式をもつてしては、もはやこの巨大に発達した生産諸力を処理することができなくなったことをしめしていた。深刻な社会的危機が生まれた。階級対立の激化は、帝国主義戦争と十月革命にひきつづく国際的な階級決戦が迫りつつあることをあきらかに示していた。

従来の方法ではみずからの政治的支配を維持しえなくなったドイツの独占ブルジョアジーは、昂揚したプロレタリアートの運動をファシズムにより粉砕し、新たな道をきりひらいた。それによってドイツブルジョアジーは、国家の強力な介入によって搾取する条件を大巾に拡大した。しかしスターリン主義者は、革命的危機における情勢を一変するために、改良主義的指導下にある社会民主党労働者との反ファシズム統一戦線の実現によって闘うのではなくて、「社会ファシズム論」にもとづく最後通牒主義によって、かたくなにその統一戦線の実現を阻止し、全世界プロレタリアートの注視の中に最大の敗北を喫したのである。ドイツ金融資本は、ヒットラーのもとで国家独占資本主義へと推移していった。

一方、フランスのプロレタリアートは巨大な階級の力を發揮してたちあがり、フランスの力を徹底的にくじき、統一戦線政府を實現したが、それは崩壊しかけているブルジョア民主主義を支えることをめざして、プロレタリアの綱領をすてさるることにより、プロレタリアートにふたたび犠牲を強いたのである。人民戦線政府は、国家独占資本主義への過程に照応した経済政策も採用できぬままに、みずからの命を断つた。

革命運動の再度にわたる裏切りは、帝国主義の延命——そして核兵器の出現をうみだした第二次帝国主義戦争の勃発という悲惨な結果をもたらした。第二次大戦は、あきらかに帝国主義戦争であった。それにもかかわらず、階級闘争の基本的戦術をソ連邦の国境の安全を保障する外交政策に従属させたスターリン主義者の手によって、「帝国主義戦争を内乱へ」というレーニンの旗印は投げすてられ、「別個にすすみ、一緒にうて」の統一戦線の原則も、帝国主義者との没階級的な「反ファシズム統一戦線」におきかえられた。

その結果は、戦後の階級闘争に、すくいがたい階級協調主義をもちこんだ。フランス、イタリア、日本などの先進資本主義諸国のプロレタリアートは、連合軍に対する幻想によって、闘わずして空しく敗れねばならなかった。大恐慌、大戦、そしてそれにひきつづく階級対立の激化のなかで深刻化する危機を、帝国主義は労働者の前衛の裏切りにたすけられて、国家独占資本主義としてのりこえようとする。

かくして社会主義にとってかわられるべき世界資本主義は、プロレタリア革命の挫折によって、新しい延命の形式を見出した。

七 あらたな延命の形式、それは国家独占資本主義である。

国家独占資本主義は、原子力産業、電子工業、合成化学工業などの導入、軍事技術の一層の発展などにみられるすでに巨大に発展した生産力を、資本主義がみずからの自由な運動様式の中に包摂しえなくなつたことを示している。

支配権を握る株主は、中小株主を無力化し、会社の利益をかならずしも全部配当にあてることなく、会社の内部に留保し、固定資本の巨大化にもなう莫大な資金を調達する機構としてそれを確立する。この自己金融の結果、資金は資本市場の制約から解放されて、企業の拡張をきわめて容易なものにするともに、独占の形式は極度に進行する。この自己金融の蓄積の様式は、租税などによって集中された莫大な社会的資金を、低利長期の国家資金として重要産業部門に供給したり、あるいは内部留保金にたいする免税策や、低金利政策、消費者信用の拡大などの経済政策によって、独占利潤を維持し、もしくは蓄積を促進するなどの国家機関の動員によってはじめて可能とせられるものである。

この国家機関によって補充された自己金融による蓄積様式の展開は、株式資本の発展したものであり、資本所有と経営機能の新たな関係にもなつて、あたかも資本の社会化が行われるような幻想を生みだす。しかし、もともと株式制度に必然的な群小株主の無力化が進められ、少数の支配的株主は、自己の利害を、会社それ自体の利害としてあらわすことによつて、私的所有を一層強化する。

そして私的所有の限界をこえ、資本主義的再生産の存続には不可欠の部門は、会社所有から国家所有に移される。私的所有は、このような国家の直接の介入によつてますます強化される。

に対応して、たえず貴族化の危険にさらされていることは事実である。だが、資本家階級の決定的な政治的、経済的攻勢に対して組織された労働者の行動は、容易に国家権力との対立をまねき、みずからの決然たる行動なしにはいかなる矛盾の解決もありえないことが、日々の階級闘争の現実の中であきらかにされずにはおかない。この段階で、全国的に単一な政治方針によつて統一され、いかなる場合にも、労働者階級を革命に向つて指導しうる前衛党の役割はいつにもまして重要となる。

ブルジョア経済の国家的障壁をこえた結合は、この段階では一層進む。

一國のプロレタリア革命は、必然的に世界プロレタリア革命の一環となり、各國のプロレタリアートの連帯は、客観的にますます強く要請されることとなる。

ブルジョア的な国家的分割を止揚し、世界を単一共同体、社会主義社会に組織する任務はプロレタリアートの直接の課題となつていくのだ。

後進国における民族革命の中で、自己のブルジョア的發展をとげようとする民族ブルジョアジーも、必然的に国家資本主義的な方策をとるようになった。プロレタリア運動は、ここでも明確に自己の権力の確立の任務に直面しているのである。

植民地の民族革命運動も、本國のプロレタリア革命とともに、単一のプロレタリア革命を形成する方向に進んでこそ、勝利の道はひらけるのである。

民族ブルジョアジーによる国家資本主義的安定の道か、プロレタリアートの権力の掌握か、道はこの二つの方向にしかない。いかな

プロレタリアートは、この巨大に発展した生産諸力をみずからの手に握らねばならない。プロレタリアートによる生産と消費の直接的な社会主義的統制の実施は、生産力の飛躍的な発展を可能にするにちがいない。国家独占資本主義は、直接に社会主義を準備するものとなつていく。

プロレタリアートは自己の階級支配をうちたてれば、中心的な産業を奪取することによつて、社会的労働の直接的配分と生産物の労働に応じた分配という社会主義の原則を、きわめて容易にみちびきいれることを可能とするであろう。そして国家独占資本に特有の信用、財政などの機構を、管理、簿記、計算などの経済的変革の道具として利用しながら、急速に生産力を引きあげねばならない。

このように国家機構との結合を強めた「公的性格」の強化の中で、社会主義の物質的準備は、完全に熟しきつていく。

プロレタリアートの決然たる行動と、政治権力の奪取こそが、すべての可能性をきりひろく、国家独占の「公的性格」に眩惑された一部の「現代マルクス主義者」が流布するように、政治権力の奪取の展望を欠いたたんなる企業の「国有化」の促進は、それ自体けつしてプロレタリアートの解放の道をきりひろくもつてではない。個別の金融資本のそれぞれの有形無形の抵抗があるうとも、国家独占資本主義は権力によつて私的所有を集中的に擁護するものにはかならないからである。

それゆえに、公企業、大独占部門の労働者の行動に一切の鍵が握られている。もちろん、これらの基幹産業の労働者が、国家機関の補助や中小企業などからの価値の移譲によつて形成される独占利潤のおこぼれによつて買収され、中小企業労働者の職関性の不断の増大

る平和主義的幻想をものはねのけて、階級闘争の現実を、プロレタリアートに、非妥協的な独自の闘争の決定的な重要性を教えているのである。

八 後進国ロシアにおける社会主義革命は、「いくつかの先進諸国のもつとも積極的な協力」(レーニン)によつて、すなわち「国際的な世界革命に支持されて」はじめて勝利しうると考えられていた。

だが、西ヨーロッパ・プロレタリア革命の端緒であり、その一部としてのみ考えられていたロシア・プロレタリア革命は、西ヨーロッパ革命の退潮のうちにとり残されてしまった。

孤立をよぎなくされたプロレタリア権力は、世界革命の意志に貫ぬかれたプロレタリア前衛の意識的努力なしには、世界のプロレタリア革命の基地とはなりえない。

だが、世界革命の敗北による孤立を、一國社会主義論によつて合理化し、絶対化したスターリン主義者は、必然的に種々の歪曲をもたらし、歪められた過渡期社会を社会主義と詐称するようになり、全世界プロレタリアートの解放闘争に重大な損害を与えている。そしてそれはプロレタリアートの上にたち、コンミンユーン原則を破壊して包括的に政治権力を掌握する特殊な官僚層を出現させている。

現在のソ連社会を支配するものは、十月革命の成果をうばい、世界革命の展望を放棄して、一國革命の幻想の中で特権的支配をかためてきたこのスターリン主義官僚である。彼らの政策追求の目標は、特権を保持するために均衡を守り現状を維持することである。

そのために彼らは、国際的には平和共存政策を採用して、死滅しつつあるブルジョアジーと取引をし、彼らの打倒を通じての恒久平

和ではなく、彼らとの妥協による不安定な平和を求める。これは各  
 国の党をして帝国主義者に圧力をかけさせるための外交政策の道具  
 にかえさせてしまうことよって、階級闘争を救いたい改良主義  
 の道にひき入れる。

国内的にも、国有化経済の発展にもかかわらず、労働時間の社  
 会的配分と労働給付に比例した生産物の分配という社会主義的原則  
 は採用されず、依然として不平等分配が存在し、価値関係が残存し  
 ている。しかも、数次の五カ年計画の成功によつて、生産力の高度  
 の発展がcaちとられたにもかかわらず、MTS解散、工場管理機構  
 の改革などは、独立採算制の強化によつて、価値法則の一層の貫徹  
 を許し、労働者の完全な解放をさらにおくらせ、官僚の特権化をす  
 すめるものとなっている。

労働は階級社会におけると同様に、まったく生活のための手段に  
 はならず、極度の差を伴った賃金制度と、きびしい労働規律によ  
 って維持されている。

ソ連邦のプロレタリアートは政治的にも、経済的にも、まだ完全  
 に、解放をcaちとっていない。

現在のソ連邦は社会主義ではない。それは社会主義への過渡期が  
 停滞して歪められ、絶対化された存在である。

帝国主義ブルジョアジーの全世界的打倒の過程で、ソ連邦のプロ  
 レタリアートは特権的な官僚支配を打倒し、奪われた自己の政治的  
 支配を回復せねばならない。

九 二度目の世界帝国主義戦争は、各国のブルジョア支配を重大な  
 危機におとし入れた。スターリン主義の裏切りとそれに助けられた

広汎な愛国主義的気運の前に後退させられていたプロレタリア運動  
 は、大戦の過程の中でふたたび高揚に向った。

日独伊帝国主義者の敗北によつて、未曾有の富と人命を破壊して  
 戦争が終った時、世界プロレタリアートは危機に瀕したブルジョア  
 支配に対して、フランスで、イタリアで、日本で果敢な突撃を開始  
 した。

東ヨーロッパの数カ国と中国はブルジョア支配から離脱し、多く  
 の植民地諸国は帝国主義の支配をくつがえして政治的独立をcaちと  
 った。

だが、帝国主義戦争に対する「反ファシズム解放戦争」というす  
 くないがたい没階級の規定は、世界プロレタリアートの闘争を各国の  
 「国民的復興」の熱狂に埋没させることによつて、主要な資本主義  
 国においてブルジョア支配の打倒にまでつき進めることを決定的に  
 妨げた。とりわけ決戦を迎えたフランスとイタリアのプロレタリア  
 ートは、ブルジョア支配の手先となった自称前衛党の恥すべき誤り  
 によつて徹頭徹尾裏切られつづけた。権力を目の前にしたギリシア。  
 プロレタリアートの英雄的闘争は、ソ連の官僚主義者の拱手傍観す  
 る中で鮮血の犠牲のうちに粉砕された。

大戦直後、インド、インドネシア、フィリピン、ベルマ、中国  
 の各地でまきおこった革命の嵐は、民族ブルジョアジーに対する無  
 原則な妥協を、またその裏返しとしての極左戦術によつて重大な後  
 退をよぎなくされた。

こうして戦後の革命的危機の一時期をかるうじて切りぬけたブル  
 ジョアジーは、「国民的復興」の過程で、自己の救済の道を国家独  
 占資本主義の確立に見出した。

戦争によつて直接破壊をこうむることなく、莫大な利潤を吸いあ  
 げたアメリカ・ブルジョアジーは、西欧資本主義の危機の中で決定  
 的優越性をかちえた。彼らは、集積した巨額の資本をもつてこれら  
 の国の経済復興を援助しながら、アメリカの帝国主義を頭とする世  
 界ブルジョアジーの再編成をなしとげた。

こうして、一九四七年を一つの転機として、危機をのりこえた世  
 界ブルジョアジーはアメリカ帝国主義者を盟主として結束し、資本  
 主義国のプロレタリアートおよびブルジョア支配の外に立ったソ連  
 邦を中心とした国々に対するあらたな攻撃を開始した。

この時、全世界のプロレタリアートは、このブルジョアジーの反  
 撃をうちやぶり、あらたな革命への展望をきりひらく決然たる闘争  
 にせまられていた。

だが、帝国主義者との協調の夢やぶれたスターリン主義官僚は、  
 この危機にあたって、ソ連邦国境の安全のためコミンフォルムを結  
 成し、ブルジョア支配に対する階級闘争を民族独立と民族主権の擁  
 護の闘争にすりかえた。

「冷い戦争」の激化の中で、一九四九年、スターリン主義官僚は、  
 民主主義的目的に限定された平和運動に全世界プロレタリアートを  
 釘づけにし、ブルジョア支配の打倒をめざす階級闘争を放棄した。

さらに資本主義の一応の安定とともに一九五四年からソ連スター  
 リン官僚によつて前面におしだされた「平和共存」政策は、「両体  
 制」の生産力の競争が社会主義の勝利とプロレタリアートの解放を  
 保障するといふまったく没階級のなものであった。この政策はブル  
 ジョア権力の打倒と世界革命の戦略をプロレタリアートに放棄さ  
 せ、なによりも現代資本主義社会における両階級の非和解的対立を

おおいかくし、ブルジョアジーに対するもえるがごとき憎しみを眠  
 りこませることによつて、現在のあらゆる裏切りの根源となつてい  
 る。

しかし、社会主義の勝利をきりひらくものは、けつしていわゆる  
 「両体制間の平和的生産競争」などではない。資本主義諸国および  
 ソ連邦、東欧、中国をふくめて構成する単の陣営、世界プロレタ  
 リアートが、国際ブルジョアジーにいどむ階級闘争こそが世界史の方  
 向を決するものである。

一方、戦後十余年、アメリカの圧倒的主導権のもとに展開されて  
 きた世界資本主義の再建過程は基本的に終り、あらたな資本蓄積の  
 強化の中で、アメリカ帝国主義と対等の地位を要求する帝国主義国  
 は、激烈な市場再分割の闘争にふたたび突入しつつある。民族ブル  
 ジョアジーの手によつて独立を完成し、国家資本主義的手段によつ  
 てブルジョアの発展を上げつつある国々の世界市場への登場は、こ  
 の闘争を一層激烈なものとするだろう。

アメリカを盟主とした単一の国際ブルジョアジーの結合を象徴す  
 るかにみえたNATOなどの軍事・政治同盟にかわつて、めまぐる  
 しい諸国の結合、離反、数カ国によるブロックの形成、虚々実々の  
 外交的取引が、世界政治に登場してきた。

あらゆる平和的小ブルの幻想をうちやぶつて、激化する資本の競  
 争は、相互の公然たる衝突と、なによりもプロレタリアートとの決  
 定的な階級の対立をあらわなものとするだろう。

第二次帝国主義戦争とそれにつづく「冷戦」の十数年は、空前の破  
 壊力をもつ原子兵器を生みだした。ブルジョアジーは全面的な原子  
 戦争の勃発をもつてプロレタリアートを威嚇し、スターリン主義主

者はこのことをもって平和共存戦略を合理化している。

帝国主義戦争のもたらす凄惨な結果を阻止するものは、まさに帝国主義に対するプロレタリアートの、非妥協的闘争を措いてはならない。ブルジョアジーの武装解除は、ただプロレタリア世界革命によってのみ可能である。

プロレタリアートのブルジョア支配にたいする闘争なしに協定や、集団安全保障、軍備撤廃などによってのみ帝国主義戦争を阻止しようとするのは、小ブルの幻想でしかない。

今や、プロレタリア世界革命だけが、労働者階級の解放、全人類の解放の唯一の道であることは疑いもなくあきらかとなった。プロレタリア革命と社会主義の客観的諸条件は成熟しきっている。プロレタリアートの決然たる行動に、したがってその指導部の確立に、すべてはかかっている。

わが同盟は、平和共存とソ連邦の生産力の上昇によって世界に社会主義を建設するというようなまったく非革命の見解を認めない。先進国および後進国において、プロレタリアートをブルジョア階級に対する決定的闘争に導き、ブルジョア権力を転覆し、この闘争の中で同時にソ連社会を支配する特権官僚を打倒し、全世界にプロレタリア権力を樹立するために、われわれは全力をあげて闘うであらう。

### 3 日本革命の展望と

#### 日本プロレタリアートの任務

十 日本における資本主義の発展は、先進資本主義国がまさに帝国

義段階に移行しようとする時期に、明治維新によってその端緒がきりひらかれた。

極東市場、とくに中国の支配をめざした先進資本主義国のはげしい競争は、若い日本資本主義にも重圧となっておしかかった。

これらの先進資本主義諸国間の競争の激化による圧迫と、植民地化の危険に抗しつつ、原始的蓄積の過程を強行した日本の資本主義は、自由な政策を基調とした産業資本主義には成長しなかった。

近代的生産様式の移植、育成は、はじめから官営による機械制大工業によって行われ、それに要する莫大な資金は国家の機構や、特権的な株式会社や機関銀行などを通じて集中された。

移植された大工業は、有機的構成が高く、資本規模にくらべてそれほど大量の労働者を必要とはしなかった。必要とされた労働力も、織維部門などでは、婦女子の労働力を徹底的にしぼりつくすことによってまかなうことができた。それは無産労働者を生みだす原始的蓄積の過程をゆがめ、農業における資本主義的経営の発展をおしどめた。

地租改正の過程で没落した農民は、高い小作料にもかかわらず土地にしがみつき、それに寄生する「寄生地主制」を成長せしめることになった。高率の現物小作料と、それとともに可能となった「寄生地主制」は、けっして封建的あるいは半封建的な生産関係の存在を意味しはしなかった。それは、帝国主義段階に資本主義国となつた日本の資本主義の特殊な状況を示すものにはかならなかつた。

食うにも食えない賃銀と悲惨な労働条件にあえぐ労働者、高額の小作料に悩む貧農の犠牲の上に、蓄積をつづけた日本の資本主義

ることによって、資本主義の決定的危機を無為にむかえることとなつたのである。

十一 極東における市場分割の死闘は、やがて日米帝国主義者の公然たる軍事的対立をまねいた。

一九三一年中国東北部の進出に成功した日本帝国主義は、さらに華北侵略をめざし、一九三七年全面的な中日戦争にのりだしたのである。

日本の軍事的経済的進出、とくに、アメリカをはじめとした列強の支配する西太平洋市場への脅威は、全面的な太平洋戦争となつて爆発した。

戦時経済の要請は、日本資本主義に巨大な重化学工業の発展をうながした。これらの部門への進出は、龐大な固定資本の調達にこたえる大規模な資金の集中を必要とし、財閥の封鎖性を極端たらしめずにはおかなかつた。

国家権力を全面的に動員することによって、日本帝国主義は国家独占資本主義としてみずから確立したのである。

しかし、最大の資本家的富を集積したアメリカ帝国主義者の力量の前に、太平洋戦争において日本帝国主義者は全面的な敗北を喫した。

日本帝国主義の惨敗は、資本主義日本に決定的危機をもたらした。戦時中窒息させられていたプロレタリア運動は、怒濤のような前進を開始した。ブルジョア権力を打倒する日本プロレタリア革命にとつて、決定的闘争の瞬間が迫ってきたのである。

しかし、この闘争を指導した日本のスターリン主義者、「日本共

は、次第に近代的帝国主義としてみずからきたえあげていった。それは、国家の支援による原始的蓄積をテコとして、はじめから政商的利権を基礎とする株式会社として出発し、持株支配会社を頭にいたしながら、銀行を中心に封鎖的結合を強めた財閥コンツェルンという特殊な形式で確立した。

天皇制権力は、ブルジョアの支配の中心としての本質を、しだいにあきらかにしていった。

しかし、第一次帝国主義戦争で、帝国主義諸列強の闘争の間隙をぬって漁夫の利をえた日本帝国主義も、増大していく労働者階級の反抗と激化する市場争奪戦の中で、みずからの延命をますます必死にあがきとめざるをえなくなった。

明治年間に獲得した朝鮮を足場に、軍事力を背景にした強盗的な進出が大陸市場へ、開始された。

第一次大戦の比較的順調な資本蓄積の過程が生みだしたデモクラシー運動と政党政治は、上からの公然たる軍事的警察的独裁によっておきかえられた。

それは、明確な革命的展望をもちえなかつたが果敢な闘いをもって反抗をつづけてきたプロレタリアートの戦闘組織を、野蠻に殲滅しつくすことによってなされた。

第二次大戦前「日本共産党」は、国際的なスターリン主義的誤謬の一翼として、日本資本主義にたいする明確な闘争の方針を欠いており、ブルジョア民主革命の完遂の後に社会主義革命に進むという誤った戦略路線に立っていた。そしてきわめてセクト的な実践の方針は、帝国主義戦争の前夜においても、広汎な労働者階級を反帝国争に結集することを不可能にし、みずからも、弾圧の前に壊滅し

産党」は、二段階戦略に固執して、日本資本主義の打倒について徹底的な闘いの方針をつねに欠いたばかりでなく、第二次大戦を「反ファシズム戦争」と考える無内容な規定から、支配者米占領軍を「解放軍」とするような誤りさえ犯していた。

彼らは四七年二月一日ゼネストをおしとどめ、さらに地域人民闘争をはじめとした右翼的議会的主義的戦術によって労働者階級の闘争を混乱させ、資本家階級の危機からの脱出と立直りを助けた。

資本家階級は、国家独占資本主義として、新たな支配体制をととのえ、さらにプロレタリアートの闘争をきりくずすために、農地改革によって、大きな自作農をつくりだして農村の市場を開放的なものとし、さらに天皇制権力を背景にひつこめ、人民にブルジョア民主主義的権利をあたえる一連の措置をとった。

このような方向は、第二次大戦での仇敵日本の弱体化をねらうアメリカ帝国主義者の意図とも一致した。

しかし、敗戦、占領という事実が、日本ブルジョアジーにいくつかの後退をよぎなくさせたとはいえ、日本資本主義の合法的発展を無視したアメリカ帝国の専横なふるまいや、「全一的支配」の結果はしななかった。むしろ、アメリカ帝国主義者の占領政策は、「民主化」の擬装のもとに、日本資本主義の合法的発展を促進した。財閥の解体は、国家独占資本主義的發展が、財閥の封鎖的性格を解消せしめる方向に進むことをはやめ、徹底化した。各種の国家による資金の援助は、戦争経済によって推転を必然とされていた国家独占資本主義の機構を保存せしめようとする意図からでたものにほかならなかった。

「社会党」片山内閣も資本家の利益を代表して、国家独占資本主

義的再建を忠実に推進したのである。

四六、四七年の高揚期を社会党、共産党の裏切りによって失った日本プロレタリアートにたいして、危機をきりぬけたブルジョアジーは、四九年から資本家的安定をめざした決戦をしかけてきた。

この時、無為に決定的時期をすごしたとはいえ、日本プロレタリアートは十分な階級の戦闘力をもっており、ブルジョアジーの攻勢を撃破してさらにブルジョア支配そのものを打ち倒す闘争に進むことは十分可能であった。

しかし、「日本共産党」の採用した「産業復興闘争」の方針と、ストライキまで抑制する極端な右翼戦術は、プロレタリアートに無惨な敗北をよぎなくさせたのである。

いく万という戦闘的労働者が社会民主主義者の恥すべき「民同」運動に助けられて工場を追われた後、総潰走の時期にもひとしい敗北の五〇、五一年に、日本共産党は一転して極左的戦術を階級闘争にもちこんだ。一揆的で、戦略的には右翼の本質に貫かれた「火焰ビン戦術」は日本プロレタリアートにはかり知れない損害をあたえてしまい、ブルジョアジーは易々と自己の再建をすすめ、朝鮮での米帝国主義者の軍事的冒険に協力して、一挙にその力量をつよめ、新たな資本主義的發展の方向をとるにいたったのである。

十二 一応の政治的安定をかちとった日本ブルジョアジーは、アメリカブルジョアジーとの間に、帝国主義的な階級同盟を結び、経済的力量強を化して、ふたたび海外市場への進出と一大帝国主義への飛躍を夢みている。

国家独占資本主義は、租税や零細な国民預金を源泉とする長期か

つ低利の国家資金を、主として、動力、輸送、重要輸出品を生産するような巨大独占資本に、設備資金として融資する機構を確立する。このもとで巨大独占資本を中心とした蓄積は、ますます進行した。

日本資本主義は、すでにその生産力において、戦前に数倍する実力をもつにいたった。

しかし、激化する海外市場争奪戦の中で、アメリカ、イギリス、西独などの競争戦にかちぬくためには、日本資本主義は、なによりも徹底的な設備の近代化を完遂し、労働者階級を一層強く資本の支配にしぼりつけなければならない。

五六、七年から全産業で開始された一連の合理化計画は、このようならぬ進められて進められている。

その上に、彼らは、自己の政治、軍事両面でも一流の帝国主義強国としての体制をかため、東南アジアなどへの資本輸出をはじめとした経済的進出をめざしている。

労働者階級にたいする政治的抑圧は、彼らの支配を上から強化するための彼らの攻勢としてはげしくなってきた。

彼らはまた、戦後の労働者階級の闘いの高揚の中でよぎなくされたプロレタリアートへの政治的譲歩を、ふたたび奪いかえそうとして虎視眈眈としている。

資本家階級は、アメリカ帝国主義との同盟をさらに対等なものに修正し、かためて、自己の階級支配維持の重要な要因としながら、自力で進出を開始している。

日本帝国主義の危険な侵略的本質は、すでに歴史的に証明済みである。

日本帝国主義の海外への膨脹と、国内での支配体制の強化の道を阻止するもの、それは資本家階級への非妥協的闘争を通じて、帝国主義の支配そのものを打倒する労働者階級の闘争以外にはない。すべての社会的矛盾の根源、資本主義を止揚し、社会主義的生産を組織することは、日本プロレタリアートにとって直接の日程となつたのだ。

日本プロレタリアートは、明確に、自己の階級的目標として資本家の収奪と社会主義の建設をかかげて、日本ブルジョアジーを打倒する革命の勝利のため闘わねばならぬ。

プロレタリアートは、この闘争の中で、農民をはじめとした中間的諸階層を味方にひきつける現実的努力をはらわねばならない。しかしプロレタリアートは、ブルジョアジーに対する闘争において、自己の階級的力量以外に、基本的にはなにもものをたのむことはできない。プロレタリアートが独力でも非妥協的に闘うとき、はじめて農民をはじめとした中間諸階級も、プロレタリアートに味方する可能性が生まれるであらう。

日本プロレタリアートは、ブルジョア支配の道具、ブルジョア議會を、革命にいたる闘争の過程で積極的に利用しつつ、しかし最終的にはその粉砕とプロレタリアートの独裁権力ソヴィエト政府の樹立のために闘わねばならぬ。ソヴィエトは、労働者が各工場を基礎に、一定比率によって選出した代表を基軸とし、地域別産業別に、一般人民層をふくめつつ組織される。ソヴィエトは、単なる立法機関ではなく、同時にすべての政治的、経済的行政機能を果す行動機関である。そこでは、行政機関勤務者に対する人民の下からの点検の自由とリコール権が保証され、彼らの報酬は一般労働者の水

準に定められる。こうして労働者階級は、完全に政治の疎外から解放されるのである。

勝利せる日本プロレタリア権力は、ただちに次の政策を遂行し、全世界の社会主義革命の尖兵の任務を果さねばならない。

- (1) 一切のブルジョアの弾圧措置の撤廃。
- (2) 自衛隊・警察・公安調査庁・海上保安庁などのブルジョア権力機関の解体。
- (3) ブルジョア裁判制度の廃止と裁判官の民主的選挙制の確立。
- (4) 労働者の武装による民兵組織。経過的なものとして、位階制の存在せぬ陸・海・空赤衛軍の建設。
- (5) 労働者階級の政治活動の完全な自由。労働者階級の集会・言論・出版・結社の自由とその経済的保障。労働者のストライキ・街頭デモの完全な自由。
- (6) ブルジョア反革命の粉砕。
- (7) 労働者政治犯の即時釈放、一切のデッチ上げ事件の責任の追求。通信・報道機関の国有化と労働者管理。
- (8) すべての重要産業の国有化と労働者管理。
- (9) 金融機関の全面的国有化と労働者管理。
- (10) 商業の消費組合組織による全面的国家管理。
- (11) 貿易の全面的国有化と労働者管理。
- (12) 労働時間の短縮、大巾賃上、労働量による配分の原則の漸次的導入。
- (13) 賃労働の廃止をめざす。
- (14) 機械・化学肥料・農業などの技術援助と国家資金援助によって

農村に社会主義的共同生産を組織する。  
農業労働の分野でも労働量による分配の方向を強化する。  
工業生産の発展と都市と農村の結合により農村人口の工業生産への吸収をはかる。

- (13) 小手工業層の社会主義的組織化を物質的技術的に援助する。
- (14) 基幹産業を中心とした社会主義的計画経済の組織。
- (15) 資本家の所有地邸宅その他の財産の無償没収。
- (16) いっさいの秘密外交の公開、秘密条約の破棄。
- (17) 外国資本の投資、借款の無償没収。
- (18) 軍事基地をはじめとした外国施設の接収。
- (19) 全世界プロレタリア革命のための外交政策の推進。
- (20) いっさいのブルジョアの諸法規の廃棄。
- (21) 男女差別の全面的撤廃。
- (22) すべての医療機関の無償利用の確立。
- (23) 疾病者、老人、小児への完全な社会保障制度の確立。
- (24) すべての教育の国家管理とその無償化。
- (25) 教育の生産的活動との結合。共産主義教育の普及。
- (26) 科学的研究の完全な自由と、科学者の自主的研究のための物質的援助。

日本におけるプロレタリアートの闘争は、全世界のプロレタリアートの闘争、とくにアメリカ、東南アジアのプロレタリア運動と強く結びついている。

日本プロレタリアートは、世界革命の遂行のため自己を世界プロレタリアートの城塞とし、とりわけ、アメリカ、東南アジアのプロレ

タリア革命の勝利のため、直接援助の手をさしのべねばならない。

それはまた、ソ連邦、中国、朝鮮のプロレタリアートの官僚支配打倒とプロレタリア権力復活のための闘争に協力し、まさに全世界のプロレタリア革命の尖兵としての光栄をになわねばならない。

#### 4 真のプロレタリア前衛を組織し、 共産主義者同盟を強化せよ

十三 労働者階級は、自然発生性に頼っているあいだは、自己を解放することができない。労働者の階級意識は、資本主義の下ではただちに明確な単一の階級意識によって貫徹されることはない。したがって、労働者階級は自己を解放するために、階級全体から組織的に独立し最高の階級の意識によって武装された前衛組織の指導によって、はじめて革命を達成することができるのである。

ロシア十月革命の勝利は、ただ、このような前衛組織、ボリシェヴィキ党の指導によってのみかちとられたのであり、正しい革命的方針の下に結集して、自己の全生活をプロレタリアート解放の事業に捧げ、階級的自覚にもとづいて活動する職業革命家を中核とする前衛組織の存在こそが、革命を現実的に勝利させることができるのだ。

日本革命の勝利が、既存の前衛政党の日和見主義を打倒する新しい前衛政党の成長によって可能となると同時に、全世界プロレタリア革命は、モスクワを中心とする既成の諸国共産党に代る、真に革命的意識に貫徹された、新しいインターナショナルを必要としてい

る。

最初、プロレタリア世界革命のための革命組織として出発した第二のインターナショナルが、世界資本主義の帝国主義段階への突入とともに、日和見主義の組織に墮し、レーニンがこれの打倒を通じて第三インターナショナルを結成した教訓を学んで、わが同盟は、今日公認の諸国共産党が、国家独占資本主義の下で、まったくの改良主義的組織に転落したことを弾劾し、明日といわず、今日にも新しいインターナショナルを結成するために活動するであろう。

スターリン主義官僚に対する国際的な左翼反対派として、一九三八年に登場した第四インターナショナルは、スターリン主義に対するトロツキーの弾劾的革命的性にもかかわらず、今ではまったく、トロツキーの理論的組織的欠陥を一層拡大したものととして、現実の階級闘争において世界プロレタリアートを指導する上で決定的に無力である。

わが同盟は、公認の諸国共産党の影響の下にある革命的労働者を日和見主義から解き放ち、第四インターナショナルあるいは独立左翼組織の下にある革命的労働者との行動における革命的統一のために努力し、新しいインターナショナルを急速に組織するために全力をあげて闘うであろう。

だが、われわれは、日本革命の勝利をからとる革命的実践なしに新しいインターナショナルを語るほど非実践的ではない。わが共産主義者同盟は、プロレタリアートの力量の世界的高揚こそが、新しいインターナショナルの現実的基礎であることを、かたときも忘れな

十四 日本における既成の階級政党はすでに、完全に労働者階級の指導部としての資格を失った。

社会党は、そのおびただしい中間的構成分子にみられるとおり、中間的・妥協的性格をその特色としている。この党は一貫した動揺と日和見、平和主義および議会主義によって完全に毒されている。左派は、ブルジョアの手先である右派と党内において絶えず争わねばならぬ状態である。現在、労働運動の主流を占める党内左派も、完全な社会民主主義的性格をもっており、つねに労働者階級の利益を裏切り、その階級の成長を阻んでいる。

日本共産党は、コミンテルン日本支部として結成されて以来、多くの革命的前衛をその隊列に加えながら、その国際權威主義と盲従主義とによって、裏切りのな国際共産主義運動の道とともに進んできた。

世界革命を放棄して一國社会主義建設を強行した結果、歪曲された過渡期を絶対化することになったソ連邦に、物質的基盤をもった国際共産主義運動の日和見主義は、同時にこの党をも毒した。

三二年テーゼの誤った二段階戦略に導かれたこの党は、戦後四六、四七年の革命の高揚の時期に、救いがたい右翼日和見主義によって日本プロレタリアートを混乱におとし入れ、四九年の決定的戦闘にプロレタリアートを無惨な敗北へとみちびいた。さらに突如としてこの党が採用した極左冒険主義戦術は、日本プロレタリアートに致命的打撃を与えたのであり、五五年以来は、反対に、極端な右翼的思想と戦術によって、日本プロレタリアートの革命性を眠りこませている。そして現在では、平和共存にもとづくブルジョアジーに対する中立の政策で、その裏切りを完成している。

はしない。

共産主義者同盟の組織原則は民主集中制である。組織の強化は個人の利益に優先する。一切の非階級分子、怠惰な臆病者がその隊列に加わることは許されない。

共産主義者同盟の組織の規律は、個々の同盟員の階級的な主体的自覚によって維持される。われわれはこれらを保障するために、常に正しい政治方針を打出すことに全力を集中する。

同盟員の階級的自覚、自己犠牲の精神および政治方針の正しき、この下での労働者階級との固い結合、これが組織を強化するただ一つの保障である。

われわれは、同盟内における理論上、方針上の原則的な対立に意見交換の完全な自由と一切のあいまいな妥協を排する徹底的な討論によって前進していくであろう。この際にわれわれは、プロレタリアートの利益を一切に優先させるといふ原則にたつて、つねに行動の統一を守らねばならない。

日本プロレタリアートは、その数十年にわたる闘争の中で、ついにただの一度も正確な指導と戦術をみずからのものとするできなかつた。スターリン主義のドグマは日本プロレタリアートの貴重な闘争をつねに重大な損失におきかえてきたのである。もはや、だんじてわれわれはこうした現状に甘んじていることはできない。共産主義者同盟を、あたらしい真の前衛党として全国のすべての工場に組織することこそ、日本プロレタリアートを勝利にみちびくただ一つの保証なのだ。

全日本のプロレタリア同志諸君！

今こそ、公認指導部の日和見主義を打倒し、世界プロレタリア社

この党は、現在、官僚主義とセクト主義とによって党内のヘゲモニーを確保している部分と、党内反対派との派閥抗争をくりかえしている。

党内反対派は、世界資本主義の國家独占資本主義への推転にもなり國家の「公共的性格」の増大に眩惑され、一握りの独占に対する国民的な統一戦線という没階級的な戦術を採用し、議会を利用して社会主義へ平和的に移行するという現代の改良主義・構造的改良派の立場にたっている。

日本の戦闘的プロレタリアートは、もはや断じてこれら公認の指導部の枠内に止ってはならない。既成の階級諸政党の日和見主義とさっぱり断絶することは焦眉の急務である。すでに、日本共産党内の下部の革命的労働者は、党中央の官僚主義者の弾圧の中で、労働者階級の真の利益のために闘おうとしている。われわれは、彼らの革命化を援助し、日和見主義打倒のために協力して前進するであろう。

共産主義者同盟は、日本プロレタリア革命を指導する新たな階級政党となるために、みずからをきたえるであろう。

共産主義者同盟は、プロレタリアートの真の前衛部隊として、ブルジョア階級に対する戦闘精神で武装され、プロレタリアートの現実の闘争の先頭にたつて闘うであろう。

十五 われわれは、プロレタリア革命以外に資本主義を爆破する道のないことを高らかに宣言する。既成の階級諸政党にたいする共産主義者同盟の態度は、すべてここからでてる。われわれは、プロレタリアートの真の階級の利害以外のなにもをも、自己の利害と

会主義革命の目標をはっきりとみつめ、新たな前衛の結集と、正しい指導の確立のため全力をあげて闘おう。

今こそ、共産主義者同盟の旗の下、新たな真のプロレタリア前衛組織に結集せよ。

万国の労働者団結せよ！

新たなインターナショナルを結成せよ！

帝国主義を打倒せよ！

プロレタリア世界革命万才！

革命的マルクス主義の旗の下、共産主義者同盟に結集せよ！

一九五八年八月 東京

共産主義者同盟第三回全国大会

# 共産主義者同盟規約

(一九五九年八月 共産主義者同盟第三回大会で採択)

## 前文

同盟の目的は、ブルジョアジーの打倒、プロレタリアートの支配、階級対立にもとづくブルジョア社会の止揚および階級と私的所  
有のない新しい社会を建設することにある。

同盟は一国の社会主義建設の強行と平和共存政策によって世界革命を裏切る日和見主義の組織に墮落した公認の共産主義指導部(スターリン主義官僚)と理論的、組織的にみずからをはつきりと区別し、それとの非妥協的な闘争を行い、新しいインターナショナルを全世界に組織するために努力し、世界革命の一環としての日本プロレタリア革命の勝利のためにたたかう。

同盟は、民主集中制の組織原則に貫かれる日本労働者階級の新しい真の前衛組織である。

同盟は、その目的を実現するために、自由な意見交換と、非妥協的な討論を基礎とし、行動の完全な統一をまもってたたかう。

同盟の規律は、政治方針の正しさを基礎として、各同盟員の階級的な主体的自覚にもとづく、革命への献身と自己犠牲の精神によって保持される。

## Ⅰ同盟員

第一条 同盟員の条件は次のとおりである。

(1) 同盟の綱領と規約を認め、同盟費を納入し、同盟の一定の組織に加わって活動すること。

(2) 同盟の目的実現のための活動を階級的自覚にもとずいて、規約にしたがって積極的に遂行し、これを組織に報告すること。

(3) 同盟のあらゆる事情に関する機密の保持につとめること。

(4) 他のあらゆる団体に関係する場合は、事前に組織にはかり関係した場合は全活動を組織へ報告すること。

(5) 真のマルクス・レーニン主義復活、創造のため努力すること。

第二条 同盟への加盟は、二名の同盟員の推選を必要とし、細胞の承認ののち、一級上の機関の承認によっておこなう。

## Ⅱ同盟の組織

第三条 同盟は、大会、中央委員会、地方委員会、地区委員会、細胞、グループに組織される。

細胞は同盟の基本組織であり、中央委員会は事務遂行に必要な書記局とその長(書記長)を選出する。

## Ⅲ細胞

第四条 細胞は三人以上の同盟員によって経営、学校、地域別に組織される。

第五条 細胞は定期的細胞会議を開いて同盟の方針を具体化し、日常的に遂行しなければならない。

第七条 細胞は細胞委員会を選出し、細胞指導の任にあたらせる。

## Ⅳ大会

第七条 大会は年一回、中央委員会によって招集されるが、中央委

員会の三分の一以上、または同盟員の三分の一以上あるいはこれを代表する組織の要求があるときは臨時大会を招集しなければならない。

第八条 大会は同盟の最高決定機関で、同盟の基本方針を決定し、中央委員会の選出、綱領、規約の決定、改正をおこなう。

第九条 大会は代議員の過半数の出席によって成立し、出席代議員の過半数の賛否によって議決する。

## Ⅴ中央委員会

第十条 中央委員会は少くとも二カ月に一回、書記局によって召集され、次期大会までの間、同盟を指導する任務をもち、その活動を大会に報告しなければならない。

第十一条 中央委員会は、中央委員会の過半数の出席によって成立し、出席中央委員の過半数をもって議決する。

## Ⅵ書記局

第十二条 書記局は中央委員によって互選され、二週間に一回以上書記長によって召集される。書記局は中央委員会の方針を実践し、その活動を中央委員会に報告しなければならない。

第十三条 書記局は必要に応じて各専門部を設ける。

第十四条 常任書記局は、書記局において互選され、各専門部を指導し、書記局にこれを報告しなければならない。

## Ⅶ地方委員会

第十五条 地方委員会は地方会議によって選出され、中央委員会が確認する。  
地方委員会は、当該地方の同盟の活動を指導する。

## Ⅷ地区委員会

第十六条 地区委員会は地区会議によって必要に応じて組織され、その地区の指導を行う。

## Ⅸグループ

第十七条 大衆団体内の同盟委員は、必要に応じて、グループを組織する。

グループの任務は、同盟の目的を達成する方向で大衆団体を指導することであり、グループの指導は各級機関がこれをおこなう。

## Ⅹ財 政

第十八条 同盟の財政は、加盟費、同盟費、同盟の事業収入、寄附などによりまかなう。

加盟費は二百円とし、同盟費は月額二百円とする。

## Ⅺ処 分

第十九条 同盟の条件に違反し、組織に損害を与えた同盟員は、その程度に応じて除名を最高とする処分をうける。

処分はその同盟員が所属する組織が行い一級上の機関にこれを報告し、その決定によって有効となるが、最終的には大会がこれを確認する。

処分をうけた同盟員は大会にいたるまでの各級機関に異議申請を行うことができる。

別記(一) 細則については、規約の精神にもとずいて、中央委員会が別に定める。

別記(二) この規約は、一九五九年八月三十日より効力をもつ。

# 「民主」統一戦線のゆくえ

—世界革命の挫折の教訓—

鐘 木 潔

## はじめに

一九五九年は五一年につぐ日本社会主義運動における大分裂の年として記録されるであろう。日本社会党大会と日本共産党東京都党会議はこのことを特徴的に示している。分裂の様相がいかに日和見主義的に歪められていようとも、それが階級闘争の現実に応ええなくなつた彼らの再編成としてあることは、疑う余地のないことである。この分裂を階級闘争の現実との生きた相互連関のなかでいかに真のプロレタリア前衛の確立の方向へと革命的に推進し結果させるかは、真の共産主義者の主体的活動の展開のいかんにかかっているのだ。

労働者党と労働運動指導部の分解は、歴史的にも階級闘争の急速な昂揚、その挫折を反映するものであった。階級闘争の現実的既存の指導部の無能さを暴露し、労働者大衆が彼らに対する冷酷な批判

を開始する時、いかなる労働者党・指導部もその再編成を不可避にされるであろう。だがそれが真の革命的共産主義者によって、革命的に非妥協的に徹底的におし進められた時にのみ、プロレタリアートはその革命的前衛を獲得し確立しうるのだということを、歴史はいくたびとなく示してきた。

五九年を軸として展開しつつある分解は、世界的には世界資本主義が戦後の回復過程を基本的に完了させ、それとともにその政治的表現となつていた平和的協力関係に終止符をうって激しい帝国主義諸国間の対立抗争にとつて代えようとしていることを基礎とする、階級闘争のあらたな発展に基づいている。日本においても、四九年から五〇年にかけてプロレタリアートを無惨な敗北に追いやることによつて体制整備した日本資本主義が、国家独占資本主義として自己を強化しつつ、帝国主義的支配の政策を徹底的に追放しようとした五八年から五九年にかけて、階級闘争はげしく燃えあがった。警職法闘争において一つの頂点に達した階級闘争の昂揚と、その後

の挫折と低迷は、遅々として、進まなかつた指導の再編成に大きな展開力を与えたのである。

労働運動においては、下部の革命的労働者の前進を正しく方向づけ指導しえない左翼の貧困によつて、自己批判のおしつけによる民間の居すわりを許したのであったが、参院選挙の敗北と安保阻止闘争の展開は、社会党の分解を推進し、西尾除名という歪められた形をとりつつもこれを分裂にまで追いやるうとしている。六全協以後の党内闘争の爆発的展開を、しだいに官僚主義的に抑圧し、五八年の七回党大会ではあらゆる下部の批判を黙殺し去つて所感派クイデターを完成させた日本共産党は、その後の党内闘争を「トロツキスト狩り」によつて鎮圧し去ろうとした。しかし、いかなる意味でも労働者の前衛とはいえないこの党が、安保闘争のなかで労働者大衆から完全に孤立していることを暴露した時、党内闘争はあらたな爆発の方向に向つたのである。「現代の理論」に対する驚くべき官僚主義的宗派的弾圧は、この党内闘争の爆発に火を投ずるものとなった。

だが、この大分裂の胎動を、五一年の場合のように不毛に終わらせるのではなくて、革命的方向におしすすめる保障は存在するか。しかり存在する。真に革命的方向に武装された共産主義者同盟の誕生によつて。

共産主義者同盟は、その政治方針を綱領として定式化し、プロレタリアートの革命運動に最大の武器を与え、その綱領のもとに真に革命的労働者を固く結集させるであらう。

その綱領はあらゆる日和見主義から解放されたプロレタリア世界革命の綱領である。

レーニン死後、公式の国際共産主義運動からプロレタリア世界革命の綱領は消え失せた。プロレタリア世界革命がドイツで敗北し、プロレタリア独裁がロシア一國で孤立して以来、これを合理化した一國社会主義論と二段階革命論は二〇年の革命の敗北の上に、二八年コミンテルン綱領として定式化された。一八年にレーニンによつて起草されたロシアボリシェヴィキ党綱領は歴史から抹殺された。同時に、公認の国際共産主義党の綱領は、プロレタリアート解放闘争の武器から桎梏に転化したのである。

二段階革命戦略と一國革命戦略は、恐慌とファシズムと戦争の一連の危機における闘争によつて決定的にその破産が宣告されているにもかかわらず、今日でもほとんど無批判的に継承されている。

上から与えられたスターリン批判によつて国際共産主義運動の一枚岩的団結に生じた亀裂にそつて、現代世界の分析にもとづくあらたな戦略の検討は開始された。だが、イタリア共産党の綱領宣言に見られるように、スターリン主義の絆に救いがたく結ばれているゆえに現代資本主義の現象的把握とあいまつて、国家独占資本主義段階における日和見主義を完成させてしまった。

スターリン主義からの解放を誇称し、たしかに二段階戦略と一國革命論を清算した綱領は、主要な資本主義國でプロレタリア運動に支配的力を獲得してはいない小集団によつて提出されている。だが、それらは、現代資本主義と階級闘争の現実に対する具体的マルクス主義的分析を決してなしえず、トロツキーの過渡的綱領の無批判的教条主義的適用にとどまることによつて、同じ日和見主義への転落を決定づけられている。

今こそ、真に革命的な定日和見主義から解放されたプロレタリア

世界革命の綱領が要求されている。

もはや左派社会民主主義者の綱領とかわるところのないところにまで落ちこんだ公認の国際共産党の綱領は、フランスプロレタリアートに歴史的大敗北を与え、闘うアルジェリア人民を孤立させ、イラク革命の人民的エネルギーをブルジョア支配強化の方向に導いた。二段階革命戦略と民族主義を極端にまで発展させた日本共産党の方針は、安保改定阻止闘争の最大の障害となっている。

闘うプロレタリアートに革命への武器を与える、プロレタリア世界革命の綱領は、一刻も早くプロレタリアートの手に握られなければならない。

## 第一章 第一次帝国主義戦争と日和見主義

### ——祖國擁護と二段階革命論——

#### 二

世界プロレタリアートが、真の革命の武器としての綱領を確立する歴史は、日和見主義との非和解的闘争の歴史であった。

国際共産主義運動の歴史において、日和見主義の一体系との闘争が、もつとも重要なものとして登場したのは、一九世紀末から第一次大戦にいたる過程であった。それは、エンゲルスの直接的指導の下にあって、世界最大のプロレタリア党として名実ともに王者の地位を占めていたドイツ社会民主党の内部において、エンゲルスの死の翌年から、ベルンシュタインの提起よって開始された修正主義論争に端を発するものであった。

一九世紀末年のドイツ資本主義の展開がもたらした種々の変化をとらえたベルンシュタインは、富の分布状況の変化(株式会社によ

る資本の細分化等)、窮乏化論の批判、新中間層の増大、農民問題、世界市場の拡大・信用制度・カルテルの発達などによる一般的大恐慌の否定、等々をもってマルクス主義の修正を要求したのである。そして彼が具体的にドイツ社会民主党の綱領に変更を要求したのは、党内にはプロレタリア以外にまだまだ活動的分子もあつて、彼らはしばしば党に対して非常な貢献をなしつつある。この強調と、ほかならぬ民主主義の重視であり、そしてプロレタリア独裁の拒否であつた。

カウツキー、ローザ・ルクセンブルグなどによって展開された修正主義闘争は、約十年にわたる論争の後、論争としては勝利した。だが、その内容は、「ベルンシュタインは、歴史的情勢の一次的諸条件を一般的法則にまつりあげている」「ベルンシュタインが、伝統的革命的文句と現実的改良の見解との対立と考えられているものは、これまでの現代生産方法(資本主義)の現象全体から創り出された見解と、現象中のほんの一つを考慮してもちだされた見解の対立にはかならない」「(ベルンシュタインと社会民主党の綱領)カウツキー・一八九九年」といった論駁の仕方であり、具体的に、窮乏化に対しては相対的窮乏化の対置、新中間層・農民問題についてはその分解・没落の必然性、恐慌回避可能論に対してはその不可避性、民主主義論に対しては「彼は民主主義の本質について不当な見解をもっている」とするに止まつたのである。それは、いわば新事実の強調による修正要求に対して、「本質は不変である」として闘つたのである。

だが、このような論駁自体は、けつして日和見主義の根柢に導く力を持ちえなかつたであらう。なぜなら、これら修正主義者たちが

マルクス主義修正を要求する基盤となつたものあらたな現象は、敵として存在したのであり、こうした現象に対するマルクス主義的分析と、それにもとづく真に革命的なプロレタリアートの闘争の戦略・戦術を対置することなしには、彼らの在立基盤そのものを粉砕することはできなかつたからである。

#### X

#### X

ベルンシュタインの修正主義を生んだ土壌は、一九世紀七〇年代から急速に展開したドイツ資本主義そのものによって与えられていた。一八三四年の関税同盟成立の後に、一八七一年ビスマルクの下にはじめて国家的統一をなしたドイツは、すでに「世界の工場」として産業資本主義を確立していたイギリスに対し、後進国として出発せざるをえなかつた。資本主義的生産方法の導入そのものが、すでに一定の資本の有機的構成の高さをもつたものとして導入せざるをえなかつたという事情は、イギリスにあつては商業資本による小生産者の分解・収奪という形で展開された資本の原始的蓄積の過程を、いわば産業資本自身がおこなわざるをえないものとした。

このことは、一方ではとくにこの当時から開始された重化学工業の急速な発達とそれともなう固定資本の巨大化とあいまって、これまでとは異つた資本の蓄積様式を展開させた。すなわち、産業資本主義の下にあつては、個別資本の直接的生産過程における剰余価値の蓄積と、これと個別資本の循環の過程に生じる遊休資金を金融機関に集中して貸付資本となしたものと合体によって行つた資本の蓄積を、さらに広く社会に散在する資金を集中して資本調達をなし、巨大化した固定資本への投資をおこなう、という株式会社様式におきかえた。そしてこの株式会社の成立を基礎として銀行資本と

産業資本のあらたな組織的結合が生みだされ、いわゆる金融資本が形成されたのである。

同時に他方では、原始的蓄積の過程がとびこされたことによつて小生産者の分解が徹底的にはおこなわれなかつたばかりでなく、資本構成の高度化が個別資本の制約からある程度解放されて急速に進む結果、相対的過剰人口の形成はいちじるしく促進せられ、分解は阻害され、高度に発達した金融独占資本とならんで、小生産者・農民などの前資本主義的諸関係を未分解のまま維持し、中間層を広汎に生みだすこととなつたのである。

それは、イギリスにおいて一八世紀から一九世紀中葉にかけて、他国を農業国としてとどめながらみずからを「世界の工場」として典型的に展開された産業資本主義とはきあらかに異つた、あらたな段階を画す資本主義の発展であつた。

したがつてその諸現象の解明は、これを産業資本主義とは区別された一つの段階として明確に意識することなしには、はたしえなかつたのであり、新現象に対する「本質不変」の対置、マルクスが資本論で展開した原理論の対置をもつては決定的に不充足であつたろう。

なぜなら、マルクスの資本論Ⅱ資本主義社会における資本の運動法則の科学的解明は、現実の資本主義に存在する種々の不純物を抽象して、もつと純粹な資本主義を想定し、その分析によつて完成されたものであり、それは当時のイギリス資本主義が、産業資本主義として純粹の資本主義に接近する傾向をもつて展開していたことに基礎をおくものであつた。

だが、一九世紀七十年代に開始されたあらたな段階は、もはやこ

のようなものではなかった。産業資本主義は資本主義としての矛盾を自己の内部で解決しつつ前進しうるかのように見える一時期をもちながら、ついにそれをなしえず、あらたな資本と労働力の蓄積様式の確立によって、矛盾の別様の解決をはかるうとしたのであり、その結果としてそれまでとは（したがって資本論に展開された本質論とは）異った諸現象を現出させたのである。

したがって、その科学的解明とプロレタリアートの戦略戦術は、資本論に展開された本質論の直接的対置・適用によって決して充分にはなしえなかつたであろう。そこには、資本論をその規準としながら、このあらたな現象を明確に段階として把えた段階論Ⅱ帝国主義論の確立が必要であり、これを媒介としてはじめて諸現象の解明とプロレタリアートの闘争方向を明らかにしえたであろう。

だが、こうした段階としての把握は、ヒルファードンにもカウツキーにも、そしてまた、ローザにも欠けていた。——ここに今一つの、日和見主義発生の理論的基礎があったのである。二〇世紀初頭の日和見主義は、一方において金融資本を確立した自国ブルジョアジーの独占利潤のおこぼれにあづかる労働貴族の形成と特権的小ブル層にその経済的基礎をもつていたが、他方では、あらたな段階に入った資本主義の生みだす新現象に目をうばわれた「マルクス主義修正」の要求として、またこれに対する段階論的把握を欠除した本質不変論の対置として、二方面に理論的基礎をもたざるをえなかつたのである。

一九一四年に、この段階に入った資本主義の矛盾の解決の必然の手段として、帝国主義戦争が爆発した時、日和見主義者は、あるいは社会愛国主義者・社会排外主義者として、あるいは社会平和主義者

として暴露されざるをえなかつた。カウツキー、ヒルファードン（社会民主党内では中央派Ⅱ社会平和主義者を形成した）も、その運命をまぬかれることはできなかった。「かつてのすぐれたマルクス主義者」も「背教者カウツキー」として論難されざるをえなかつたのである。第二インターの崩壊は必然となり、レーニンの第三インター組織のための闘争が開始されたのであった。

レーニンの「帝国主義論」は、このような第二インターの日和見主義に対して、帝国主義という段階的把握を明確にすることによって闘い、プロレタリアートの闘争の勝利の方向を明らかにするために書かれたものであつたろう。「帝国主義戦争を内乱へ！」が帝国主義戦争に対するレーニンの戦術として宣言された。そして、プロレタリアートの闘争の進展は、レーニンの優位性を立証した。一七年のロシア革命は勝利した。

### 三

だが日和見主義は根絶されはしなかつた。レーニン死後、それはまたたくまに一層完成された形で復活し、世界プロレタリア革命を絞殺したのである。一九二八年にコミンテルン六回大会で採択されたコミンテルン綱領は、二段階革命論と一國社会主義論によって、この日和見主義の輝ける定式化を完成した。この定式化の過程で二段階革命論あるいは労働民主独裁論に対するすべての批判は、世界革命の主張とともに、トロツキズムとして公認の国際共産主義から追放され、二十年代のプロレタリアートの闘争の敗北の責任は合理化され、その後の革命運動の一層の破滅を導いたのである。

二段階革命論の理論的基礎は、すでに明らかにした段階論の欠如

にあつた。すなわち二十世紀の革命運動が変革の対象とした資本主義社会が一九世紀の自由主義時代の産業資本主義とは明らかに段階的に異つたものであるという、帝国主義としての段階的把握の欠如である。帝国主義段階に入った資本主義社会における、国際階級闘争のあらたな展開、帝国主義戦争、階級闘争の変化、とくにこの段階における前資本主義的諸関係の残存、農民層の広汎な存在などに対する、明確な把握とこれにもとづくプロレタリアートの革命的戦術と戦略の確立こそが要求されたのである。

後進資本主義国における広汎な前資本主義的諸関係の残存は、あたかもその国が封建的（あるいは半封建的）社会であるかのような幻覚をうえつけ、ブルジョア民主主義的諸変革Ⅱ主として農業改革を革命の主要課題のように思わせる。したがって、これと並行する資本主義、しかも金融資本主義の急速な発展とプロレタリアートの形成と集中は、その後進資本主義の特殊な現象としてのみ把握られ、プロレタリアートの戦略はそれぞれの民族国家の資本主義の発展段階にしたがっていくつかの型に分けて固定化され、分割されたのである。

コミンテルン綱領は資本主義を三つのグループに分け、革命の性格を図式化した。すなわち、

- 一、「高度に発達した資本主義諸国（合衆国、ドイツ、イギリス等）」「綱領の主要要求・プロレタリア独裁への直接的移行」
- 二、「中位の資本主義段階にある国々（スペイン、ポルトガル、ポーランド、ハンガリア、バルカン等）」ここでは「農業における半封建的關係の著しいかすをもち、社会主義建設のための……最小限の物質的前提をもち、ブルジョア民主主義的変革が

なお終っていない」革命の型「ブルジョア民主主義革命への急激な転化」または「ブルジョア民主主義的性質の広汎な任務をもつたプロレタリア革命」第一の場合にはプロレタリア独裁が直接にはなく、プロレタリアートと農民との民主主義的独裁」からはじまる。

三、「植民地半植民地諸国（中国、インド等）および独立諸国（アルゼンチン、ブラジル等）」。「任務」決定的意義をもつものは封建主義に対し、搾取の前資本主義的形態に対する闘争、農民の徹底的な農業革命および外国帝国主義に対する闘争と民族独立のための闘争」「プロレタリア独裁への移行は、通常、一連の前進段階をへて初めて、ブルジョア民主主義革命の社会主義革命への転化の結果として初めて可能である」

こうして、ごくかぎられた「高度に発達した資本主義国」をのぞいては、プロレタリア革命・プロレタリア独裁の樹立は禁止され、世界のほとんどすべての国において民主主義革命・民主独立革命を強要されたのである。

だが、すでに明らかにしたように、後進国として（とくにイギリスに対して）世界市場に登場した国々での広汎な前資本主義的諸関係の未分解のままの残存、あらたな中間層の形成、中小企業の維持などは、株式会社制度を基礎として成立する金融資本の資本と労働力の再生産・蓄積様式そのもの要求によって必然的に生じる現象であつて、あらたな段階としての帝国主義の段階には一般的に形成されるものであつた。

コミンテルン綱領によって数少ない「プロレタリア独裁への直接的移行」が可能な国の一つとされたドイツにおいて、一九世紀八〇

年代から対農民政策をめぐってドイツ社会民主党の方針に重大な修正を要求する声がかかり、ベルンシュタインをイデオログに見出ことによって修正主義の発祥地となったのは、けつして奇異なことではなかったのである。ライン地方を中心とした西ドイツでの急速な資本主義の発達は、東エルベの旧プロシヤの前資本主義的農業の広汎な維持・残存によって可能となったのであり、イギリス・アメリカに比していちじるしく高い農業人口の構成をもったのである。

日本においても事情はまったく同様であり、なお一層典型的であった。イギリスをはじめとする先進資本主義諸国がまさに帝国主義段階に移行しつつあった時、一八六八年の明治維新によってマニファクトリアも広汎に展開しえない低次の資本主義的發展段階のまま世界市場のまっただなかに投げ込まれた日本は、その資本主義的發展を帝国主義段階における後進国の一つの典型的道を歩まされたのである。資本主義的生産様式の導入は当初からもっとも近代的な有機的構成のきわめて高い機械制大工業の移入によって行なわれ、これに要する莫大な資金は、地租改正・紙幣整理などの国家の支援による本源の蓄積によってつくりだされた。資本制大工業はこうした財政措置によって強行された本源の蓄積をもとにして、官営工業などの国家の殖産興業政策によって、保護育成され、それは政商的利権と結合して急速に株式会社を発達させ、集中を極度におしすすめた。

一方、地租改正は制度としての封建的諸関係を廢棄し土地所有の近代的私有制を確立したが労働力市場の狭隘さは農民の分解を阻止し膨大な過剰労働人口を農村に維持させ過小農経営を普及させた。

こうして農村に堆積した龐大な過剰人口は小農の競争を極度に激

化させ、農産物価格を最低水準に引き上げることによって低賃銀を保障し、同時に小作料を最高限にまでつり上げることが可能にした。寄生地主制が広汎に成立する。

かくして一方には特殊会社を頭にしながら銀行との封鎖的結合を強めつつ高度の集中を短期間に可能にした財閥コンツェルンの成立と、他方には高率小作料のもとでの小農生産の存続と寄生地主制の形成という、日本資本主義を生みだしたのである。それは日露戦争を経て第一次大戦によって最終的に完成された。

戦前、戦後を通じて日本プロレタリアートの闘争に決定的影響を持った三二テーゼは、こうした日本資本主義の、二段階革命論への正確な投影であった。

「今日の日本の条件下にあつては、プロレタリアートの独裁へはただブルジョア民主主義革命の道によるのみ、すなわち、天皇制を打倒し、地主を収奪し、プロレタリアート農民の独裁を樹立する道によってのみ到達しうる。」かくして日本において当面する革命の性格は、社会主義革命への強行転化の傾向を持つブルジョア民主主義革命と規定される」

そして、この三二テーゼの正当化をその政治的任務としたいわゆる講座派は「半農奴制的軍事的金融資本制」「半封建的土地所有制」「半農奴制的零細農耕は、軍事的半農奴制的日本資本主義の基本的規定として現われる」(山田「日本資本主義分析」)という「特殊日本的」資本主義というドグマをつくりあげたのである。

こうして前資本主義的諸関係の揚棄・農業革命の問題、あるいは外国帝国主義の支配の転覆の問題は、帝国主義段階の革命で特殊の

重要性を獲得した。だが、この問題の解決そのものは、それが単にそれぞれの「後進資本主義国」の「後進」たることに起因する特殊の問題としてではなくて、帝国主義段階に入った世界資本主義が必然的に生みだした問題であるかぎり、プロレタリア革命と区別されたブルジョア民主主義革命によって独自に達成しうるものではないのである。それはまさに、この帝国主義の揚棄そのものによって、すなわちプロレタリア社会主義革命の遂行によってのみ可能なのだ。

こうして帝国主義段階においては、プロレタリア社会主義革命しかありえない、という不易の結論が生まれる。

四

レーニン死後の三十年余の国際共産主義運動の歴史のなかで、社会主義革命あるいはプロレタリア独裁を公然と提起したほとんどすべてが、「極左主義」あるいはトロツキズムの名のもとに断罪されてきた。戦後の歴史でもそれは十指に余るであろう。一九四四年フランスにおけるマルティ、ティヨン、同じく五八年の左翼共産主義者たち、一九五十年のインドのラナデブ、一九五九年イラク共産党で除名された左派、日本でも四九年の中西功、五十二・五三年の国際派、そして五九年のわれわれ。そして「トロツキー主義は……農民運動を飛びこえるものであり、権力の奪取の一六勝負」である。(スターリン「トロツキー主義かレーニン主義か」)というスターリンの言葉は、今日の「トロツキズム批判」においてもほとんど口づつしに語られている。

「一定の歴史的條件のもとでは、社会主義革命とプロレタリア独

裁への過程に民主主義的任務を実現する中間段階がありうることを否定し、労働者階級が農民をはじめ他の諸階層を民主主義的同盟を結び、これを基礎として革命的民主主義的な政府や権力が形成されるという思想をいついかなる場合にも拒否し、あらゆる革命がプロレタリア独裁の樹立からはじまると考える点にトロツキーの『革命の力学』がある。」(「前衛」六月号六六頁)

「レーニンは廿世紀の初期、プロレタリアートのヘゲモニーのもとにおいても、来るべきロシア革命の性格を『労働者農民の革命的民主主義的独裁』による独自のブルジョア民主主義革命と規定した」(同、八二頁)

こうして「独自のブルジョア民主主義革命」あるいは「プロレタリアに至る過渡の中間段階」の設定とその権力形態としての「労働民主独裁」は、レーニンの思想に、なかならず「二つの戦術」に帰せられている。

ソ党史(旧版)は「二つの戦術」においてレーニンが「ブルジョア革命期のマルクス主義者の戦術を論証し、かつブルジョア革命と社会主義革命との差異を劃するとともに、ブルジョア革命から社会主義革命への転移期における、マルクス主義的戦術の根本原則を規定した。」とのべている。

たしかに、レーニンが一九〇五年の革命において「ツァーリズムに対する民主主義革命の決定的勝利」を保障するものとして「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁」を提起した。日露戦争のつくりだしたツァーリズムロシアの危機が、一九〇五年一月九日の「血の日曜日」の千余の労働者の虐殺によってはげしく爆発した時、西欧の国々がすでに百年以上も前にブルジョア革命で実現し

た民主主義的課題を直接の要求とした革命が開始されたことを疑うものはなかった。ここでの戦略論争の中心は、この革命は、「ブルジョア革命」であるからそのヘゲモニーは、当然権力の請求者としての自由主義ブルジョアジーに帰するであらうし、また帰すべきである。権力の形態としては、自由主義立憲共和制でなければならぬ、として社会民主党がこの革命のヘゲモニーをとることを拒否し、また臨時革命政府にも加わるべきではない、としたメンシェヴィキの理論であった。レーニンの労働民主主義論は、この「ブルジョア革命」という図式に対して、大膽な革命的方向を対置するものとして提起されたのである。これはすべての共産主義者によく知られた事実である。

だが、同時に十二年後の一九一七年二月革命に際して、この「労働民主主義」のドグマにしがみついた「古参ボリシェヴィキ」たちがメンシェヴィキのみならずエス・エルとまで協同して臨時政府に加わろうとし、「新政府をまったく信頼せず、支持しない。プロレタリアートの武装。ベトログラード・ドーマの即時選挙施行。他党との妥協一切不可。」というレーニンの三月六日の電報と、四月テレーゼが、全ボリシェヴィキの方針となるまでには、十日を越える激烈な討論が必要とされたことも、けっして忘れることのできない事実である。

この「労働民主主義」をめぐって十二年の間に生じたレーニンのまったく異なる態度を、スターリンは民主主義革命と社会主義革命を偶然と二つの段階に区切ることによって説明しようとした。「レーニン主義の基礎」

スターリンにあつては当面する革命をプロレタリア社会主義革命

されることもありうる。(ロシアのネップなど)だが、にもかかわらず、それは疑う余地のないプロレタリア革命であろう。

ブルジョア革命が決してブルジョア民主主義革命以上ではありえないと同様に、プロレタリア革命は断じてプロレタリア社会主義革命以下ではありえない。

これはたんなる言葉の問題ではない。

なぜなら、こうした権力の本質と機能・任務を分離する思想から「人民民主主義革命」(プロレタリア民主主義革命か?)あるいは労働民主主義論の誤りが生まれたからである。

まず革命の任務・目的(当面の)を考え、それが民主的、あるいは前資本主義的関係の廃棄にあるとすれば、それをもって革命の第一段階とし社会主義はその後方においてやられるという二段階革命論の思考方法は、これとわかちがたく結びついている。

「目的——ツァーリズムを打倒し、中世紀的制度の残存物を完全に一掃すること。

革命の基本的勢力——プロレタリアート。

もっとも近い予備軍——農民。

主要打撃の方向——農民を獲得し、ツァーリズムとの妥協によつて革命を一掃しようとしている自由主義的||君主主義的なブルジョアジーを孤立させること。

勢力の配置——労働者階級と農民の同盟。」

(スターリン「レーニン主義の基礎」大月版全集一六六ページ)したがって権力は「労働者と農民の革命的民主主義的独裁」。

このスターリンのみごとな図式は、戦後の人民民主主義革命論に忠実に継承されているのだ。

あるいはブルジョア民主主義革命と呼ぶ時、革命によって樹立された権力がいかなる課題をもち、いかなる任務を遂行するかによってその革命を規定しようとするのである。このように考えると、ブルジョア民主主義的課題(こうした表現そのものがすでにきわめてあいまいなものであり、より正確にはこれまでのブルジョア革命がその任務とした諸課題というべきであらう)すなわち前資本主義的諸関係の廃絶、ブルジョア民主主義諸権利(自由・平等等の基本的人權)の確立などを実現する革命は、ブルジョア民主主義革命と呼ばれるのである。

だが、革命の本質的規定は、あらかじめその革命によって樹立された権力の本質、権力を掌握した階級によって与えられなければならない。ブルジョアジーが権力を掌握するならば、その権力は資本主義的生産を保護発展させ、ブルジョア支配を強化するための諸政策を行うであらう。前資本主義的諸関係の廃絶も彼らの利益・彼らの支配を強化するに役立つかぎりで行うであらう。それは当然である。彼らがその社会の歴史的階級の条件に応じて、そうした課題の遂行を拒否したとしても革命はいぜんとしてますますブルジョア革命である。

逆に、プロレタリアートが権力を握るならば、彼らは一刻も早く階級社会を揚棄して、社会主義・共産主義社会を創造するためにのみ、彼らの政策を遂行するであらう。歴史的条件によってその政策は一樣ではないであらう。ある場合には「ブルジョア民主主義的諸課題」の遂行は、すでに先行するブルジョア革命が完遂した故に、あるいはもはや不用であり直接社会主義的方向へ進むが故に、不必要であらう。またある場合には、ブルジョアの諸関係の復活までもが要求

だが、「中世紀的制度の残存物」そのものが帝国主義段階では、資本主義とわかちがたく結合している以上、その「完全な一掃」はこの資本主義、帝国主義の打倒なしにはかちとりえないのである。この帝国主義の打倒はプロレタリア独裁の樹立によってのみ可能である。

たしかに、このプロレタリア独裁の樹立の闘争は、帝国主義そのものの打倒と同時に、「中世紀的制度の残存物を完全に一掃する」ものであるが故に、広汎な農民層をこの闘争の側に獲得する広大な可能性を与えるものである。プロレタリアートは農民を自己の側にひきよせ、革命の支持者たらしめ、同盟を結ぶことが決定的に重要となる。だが、そのことは、当面する革命の権力を労働民主主義(人民民主主義権力、あるいは連合独裁)とするものではない、けっしてない。なぜなら、第一に「中世紀的制度の残存物の一掃」(それは帝国主義の打倒によって同時に可能となる)を、ブルジョア反革命と断乎してたたかいたが実行しうるものは、プロレタリア独裁しかありえないのであり、それのみがこうした「ブルジョア民主主義的諸課題」の完遂をブルジョアジーの反抗を粉砕しつつ、直接的に社会主義建設に結合できるのである。

第二に、労働民主主義の問題は、「ブルジョア民主主義的諸課題」の遂行が不用か否か、または労働者と農民の同盟が必要か否か、の問題ではない。問題は、農民が独自の政治勢力として(つまり独自の党にその利害を代表させて)プロレタリアートとならんで権力を構成しうるか否か、の問題である。

プロレタリア独裁とは必然的にプロレタリア前衛党の独裁を意味する。同様に労働民主主義は、プロレタリア前衛党と一個の農民党

との連合独裁でなければならぬ。だが、そうしたことは、農民が他の中間諸層と同様に浮動的階層であり、内部にいくつもの階層(富農・中農・貧農等)をもつて独自の統一した層としての利害を定式化しえないものである以上、ありえないことといわざるをえない。農民党がありうるとしても、それはロシアの社会革命党、あるいはハンガリー事件に際しての地主党のごとく、上層農民の党としてのみ存在し、下層農民は労働者とともに労働者党に結集するであろう。

したがって労働者と農民(および他中間層)との同盟関係の権力への投影は「農民に支持されたプロレタリア独裁」以外にありえない。プロレタリア独裁と区別された労働民主独裁は仮空の存在であり、これをもつてブルジョア独裁とプロ独裁の間の中間的過渡的権力を想定し、これに対応して「人民民主主義革命」「プロレタリアートがヘゲモニーをとったブルジョア民主革命」「新民主主義革命」などを二段階的に設定することは、プロレタリア革命をおくらせるものでありえない。

一九〇五年のレーニンの提起した問題は、ブルジョア民主主義革命を社会主義革命の前の一段階として設けることでもなく、プロレタリアートとその党の役割を農民と同等の水準にまでひき下げ労働者と農民との間に(したがってその党内に)なにか恒久的の同盟を結ぶことを意味しなかった。問題だったのは、この「ブルジョア民主主義的任務」の遂行が当面の課題とされた革命において、いかにプロレタリアートのヘゲモニーを確保しつつ、プロレタリアートと農民の間に協同関係をうちたてるか、その党派的形態、政治的方法はなにか、という問題であり、このようにして「革命はブルジョア民

主主義革命であつてその主体はブルジョアである。プロレタリアート農民はこれのヘゲモニーをとりえない(あるいは、とるべきでない)」とし臨時革命政府への参加に反対したメンシェヴィキと闘うことであつた。

だから一九〇六年レーニンはのべている。

「ロシアにおける革命はブルジョア革命ではない。なぜならブルジョアは、ロシアの現在の革命運動の推進力を構成していないからである。」(全集大月版一巻四二五ページ)

「ごんにちの革命で勝利するように社会民主主義的プロレタリアートを援助し、彼らを支持し、またただちに実施されうる変革の限界を規定することのできる階級とは、いったいどの階級か? この階級は……農民である。」(同三八六頁)

レーニンは、民主主義革命と社会主義革命を段階的に区別したり、具体的条件、階級諸関係の生きた現実から離れて労働同盟の形態、その獲得維持の政治的方法をドグマ的に固定する考えとは無縁であつた。このことを理解しえない石頭と、レーニンは同じ「労働民主主義論」を清算するために一七年四月にはげしく闘わなければならなかつたのである。

レーニンの指導の下に、二段階革命論と労働民主独裁は、現実の革命の前進の過程で清算された。

だが、彼の死後、孤立したロシアでスターリンが一国社会主義論を完成させた時レーニンは一九〇五年の革命において権力の本質をその目的・任務との連関と区別を不明確なままに展開し、なおかつ一つの仮設として充分発展させられぬままに展開した「二つの戦術」は二段階革命論と労働民主独裁論の絶対化の典拠とされ、トロツ

キーの「永久革命論」は抹殺されたのである。

## 第二章 恐慌と戦争の過渡期における日和見主義

### ——「社会ファシズム論」と人民戦線——

#### 五

世界革命戦略の放棄と一国社会主義論の確立のうちに、コミンテルンは二八年の六回大会で二段階革命戦略と一国社会主義の綱領を最終的に確定した。世界プロレタリアートはさしせまる資本主義の大破綻とファシズムに対して、この綱領をもつて闘うことを運命づけられたのである。

翌年、大恐慌は開始された。

国際共産主義運動はこの時から約十年の間に、その方針を百八十八度転回させてこの決戦にあつたのである。だが、それはプロレタリアートに勝利を保証する方針だつたらうか。

「……一九二九年のおそるべき危機のあとで、資本主義世界が公然たる反動独裁のファシスト的新形式を誕生させ、全ヨーロッパに深刻な政治危機が生じたときのことである。不動の恒久的な勝利にまではたつしなかつたが、試みはなされた。もつとも知られた試みは、人民戦線政策の時に、旧来の多くの立場を海中に投げ共産党が特定の環境では政府に参加することができるし、またしなればならぬという確信に到達したときになされた。」(トリヤツチ・中央委員会の報告・五六年)

まさしく「一九二九年のおそるべき危機」とそれにつぐファシズムの時代は、世界資本主義の死の苦悶の時代であつたと同時に、なによりも世界プロレタリアートがこの死の苦悶に最後の引導を渡しプ

ロレタリア独裁を全ヨーロッパに樹立するか、さもなければすでに死滅しつつある資本主義が、プロレタリア革命の敗北の上に矛盾のあらたな解決の方法を資本家社会的に見出すことよつて延命するか二度めのプロレタリア世界革命の試金石であり絶好のチャンスであつた。

だが「旧来の多くの立場を海中に投げ」て試みられた人民戦線戦術もプロレタリア革命の勝利を保証するものとなりえなかつたのである。それはこの「危機」に対するまったく不明確な一般的すぎる把握と、これにもとづく指導部の不決断・臆病さ、裏切りによるものであつたらう。

第一次世界帝国主義戦争として爆発した危機に、ロシア革命の成功によつて深くくさびを打ちこまれながら、一八年にはじまつたドイツ革命を二三年に最後の鎮圧し去るのに成功することよつてついにのりきることに成功した世界資本主義は一時的に安定を回復したかに見えた。軍事的に敗北したドイツ帝国主義はドイツ革命の敗北と社会民主主義者の「社会化」「経営協議会」などのスローガンに表明された援助によつて危機をのり切り、一九二一―二二年の一次的景気後退のなかで石炭・鉄鋼業等においてコンツェルン形態による資本の集中を開始し、その後いくつかの再編成過程をへながら急速に少数大独占の形成を完成した。ドーズ・プランはドイツ帝国主義の「安定」の回復を促進し、ヨーロッパには「平和的・民主主義的」一時期が出現したかに見えた。一九二四年のコミンテルン五回大会は、この「平和的・民主主義的時代」がブルジョアの世界反動の一層の尖鋭化または社会民主主義者による改良主義の確立のため

の、民衆欺瞞のスクロガンであることを指摘しながら、同時に「ファシズムと社会民主主義は（その指導層を問題とするかぎり）第一次帝国主義戦争およびこの戦争に対する勤労者の最初の闘争によって弛緩した近代資本主義の右手と左手である」と規定することによって社会ファシズム論に最初の基礎を与え一九二〇年初頃のファシズムに対する潰滅的敗北を準備したのであったが、この戦術の基本になった世界資本主義に対する分析は「この時代は資本主義秩序の不安定、その衰亡、その下降線に沿うた発展の表現である」と表現され、のちに第三回執行委員会総会が定式化した「資本主義の部分的・相対的・一時的安定」というものであった。

だが、この「民主主義的平和主義的」時代の外観は、単に欺瞞としたのみならず、大戦後一時的混乱と危機を革命の敗北によって回避して存在しえた世界資本主義が、自己の体制をある程度順調に回復していく過程を反映したものであった。と同時に、この「安定」した回復と再建の過程そのものは、資本主義の矛盾を一層累積し、未曾有の危機爆發の前提をつくりだす過程でもあった。

産業資本主義段階から帝国主義段階への転化を必然にした株式会社形式を基礎にした金融資本の形成は、すでにのべたように資本間の激烈な競争と重化学工業の急速な発展による固定資本の巨大化が巨大資本の一挙の投入を必要とし、それまでの資本の蓄積様式——すなわち個別資本の生産過程で形成される剰余価値 $\Pi$ 利潤の蓄積とこの利潤と個別資本の循環の過程に生れる遊休資金を金融機関を媒介として貸付資本としてたがいに融通し合うものとの合体によって行うという様式を枠と化し、これにかわる社会的遊休資金を直接的に資本として動員するという株式会社様式をもってし、個別資本

の蓄積という限界を脱して任意の資本額を調達することを可能にしたものであった。

こうして産業資本主義の下では予想もできなかった資本主義の急速な発達が可能になり同時に独占と集中は極度に進んだのである。帝国主義戦争はこうして成立した資本主義の最高の発展段階としての帝国主義の矛盾が鉄の必然性に導びかれて爆發したものにほかならなかった。

だが、固定資本の巨大化諸少と数独占間の激烈な死闘の展開は、戦争のなかで一層促進され（軍事生産などに）、株式会社形式による資本の蓄積、調達の様式をもなお不足とするに至ったのである。

戦後の回復の過程で、資本主義はあらたな蓄積様式を追求したであろう。そこにあらわれたのがいわゆる自己金融方式であった。

金融資本の成立は、すでに所有と経営の分離（一般中小株主と経営資本家）、所有の集中をこえる支配の集中によって特徴づけられていたのであるが、この傾向は株式会社形式の発達・巨大化によって一層推しすすめられ、経営からはまったく分離し金利生活者化する莫大な中小株主層と、一定の資本によって支配権を独占する経営資本家との分離を拡大した。これらの事情は、この大株主をして会社自身の立場からする配当政策の遂行を可能にする。すなわち、利潤の株主への均等分配（一定の留保を残しての）としての配当ではなくて、利潤のいかにあるていど無関係に配当率を一般利子率の水準にまで切り下げ、そのことによって本来は株主に帰属すべき利潤の一部を配当することなしに社内に留保し、資本に転化させる、というメカニズムの成立を可能にするのである。

こうして利潤の社内留保による蓄積、自己金融がはじまる。株式

会社は追加投資に要する資本調達の問題からある程度解放される。他人所有の資本を集中利用するに止まるのではなく、他人所有からの成果そのものも自己のものとして蓄積するのである。株式会社は今や必要な資本を社会的遊休資金の集中によってではなく、自己の蓄積によって調達できるのである。それは、いわば株式会社の本質的特質を極端におしすすめたところに生じた株式会社の自己否定ともいべきものであろう。

ドイツにおいても、アメリカにおいても、自己金融現象は一九二〇年代後半にはいってまだ支配的ではないが注目にあたいする展開を示したのである。

だが、こうした自己金融方式の成立は、これまでより一層巨額の資本を一層容易に投資することを可能にしたのであったが、同時にそれは資本の調達を資本市場の制約から解放されて、資本市場を通ずることをなしに遂行させるがゆえに、矛盾のあらたな拡大をももたらさずにはおかなかった。金融資本のもとではいまだ実現されざる予想独占利潤を基礎にして成立する株式市場・資本市場によって、資本の社会的配分・社会的再生産の社会的規制を行うのであるが、ここではすでに資本蓄積が不断に行われる基礎が存在するために、独占利潤がもつとも高騰する好況末期に固定資本の更新が行われる傾向を強め、やがて新生産方法が生産力化した時には膨大な商品が市場にあふれ価格は下落し、予想独占利潤の実現は不能となって、これを基礎に成立していた株式市場は崩壊する。支払手段調達のための株券の大量売却がおこり、信用恐慌が爆發する。一方には膨大な過剰生産手段、他方には大量の過剰労働力が生みだされる。恐慌は産業資本主義の下では異って、一層深くかつ長期にわたるのであ

る。こうした矛盾を自己金融方式の発展は一層拡大するのである。なぜなら、資本市場の規制からあるていど解放された資本蓄積は、不断の任意の投資をある程度可能にし、不可避的に投機的過剰投資の傾向を強め、また企業間の不均等を極度に拡大し独占と集中を一層促進する。こうして独占の集中と過剰な投資は一般化するであろう。熱狂的繁栄が倍加されるとともに、矛盾の爆發 $\Pi$ 恐慌もおそろべき深刻さとするどさをもつてあらわれる。

一九二九年にはじまる世紀の大恐慌こうしてものであったにちがいない。

それはまさしく「資本主義の死の苦悶」であった。資本市場は、生産の社会的規制と景気の自動調整装置としての機能を完全に喪失した。金融資本は、もはや自己の枠の中ではこの矛盾を処理できないのであり、これを資本主義を維持したまま、解決するためには、これまでとは決定的に異なる諸政策の採用が不可避であった。国家の介入が要請されていた。資本主義はあらたな方向へ決定的に転換するか、さもなければ死してプロレタリアートに屈するか、の二つの道しかなかった。二五年につづく数年の長くつづく不況の時期は、いづれの道をも決めない資本主義の一つの過渡期であり、永続的危機の時期であり、プロレタリアートがこの「死の苦悶」に引導を渡すべき激しい闘争の時でなければならなかった。

世界プロレタリアートが文字通り主要な資本主義国において一挙にブルジョア支配を打倒すべき資本主義の世界的危機は、一七年から二三年にわたる第一次帝国主義戦争が生み出した危機について、ふたたび迫りつつあったのである。

危機の現象の仕方と、したがってそこからの脱出の方策は、それ

それぞれの国の資本主義の強弱、歴史的條件によつて、とくに階級諸關係の状況によつて異なつたであろう。ドイツにおけるナチズムと、アメリカのニュー・ディールは、その両極であつたにちがいない。だが、いずれにおいても明らかでなければならなかつたことはこの危機の解決は、もはや、矛盾を自己の体系内で解決しえなかつた金融資本にかえるに、完全に統括された意識的計画的生産の組織をもつてする以外になつたのであり、そのためにはブルジョア支配の打倒とプロレタリア権力の樹立がなによりも要求されたとい何ことである、この解決の方向に対抗しうるものは、国家権力が再生産過程に直接的に介入することによつて崩壊に瀕した資本主義を支援、あらたな社会的生産の資本家社会的規制の方式を確立することのみであつた。そのためには、プロレタリアートの闘争の徹底的弾圧と組織破壊、および「民主的自由主義的資本家」、時代おくれの利己的資本家の反抗の抑圧が不可欠であり、これを遂行する強力な独裁的な国家権力が要求されたのである。

今や、プロレタリア独裁の樹立が直接の課題となつた。そしてそののみが「永続的危機」の最後の止揚を可能にするであろう。プロレタリア運動の指導部において、このことはなにもまして鮮明に脳裏にやきつけられなければならない。あらゆる幻想は清算されねばならない。

資本主義のあらたな段階に、あるいはあらたな段階への過渡期に、迫りつつある革命を断乎として勝利に導くためには、このあらたな段階における危機に対する明確ないささかのあいまいさも残さぬ認識と、プロレタリア独裁の樹立こそがすべての危機に出口を与えるのだという認識と決意が要求されたのである。

し、農民・都市小市民・中小ブルジョアなどの中間諸階層の分解と動揺は急激に沸騰点に達しようとしたのである。

これまでのブルジョア諸政党に基礎をおく政府は、全社会の根柢まで嵐にまきこむ階級闘争の過熱化のなかで極度に不安定なものにならざるをえなかつた。事実恐慌からヒットラーの勝利にいたる間の政府はブリーニンク(三〇〜三二年四月)パーベン(三二年四月〜同年一月)シュライヒャー(三二年一月〜三二年一月三一日)としいだいに短命になつていった。こうした政府の弱体化は国家独占資本主義的諸政策の遂行を不能にするであろう。——こうして、ファシズムが権力に接近する道が準備されたのである。二〇年代のはじめから熱狂的愛國民族主義運動として展開されてきたナチスの運動がここにいたつてブルジョアジーの支持を獲得したのである。ナチスの政治的任務は、今や一方ではこれまでの諸ブルジョア内閣が意図しつづつ果しえなかつた経済諸政策の遂行であり、他方では、分解と動揺の中で急進化しつづつある中間層をデマゴギー的スローガンのもとに組織化し、これをもつて生死を賭した激しい闘争に立ちあがりつつあるプロレタリアートに直接に対抗せしめ、プロレタリアートの闘争と組織をせん滅することであつた。

したがつてファシズムに対するプロレタリアートの唯一の闘争戦術は、全労働者階級の階級の統一行動の組織、その非妥協的遂行によるファシスト政権の阻止、プロレタリア権力の樹立でなければならぬ。階級の統一闘争は、首切り反対・賃下げ反対など経済的日常的諸要求によつて開始されることもあるであろう、だがそれすらも、こうした危機の中では国家権力との衝突を不可避のものにするのであり、戦闘的意識的プロレタリアートはいかなる闘争に際して

だが一九三〇年代の階級闘争の展開とその壮大な敗北は、彼ら指導部にこの認識と決意がまったく欠けていたことを数百万の革命的プロレタリアートの血の犠牲によつて暴露したのである。

## 六

第一の決戦はドイツで闘われた。

ニューヨーク株式市場の崩壊にはじまつた二九年の恐慌は、ドイツ資本主義に一層深刻な打撃を与えた。一九二八年を一〇〇として鉱工業生産指数は三〇年八三・六、三一年一月には六七・八、そして三二年三月には三五・三にまで下落し、換業率は同じく三二年に三〇％台に低落した。これに反比例して失業人口は急激に増大し二九年に二四％だった失業率は三二年には七二％にものぼつたのである。あきらかに恐慌は金融資本段階の過熱化した矛盾を反映して老大な過剰設備と過剰労働力として現象したのである。ブルジョアジーの経済政策は必然的に国家の介入の方向に導かれた。独占利潤維持のための大規模な生産制限、徹底的合理化の遂行、独占価格政策による価格つり上げ、中小企業からの信用の引上げによる巨大銀行・産業への信用の集中的援助などを行い、さらに巨大独占を救済するために政府は特別の信用を与え、発注によるいわば国家市場をつくり出し、関税・租税・為替の引きを行ひ補助金を与えるなどの国家独占資本主義的政策を広汎に展開したのである。

だがこうした諸政策の遂行は労働者に対する露骨な収奪強化、農民の破滅、中小企業資本家の零落に直接に結果し、このことが同時に国内市場の狭隘化に拍車をかけ矛盾を一層尖鋭化させたのである。プロレタリアートの闘争は自然発生的にも激化せざるをえなかつた

もプロレタリア権力への展望を不断に追求しなければならぬのだ。そして、この危機の解決は、資本主義の枠内にとどまるかぎりいかなる「民主的政府」によつても、ナチスと同様の国家資本主義的政策の採用なしには不可能であり、真に人民的方向はプロレタリア権力の樹立とそのもとの全般的計画的生産の意識的組織以外にはありえないことを、いついかなる時にも忘れてはならなかつたのである。

この同じ危機によつて零落し動揺し急進化しつづつある老大な中間層に対して、プロレタリアートは民主主義的要求をかかげて徹底的に闘うことによつて、彼らをブルジョアジーあるいはデマゴグたちからきりはなして自己の側にひきつけ、その支持をかちえ、この支持をもつた断乎とした階級の統一闘争によつて、権力にまでつきすまなければならないのである。

これがありうる唯一の革命的道であつた。

「権力をにぎつたファシズムは、金融資本のもつとも反動的な、もつとも排外主義的な、また、もつとも帝国主義的な要素の公然とした暴力的な独裁である」というコミンテルンのファシズムに対する規定(一三回執行委員会、および七回大会)は、「資本主義の一般危機の第三期」(六回大会)という規定とともに、この時代の資本主義の危機の根柢的要因、一つの段階から他の段階への過渡といふ科学的把握には遠いあまりにも一般的すぎる、したがつて階級闘争の指針の基礎とするにはあまりにも無内容なものであつた。共産党の任務に関しては、ファシズム前夜の二八年の六回大会は、帝国主義戦争反対とともに「社会民主主義的ブルジョア労働党」に対し、いよいよ闘争を尖鋭化しなければならぬ」としたにとどまつた

のであり、三一年のコミンテルン第一二回執行委員会総会は「現在すべての共産党が当面している主要な任務はブルジョアジーに勝利するためこの欠かさない前提条件として労働者階級の多数者を獲得すること、労働者階級をプロレタリアートの独裁のための決定的闘争に準備することである」と一般的真理を語った後に具体的には、「あらゆる形態の革命的行動を準備し展開する場合に、社会民主党や改良主義組合の指導者に反対しぜひとも猛烈な、一貫した、全面的闘争をおこなわなければならない」「同時に下からの統一戦線」と結論したのである。

現実の階級の闘争は、この方針の有効性に厳しい検証を要求した。そしてそれはあまりにもたかくついた。

コミンテルンにきわめて忠実であったドイツ共産党指導部の誤謬の累積は、階級的統一行動の組織をあくまで妨げ、ドイツ労働者階級をして、ヒットラーの前に無抵抗の敗北を喫せしめたのである。

二三年ザクセン蜂起にタール・ハイマー、ブランドラーなどの右翼日和見主義的戦術によって敗北して以来、ドイツ共産党は彼らを追放することによって逆に左への偏向を生みセクト主義的傾向を一貫して保持してきたのであったが、二四年のコミンテルン六回大会で端緒的となえられ、二八年の六回大会で確定された「社会ファシズム論」「下からの統一戦線」によって補強されて、当時セクト主義あるいは最後通牒主義のとりことなっていた。三〇年九月四日の選挙でナチは一挙に五〇〇万をまして六〇〇万票をとって第一党社会民主党に迫った。三二年四月プロシヤ選挙でナチは一躍第一党になった。九月にはパーペン・シュライヒャーの緊急令に対して激しいストライキ闘争が展開され、九月一日から一月一日まで二七日間

に六九九のストが一〇万の労働者をまきこんで闘われた。そして一月三日にはベルリンの交通労働者が五日間のストライキに突入した。孤立したストは流血の弾圧に屈したが、危機の一層の深化は明白であった。たるところで武器をとった労働者とナチの青年行動隊との武力衝突がはじまっていた。三二年の七月九日の選挙ではナチは更に七〇〇万をまして一三〇〇万をとりたちまち第一党となり、

これに対して社民党七〇〇万、共産党六三〇万で両者を加えてようやくナチをしのぐにすぎなかった。もはや一刻の猶余も許されなかった。社会民主党傘下の労働者との統一行動の組織によってファシズムを粉砕しなければ、みづからが粉砕されるであろう。——だがコミンテルンとドイツ共産党はいぜんとして「社会ファシズム論」によって統一行動を妨げつづけたのである。選挙の結果が危機の切迫の上もない証拠を提出した直後の九月にコミンテルン第一二回執行委員会は「ただブルジョアジーの社会的支柱たる社会民主党に主要な打撃を支えることによるのみ、プロレタリアートの主要な敵たるブルジョアジーに打撃を加え、これを打ち破ることができらるう」と宣言した。こうして労働者の階級的統一闘争が共産党の「下からの統一戦線」論の固執によってひきのばされている間に、ヒットラーは三三年一月三十一日首相に任命されて権力の座に平和的についたのである。二月二十七日の国会放火事件の陰謀の翌日大統領緊急令が出され共産党は解散され翌日テールマンは逮捕された。社会民主党は六月に、労働総同盟は五月にそれぞれ解散された。コミンテルンが社会民主党と労働組合への統一戦線を決定したのは、党が解散を命じられたのちの三月一七日であった。こうして、世界最強の組織力を誇ったドイツプロレタリアートは、その指導者の無能さの

故に、ファシズムとわずか一戦も交えることなしに、敗北したのである。

プロレタリア革命の再度の敗北の上に、ドイツ資本主義はヒットラーの下で国家独占資本主義へと推転していった。租税免除や租税軽減等の差別税制の採用、強制カルテル立法による独占の強化、配当制限の施行などの経済政策は独占企業の自己金融を急速に展開させドイツ資本主義は危機を脱したのである。ナチスはこの自己金融の進展をもって「金融資本主義の終焉」と唱えて勝利を誇ったのである。

## 七

第二の決戦の舞台はフランスであった。

この決戦を支配した共産主義者の戦術は、ドイツでとられた戦術とはまったく対照的なものであった。しかしこのあらたな戦術は人民戦線戦術は、ドイツプロレタリアートの歴史的敗北を必然にしたコミンテルンドイツ共産党の戦術の厳密な科学的統括、自己批判の上に提起されたものでは決してなかった。

一九三四年、世界恐慌の波及の比較的遅かったフランスでも経済的崩壊は底をつき危機は成熟しつつあった。一九三二年にはじまった農産物価格の下落は一九三四年に最悪の点にまで達し、シエールは拡大し、農民の九割にあたる中小経営者の購買力はほとんど零に達した。大独占企業の「生産コスト引下げ」の強行は、まず労働者の労働条件を極度に悪化させるとともに、中小企業者に巨大独占との競争を不可能にした。こうしたプロレタリアートの闘争は熾烈化しフランス人口の多数を占めた中間層の没落と動揺は深まっていた。

のである。三三年以来右翼諸組織は急速に拾頭し、「アクション・フランス・セリエーズ」「クロワ・ド・フウ(火の十字団)」などは武装した行動団体としてあらわれていた。

スタヴィスキ事件が危機に火を点じた。三二年以来議会で多数をとりながら、財政経済統一綱領について一致することができなかった二つの社会民主主義党(急進社会党と社会党)は、三二年五月から三四年一月までに六つの内閣の交替を余議なくされたように、いちじるしく不安定であり過渡的時期における中間的政府は危機に瀕していた。スタヴィスキ事件は、過飽和に達していた危機に衝撃を与えた。これをいちはやくとらえたのは、従来から「腐敗官吏の肅正」「腐敗議会の一時停止」をスローガンとしていた右翼諸団体であり、今一つは「社会ファシスト」に対する「尖鋭な闘争」を至上命令としていた共産党であった。パリ市内では連日のように両派のデモがうずをまいたのである。そして二月六日ダラディエの信任動議が議会で審議されている時、数万の右翼のデモが議事堂前に結集し、夜に入って暴動化して議会になぐりこんだ。二〇人の暴徒と一人の警官が殺された。このデモには少数の共産黨員までも参加していたのである。共産党はただちにダラディエを「人殺し」として糾弾した。ダラディエは翌日辞職した。ファシストは勝利に一步步近づいたかに見えた。「クロワ・ド・フウ」の頭領ドウラ・ロツクは「最初の目的は達成された」と公言した。——こうして共産党の行った行動は、客観的にはファシストと共同戦線をはり、その進出を容易にしたのである。それはあまりにも公然としていた。多くの労働者は二月六日事件をファシストの暴動と捉え、ファシストに対する闘争の叫びをあげていた。

共産党は「社会ファシズム」論の再検討を要求されたであろう。階級闘争の現実の進行と労働大衆は、すべての労働者党傘下および無党派労働者の統一行動を要求したのである。二月七日、C・G・T(社会党系)が社会党とその他の左翼グループとともに二月二日の二四時間ゼネストを呼びかけた時、共産党は「まだダラディエを」人殺し」と呼びつけていたのだったが、九日にいたって、C・G・T・Uも(共産党系)も「ゼネストへの参加を決定した。ゼネストはほとんど完全に遂行されデモンストレーションとして空前の成功をおさめた。社会民主主義者と共産主義者は別個に集合し行動したが、パリでは実際には合流した。こうして、はじめての統一行動が組織されたのである。この日以来あらたな戦術・人民戦線戦術は現実の歩みを開始した。七月二十七日、数回の交渉の後に社会両党の間には「行動統一協定」が調印された。コミンテルンはモスクワの外交政策の変化(ドイツとの絶縁とフランスへの接近)にもなつて、七月の執行委員会幹部会でこの戦術にはじめて承認を与えた。

数カ月前とはうってかわつて、「統一」がスローガンの先頭に立つた。トレーズは率先してこの社共の「共同戦線」をさらに左派諸派にまで拡大しようと努力し、三五年七月には急進社会党左派までを含む「反ファシズム人民戦線」の結成に成功した。この年の革命記念日七月一四日のバスティユ広場のデモは四〇万の参加する空前なものとなった。人民戦線は今やすべての人々を感情的熱狂のうちにとらえた。

三六年五月の選挙は左右の決戦であった。人民戦線諸派は一月に具体的選挙綱領として人民戦線綱領を決定し発表した。四月二六日

農業および商業危機対策

卸売物価と小売物価の開きを縮小するための農産物価格の修正  
 ……穀物統制局の設置による……投機業者の重圧排除。肥料の原価提供または販売統制、農業信用の拡張、……農業協同組合の援助。生活条件を極度に悪化させている諸大統領令の速やかなる撤廃。

二、「貯蓄の掠奪」反対、ならびに信用組織の改善  
 銀行業務の統制。(以下略)

債権または貯金の経済的寡頭支配からの解放のためのフランス銀行の国営化。フランス銀行理事会の廃止。(中略)小株主の利益擁護の見地よりフランス銀行株の公債転換。

三、財政改革

軍需産業の国営化とそれに関連して軍需品貿易品の統制。……経済復活のためにする租税制度の民主的改革。財政上の財源としての資産家に対する諸方策(高率累進課税、相続税の改正、独占利潤に対する特別税等)・資本輸出の統制。……

この一連の「経済民主化」的諸方策はこれら社会主義者たちが、危機に対するなんらの明確な概念もっておらずまったくあいまいな認識に止まっていたことを示している。危機の根源である金融独占資本主義の極点に達した諸矛盾をどの方向で解決し止揚するか、といった見とおしをそれはまったく欠いておりその場しのぎの社会政策を羅列したにすぎなかった。だが、にもかかわらず、その中には、危機を国家権力の介入と規制、財政政策の強力な推進によってのり切ろうという、当時あるいは戦争中にかけて各国ブルジョアジーが国家独占資本主義への維転に際してとった諸方策の方向が貫ぬか

と五月三日に行われた選挙は人民戦線派の、空前の勝利に終わった。社会党(一四六(四五)共産党七一(一六二))急進社会党(一一五(一四二))など、人民戦線派は絶対多数を獲得した。六月四日レオン・ブルムを首班とする世界最初の人民戦線政府が成立したのである。ときあたかも、フランス資本主義は最大の危機に直面していた。国際的階級闘争はヒットラー独裁の樹立とライランド進駐、ムッソリーニのエチオピア侵略によって爆発点に近づきつつあった。スペイン戦争が開始されたのは、四〇日後の七月一七日である。ブルム政府は、全プロレタリアートと人民をこの未曾有の危機から、真に解放しえただろうか。

危機に対する人民戦線の政策として提出され、トレーズによつては「資本主義の枠内で実現できる最低綱領」と特徴づけられた人民戦線の綱領は、ファシスト団体の解散を含む八項目の、「自由の擁護」および国連を通じての集団安全保障、非武装平和への努力、軍縮、秘密外交の抑制、仏ソ条約同様のもの各々への拡大など七項目の「平和の擁護」からなる政治的要求とともに、次のような経済的要求をかかげていた。

- 一、経済恐慌によつて破壊した低下し、購買力の復興
- 失業ならびに産業危機対策
- 国家の失業基金の制定。賃銀の減少をとまぬ週労働時間数の短縮。老年労働者に対する適当な退職基金制度の設置による青年に対する雇傭機会の提供。都市および農村における大規模な公共土木事業の即時実施。

同時に、それは勝利したプロレタリア権力が資本主義から、社会主義へ移行する当初に採用すべき過渡期の経済政策の萌芽をも含んでいた。

明らかに、それはこの「死の苦悶」からの脱出がブルジョア国家権力の再生産過程への直接的介入による国家独占資本主義か、金融資本主義のもとではもはや包摂しえなくなった生産諸力を全社会的な計画的意識的生産によつて解放するか、以外にはありえないことを反映したのである。後者は、ただプロレタリア独裁の下でのみ可能であろう。フランスにおけるプロレタリア権力の樹立は、不可避的にナチス・ドイツ、ムッソリーニ・イタリアを逆上させ、イギリス・アメリカを含む全帝国主義諸国間の死闘は、一挙に灼熱のルツポにたたきこまれるであろう。だが、危機の世界的性格が各国の階級闘争を爆発させ、プロレタリアートの断乎とした行動は全ヨーロッパをプロレタリア革命の嵐にまきこむことができるであろう。

もちろん、こうした展望はフランスプロレタリアートには欠けていた。だが、彼らは搾取の強化と相次ぐ弾圧、ファシストの暗躍に闘争への決意を固め、人民戦線綱領の実現を要求して果敢な闘いに立ち上がった。選挙の勝利は彼らにふるいたさせた。フランス全土をおおう空前の大ゼネストが広がり、一五〇万が加つた。その年の夏中、労働者は労働組合の承認、週四〇時間制、賃上げを要求してすわりこみストライキを含むあらゆる形で、労働者はたたか

いぬいたのである。こうした労働者大衆の闘争の圧力のもとでブルム内閣は次々に人民戦線綱領を実行に移して行った。六月四日の組閣からわずか二カ月の間に四十時間労働法の制定、小麦統制局の設置、フランス銀行

の改組、軍需工場の国有化等なしとげ八月一三日の議会の終幕にあたっては「政府の公約でいまだ果されないものは一つもない」とブルムは公言した。そして彼は、国民購買力の増加によって経済復興をなし、均衡財政を維持しようとしたのである。だが、それは急速な物価騰貴によって挫折した。フランの価値下落にブルジョアジーは資本逃避をもつて応えた。フランス銀行の金保有高は急減し、三六年九月には国防上最低限度とされた五〇億フランに接近した。人民戦線政府は壁につきあたっていた。ぬけ道は嚴重な為替管理の実施か平貨切下げであったが、前者はフランスでは不可能であり、結局平貨切下げのみが残された道であった。だが、このことはフランスが資本主義の道に決定的に回帰することを意味する。そうだとすれば、人民戦線政府が真に「人民」の側に立とうとするならば、プロレタリアートの強力な大衆行動を背景に資本家に対して一層断乎とした方策をもつてのぞみ、この政府の階級の性格を「反ファシズム」の国民的民主的のものとしてではなく、まさしくプロレタリア的のものとして鮮明に打ちださなければならなかったであろう。

こうした革命の方針の提起と指導は、社会民主主義者に期待できないながざり、それは共産党に要求されたのである。だが共産党は、ドイツでの戦後インフレの経験にもとづいて、平貨切下げに絶対に反対したにとどまったのである。人民戦線政府は道を見失った。九月に行つた臆病な平貨切下げはなんの効果もたらさなかつた。その間に軍事費・公共土木事業などによる財政赤字は激増し、財政危機が迫つた。

三七年三月五日ブルムはついに人民戦線綱領の一時「休止」を宣言した。

のあいだにうえつける目的で、両独裁のあいだに特別な民主主義的・過渡的段階をおこうとつとめた」これはベテンである。「なぜならばレーニンは『プロレタリア革命』つまりブルジョアジーの独裁の転覆への移行および接近の形態について語つたのである、ブルジョアジーの独裁とプロレタリアートの独裁のあいだにあるならかの移行形態について語つたのではないからである。」この統一戦線政府に対して共産主義者は

「情勢よつて必要とされる一定の根本的に革命的要求の実施」すなわち「たとえば、生産の統制、銀行の統制、警察の解体と武装した労働者民兵によるその代置等」を要求するのである。(国民文庫版・八八頁)

これが一九三五年のコミンテルンの公式の見解であつた。だから、「この政府は、究極的解決をもたらすことはできない。それは搾取者たちの階級支配を転覆することはできない。そこで、こういう理由で、ファシスト反革命の危機を最後のにとりのぞくことはできない。だから、社会主義革命の準備をする必要がある！」(同上書)

それは一般的には正しい。だが、あまりにも一般的にすぎたのではなかつたか。「ファシスト反革命」は単にそれぞれの國の特殊な条件が生み出した「金融資本のもつとも反動的な排外主義的……要素」によるものではなくて、まさしく爛熟の極に達した金融資本そのものの生み出した危機にもとづくものであり、したがってファシスト形態をとつた「反革命」をば一時的に阻止しえたとしても、それが資本主義としてとどまるかぎり危機はいぜんとして一層増大の一途をたどるのみであり、それは別様の形をとつてはあれプロレタ

言せざるをえなかつた。だが「人民戦線政府」に対するブルジョアジーの不信は、資本攻勢をゆるめさせず、恐慌状態に陥つた六月、ブルムは退陣をよぎなくされたのである。人民戦線政府は、わずか一年余でみずからの階級の性格を鮮明にすることを拒んで命を絶つたのである。

その後、シュートン内閣(急進社会党)・第二次ブルム内閣と、第二次、第三次の人民戦線政府が続いたのだが、その行ったものは国家独占資本主義への試行錯誤の推転と、第二次帝国主義戦争へ国民をかりたてただけであつた。三八年四月のダラディエ内閣(急進社会党)の成立と、一〇月一日の急進社会党の人民戦線正式離脱によって、人民戦線は形式的にも崩壊した。

## 八

現在、公認の国際共産主義運動史に輝かしい金文字で書きこまれている、人民戦線戦術の経験はこのようなものであつた。

トレーズの下で一九三四年にはじめられた統一戦線戦術は、三五年の第七回コミンテルン大会で国際プロレタリアートの正式の戦術として公認された。この大会で主報告を行ひコミンテルン書記長となつたデミトロフは、「プロレタリア革命への移行ないし接近の形態をさがしだすこと」というレーニンの言葉を引用しつつ報告で次のように述べた。

「左翼」教条主義者たちは、……ただ『目的』だけをうんぬしたが、移行の形態についてはかつて問題にしたことはなかつた。他面、右翼日和見主義者たちは、ブルジョアジーの独裁からプロレタリアートの独裁への平和的・議会的移行という幻想を労働者

リアートに攻撃の矛先を向けざるをえないのである。だからこそ、「究極的」とか「最後の」とかの修飾句ぬきでプロレタリア独裁の樹立が必要なのだ。樹立された統一戦線政府がまだプロ独裁とはいえず、たとえ「ブルジョア独裁の転覆への移行あるいは接近の形態」にとどまつたとしても、それはそうした過渡的状态にとどまることなく一刻も早くプロレタリア独裁に転化することなしには自己の権力を維持しえないことこそが明らかにされねばならないのだ。そこには、いかなる二段階的考えも介入させてはならないのである。

そしてこの統一戦線政府の、プロレタリア独裁への転化が、いかに、どれだけ早く行なわれるかは、デミトロフの言うように「プロレタリアート自身がブルジョアジーの直接の打倒およびプロレタリアート自身の権力の樹立のための決定的な瞬間にそなえているか。またそのばあい、プロレタリアートの同盟軍の支持を確保することができるか？」の問題にのみ依拠するのである。

一般的に統一戦線の問題について考える時、労働者階級の統一戦線と、労働者階級と他中間階層の統一戦線(というよりは共同行動・同盟関係)を混同してはならないであらう。

コミンテルン第三回および第四回大会で定式化された統一戦線戦術とは第一のものであつた。それは、プロレタリア革命、プロレタリア独裁の樹立にいたるプロレタリアートの闘争の全歴史的過程を通じてプロレタリアがいくつかの政党に分裂せざるをえないということに直接にもとづくものであつた。労働者階級の階級意識の成長はけつして均一ではありえない。だからこそ、階級意識に真に目醒めた部分は自己を確固とした前衛党に組織し、到達しうべき階級意識の最高水準を具象化し、闘争の中で、その水準にまで全労働者の意

識をひきあげるために闘うのである。そして、労働者はそれぞれの階級意識の発展段階に応じていくつかの労働者党を組織するのである。だからこそ、全労働者の階級的統一行動を組織し、その中に他党派・無党派の労働者をひき入れ、真の前衛党の影響力を拡大するためには、統一戦線戦術が不可欠となるのだ。「それぞれの階級はそれぞれの党をもつ」などという上部構造と下部構造の一对一的対応を考えるエセマルクス主義者の頭の中のみ「プロレタリアートの党は一つである」といったドグマが成立するのだ。こういう輩には統一戦線戦術の意味はまったく理解できないであろう。

統一戦線戦術は、かくして「労働者階級の多数者の間において、共産主義の影響を獲得し、この階級の決定的部分を闘争に導き入れること」(コミンテルン三回大会「戦術に関するテーゼ」)を目的とするものであり、

「……けっしてあれやこれやの議会主義的目的を追求するいわゆる尖端の『選挙連合』を意味するものではない。統一戦線の戦術は、ブルジョアジーに対して労働者のもっとも基本的な生活と利害を擁護するために共産主義者が、他の党や集団に属するすべての労働者およびすべての無党派労働者と共同闘争をなすことをいうのである。もっと小さな日常要求のための闘争ですら、すべて革命的教育の源泉をなすものである。なんとすれば闘争の経験は労働者に革命の不可避であること、および共産主義の意義を確信せしめるだろうか。」

だがそのためには、

「独立した共産党と、ブルジョアジーおよび反革命的社会民主主義に対するその完全な行動の自由は、プロレタリアートのもっと

も重要な歴史的獲得物であり、共産主義者はいかなる事情の下においてもこれを放棄しないであろう。」

これが統一戦線の原則である。だから「一定の事情の下での敵対する労働者党の尖端と商議することを断念しえない」のも、まさにこのためのものであった。(四回大会「戦術に関するテーゼ」)

政府(労働者政府)は、けっして統一戦線戦術の自己目的ではないことは以上のことから明白である。それは一般的宣伝のスローガンとしては有効であったとしても、現実のスローガンとしては、社会状態が不安定となり、階級関係・階級闘争の現実が「政府問題の決定を必要とするものとして日程に上せているが」とき国において「はじめに有効なのであり、こうした条件のもとでのみ労働者政府のスローガンは統一戦線戦術の不可避的結論となるのである。」

だがこの労働者政府の提起は、統一戦線の戦術すべてがもつ危険(右翼的危険)からまぬがれえない。したがってコミンテルン大会は次のことをつけ加えるのを忘れなかった。

「この危険を予防するために、共産党は次のことを銘記しなければならない。すなわち、すべてのブルジョアの政府は同時に資本主義的政府であるが、労働者政府のすべてがかならずしも真にプロレタリア的すなわち革命的な、プロレタリアートの権力手段ではないということである。」

そして五つの労働者政府の類型をかかげ、それぞれについて共産主義者の参加の可否を論じたのである。

「共産主義者はまた、プロレタリアートの独裁の必要をいまだ認めていないところの労働者、すなわち社会民主主義的・キリスト教的・無党派主義的・サンジカリスト的労働者などと一緒に行動す

る覚悟をもっている。かくしてまた共産主義者は、一定の保証の下においては非共産主義的労働者政府を支持する覚悟をもっているのである。しかしながら、共産主義者はあらゆる事情の下において、プロレタリアートの独裁のみが労働者階級に真の解放を確保するということを労働者に公然と解明するものである。

共産主義者が参加しうる労働者政府の次の二つの型(第三・労働者と貧農の政府、第四・共産主義者の参加した労働者政府)はいまだプロレタリアートの独裁を意味するものではない、それはけっして歴史的に避けがたい独裁の過渡形態ではないが、それが成立するところにおいては、この独裁をたたくための出発点を形成しうる。プロレタリアートの完全な独裁は共産主義者からなる真の労働者政府(第五)のみである。」(同「戦術に関するテーゼ」)

X

X

その後の十数回の革命運動は、公認の共産主義者たちが統一戦線戦術において、このテーゼが指摘した「危険」から一度として自由ではありえなかったことを示している。

フランスでの人民戦線戦術の無惨な潰滅はこのことをあまりにもみごとに暴露した。それは、ここにいたる十年間の誤謬の累積に対する明確な自己批判的検討の欠如にその一半を負っていた。二二年のコミンテルン四回大会の直後におこったドイツの二三年のザクセン蜂起が統一戦線戦術の極端に右翼的適用によって敗北して以来、コミンテルンはすでに二三年の五回大会で「社会ファシズム論」と「下からの統一戦線」をうち出し、統一戦線戦術はセクト主義にとつて代えられたのである。三〇年初頭のドイツの敗北はこの直接の結

果であった。だとすれば、三五年にいたってコミンテルンが、二、二三年の三・四回大会によって統一戦線戦術を再度提起したのであるならば、そこではこの未曾有の大敗北の科学的なかつ徹底的な自己批判と教訓の摂取が必要とされたのであろう。だが、デイトロフはなぜかこれを放棄した。彼は報告のなかで三つの誤りの系列、すなわち「第一の系列、労働者政府の問題が、政治的危機の存在と結合されていなかった」「第二の系列、労働者政府の問題が、プロレタリアートの戦術的・大衆的統一戦線運動の発展とむすびつけられていなかった」「第三の系列……右翼日和見主義者たちは『労働者政府』は『ブルジョア民主主義のわく内』にとどめるべきであり、したがってこのわくをこえるようなどんな措置もとるべきでない」と考えていた。他面、極左分子は、統一戦線を樹立するどんな企ても事実上拒否した。」をかかげている。だがそれは、「ここ一〇年以上のあいだ、資本主義諸国の情勢は、共産主義インターナショナルからこの種々の問題を討議する必要がなかったような情勢だった(四八頁)として、二二年の四回大会、二四年の五回大会の討論の回顧としてのみ展開したのである。そして、一年前までは「社会ファシズム」であり「ブルジョア支配の第三党」だった社会民主党との提携を百八〇度の転換によって提起するにあたっては、「若干のブルジョア国家内での社会民主党の地位、そのブルジョアジーにたいする態度が変化しつつある」「社会民主主義は、ブルジョアジーの城塞という以前の役割をたもつことがますます困難となり、ある国では実際に不可能となっている。」(同書一六頁)として、自己の誤りの批判によってではなく、「社民がかわった」と問題をすりかえたのである。

ここから、以後の反ファシヨ統一戦線戦術におけるセクト主義の裏がえしとしての極端な日和見主義・無原則的協調、ズブズの社民との融合が生じたのである。

さらに、今一つ人民戦線戦術に決定的な影響を与えたのはスターリンの外交政策の変化であった。二〇年代の末から三〇年代前半にかけて、ソ連の、したがってコミンテルンの政策の基礎は、第一次大戦の戦勝国、とくにフランスに抵抗する敗戦国ドイツに条件付の支持を与え、これと同盟することでヨーロッパ最大の敵と思われたフランスに対抗することであった。世界プロレタリアートにとってやがて最大の敵となったヒトラーは過小に評価されていたのである。こうした事情のもとでは、刻々と世界をおおいつくしていた帝国主義諸国間の対立という黒雲が、必然的にあらたな帝国主義戦争・対ソ反革命戦争をもたらすであろうと公然と宣言されていた。「反ファシズムの民主主義統一戦線」という色めがねはいまだ存在しなかった。だが三〇年代に入って以降のヒトラーの危険な跳躍と、その露骨なソ連への憎しみを見せつけられるにいたって、同盟者をドイツからフランスおよび西欧のりかえようと策すにいたったのである。「われわれの敵の敵が、われわれの味方なのである。」三四年九月、レーニンが「強盗の巢窟」とよんだ国連にソ連は加った。三五年五月仏ソ相互援助条約が締結された。——こうして、西欧帝国主義に対抗するためドイツと結ぶという伝統的外交政策は、反ドイツ反ファシヨ民主主義統一戦線にとってかえられたのである。

いかに、孤立したプロレタリア権力が世界革命の到来までの間、帝国主義者に殲滅されぬために、これらの国々間の矛盾対立を利

用して外交的マヌーバによって同盟関係をとりむすぶことは、一定の条件のもとでは拒否しえないであろう。だが、それは国際プロレタリアートの闘争の利益のために必要なときにのみ許されるのであり、スターリンが真に革命家ならばこの「商人とのとりひき」の階級的内容について公然と世界のプロレタリアートに呼びかける義務を負ったであろう。だが、すでに世界革命を放棄して一国社会主義論を完成させ、「わが国の対外政策は明瞭である。それはすべての国との平和を保持し、かつ通商関係を強化するところの政策である」(一九三四年一月、共産党第一七回大会での報告・演説)として自国の保身のみ関心をもつにいたったスターリンには、「反ファシズム民主主義統一戦線」のみが必要だったのである。(「共産主義」一号宮本論文参照)二八年のコミンテルン六回大会がいわゆる反戦テーゼにおいて疑いもなく宣言した「祖国擁護反対! 帝国主義戦争反対! 帝国主義戦争を内乱へ!」のレーニン以来不変の戦術は、一言の註釈もなく弊履のように捨てられ、愛国主義にとつてかえられ、「ファシズムはブルジョア民主主義の一形態である」との主張は、両者の決定的差異の強調にかわり、共産党はブルジョアの民主主義と自由のもつとも熱烈な支持者となった。

トレーズの人民戦線は、こうして決定づけられたのである。その民主主義的性格、限界の厳格な設定、熱狂的愛国主義・民族主義はまったく典型的であった。

「統一」は徹底的にすすめられた。すでに一九三四年七月の「行動統一協約」において「この共通の行動に際して、両党は、これに忠実なる組織、または闘士に関する一切の攻撃または批判は差控える」と宣言して批判の自由を放棄した。C・G・T(社会党系)と

C・G・T・U(共産党系)の組織統一は三五月に準備が開始され、アミン憲章への復帰と第二インターへの参加を条件として九月には合同大会を開いたのである。そればかりではなく、驚くべきことに、社共両党の合同も真剣に討論されるにいたったのである。共産党書記長トレーズは三七年に「われわれは、わが社会党の兄弟たちとの完全にして全体的な統一、労働者階級の単一政党への統一に絶えず骨折ってきた」(人民の子)と誇らしげに語っている! 彼らにとって重要なことは「われわれ共産主義者はわれわれの祖国を愛する」ことであり「問題は共産主義かファシズムかではなくてファシズムか民主主義か」(トレーズ「人民の子」)でなければならなかった。したがって「人民戦線は、その勢力と光輝とを、その特有の内容が労働者階級と中産階級との提携であるという事実、またそれが団結した労働者階級を纏って実現されたという事実、負うものであり、ファシズムの敗退は、「その共和主義的伝統、その平和への愛着、その愛国主義、その物質的安泰、これらのものを外国の指揮下にあるフランスのファシズムによって脅かされている」

「中産階級との提携によって成就される」(同書)であった。反ファシヨ人民戦線の政府かプロレタリア独裁への移行や接近の形態たりえなかったのはあまりにも当然のことであった。「自由で、強く、幸福なフランス」というのがそのスローガンであった。インターの歌声はマルセイユズでおきかえられ、三色旗は赤旗と並らんでたつた。

「人民戦線、それは革命ではなくまた月並な選挙運動でもなくて、共和主義的諸制度の枠内における中広く進歩的な政策——大部分の社会的範疇に確実な結果をもたらしうる——の可能性である。

と説教したトレーズは、三六年六月フランス労働者階級が工場占拠を広汎に展開して闘いに立ち「人民戦線」をさらに一層つき進ませようとした時、「人民戦線は、秩序であり、組織と平静における累進であり、大衆によって課される社会的平和であり、繁栄への復帰である」(人民の子)としてバリーで労働者の手を抑えたのである。「要求する運動をよく指導することが大切ななら、それを打切ることもまたできなければならない。目下のところ政権を獲得することは問題ではない。」

「同志よ、われわれは大衆の統一、人民戦線の統一が崩れる危険を冒してはならない。われわれは人々が労働者階級を孤立させるのを許してはならない!」

「旧来の多くの立場を海中に投じて」実現された人民戦線戦術が実現したものは、社会民主主義者との無原則的統一であり、ブルジョア独裁とプロレタリア独裁のあいだの民主主義的・平和的過渡的中間段階の固定化の試み(それは不可避的に短時間で崩壊した)であり、その客観的結果は、金融資本主義の国家独占資本主義への転化の促進と「反ファシヨ解放戦争」へプロレタリアートを導いたことであった。

資本主義の段階的發展に対する科学的解明の欠如と、統一戦線論の誤りたる適用は、共産主義者を危機のブルジョアの救済の一個の支柱にまで転落させたのである。

第二次帝国主義戦争の前夜には、共産党は他プロレタリア党と厳然と区別される、独自性を喪失したのみならず、多くの小ブル党とさえ愛国主義を競ったのである。

## 第三章 国家独占資本主義とプロレタリア革命

——「構造的改良論」の日和見主義とその基礎——

## 九

戦後の革命運動は、連合軍に対する解放軍規定にもとづく国民的歓迎と、荒廢した社会の国民的復興の熱狂によつてはじめられた。第二次帝国主義戦争に対する「反ファシズム民主主義統一戦線」とファシストとの戦争という没階級の規定が解放軍規定と平和革命論の根源であったが、この基本戦略に疑惑をさしはさまなかつた主要資本主義国のプロレタリア党指導部は、「反ファシズム解放戦争」から国民的熱情・愛国主義をそのままうけついで、大打撃をこうむつた自国の（資本主義の）復興に彼らの第一の国民的民族的任務を見出したのである。こうして、もつとも鋭い階級意識に武装されるべき部分が、プロレタリアートの独自の利益を追求し闘争し、すべての闘いをプロレタリアートの解放（国民の解放ではなく）にむけて推しすすめることを放棄している間に世界のブルジョアジーは急速に自己の体制を整備し、資本主義は危機を脱してあらたな展開の基礎をつくつたのである。四七年から四八年にかけての時期は一つの転機であった。トルーマン・ドクトリンとマニシヤルプランがはじめられた四七年、副首相の地位にあつたトレーズとトリアッチはあいついで政権から放逐され野党の地位にまわることをよぎなくされ、日本でも二・一ストの敗北が解放軍規定と平和革命論の誤謬を暴露したのであつた。

こうして、戦争末期から戦後四七～四八年にかけてこの世界資本主義の革命的危機の一時期を国民的闘争のうちにごすことをよぎなくした。驚くべき非科学的没階級の戦略に固着したのである。日本プロレタリアートは共産主義者の誤まつる方針によつて真に革命的戦略と革命的指導をもちえず社会民主主義者の支配のもとに追いやられ、敗北を運命づけられたのである。

国際的にも国内的にも、こうした誤謬からの解放の意識的努力が全面的に展開されたのは、スターリンという偶像の崩壊とそれにもなうあらゆる国際的權威の崩壊のものであつた。「社会主義へのイタリアの道」の独特の追求によつて今日公認の国際共産主義運動のなかで一方の旗頭となつていけるトリアッチの理論も、全面的に展開されはじめたのは一九五六年であつた。

日本においても、六全協の後に開始された未曾有の党内闘争のなかで、かつてない呵責ない過去の批判を現実の階級闘争にみずから参加するなかでおしすすめてきた部分が、破綻したスターリン主義に代つて依拠すべき国際的支柱として最切に求めたのは、多かれ少なかれこのトリアッチの理論であつた。既存のスターリン主義に対する党内左派の結集がこれを軸に行われのであり、民族主義に反対する階級闘争の強調・民族民主革命に反対する社会主義革命の主張は、その最大公約数であつた。そのかぎりで、一名「社会主義革命派」と呼ばれたこの一派の形成は、スターリン主義崩壊の一つの表現であり、八回党大会を目前にして「現代の理論」の發禁をめぐつて党内闘争を爆發させようとしていける日共を二分する存在たりえ

くされた世界プロレタリアートは、再度みずからの解放の時を失つたのである。資本主義の再編強化と、戦前とは區別されなければならぬいくつかのあらたな展開の様相に対して、彼らはただちに自己の解放闘争の明確な方針・革命の戦略を確立しなければならなかつたであろう。だがスターリンのもとで生命力を完全に失つたマルクス主義がプロレタリアートに投げ与えたものは「平和擁護闘争」と「民族解放闘争」だけであつた。とくに四七年以降アメリカを盟主にして再編成され統一戦線を強化した国際帝国主義者に対して、孤立した「社会主義」たる自己の國境を維持することに最大の利益を見出したソ連が打ち出した現状維持策は、「平和共存」をうちかためる平和擁護闘争を階級闘争に優先する世界プロレタリアートの第一義的任務としたのであり、各国のプロレタリアートの階級闘争は敵を国内の資本家階級に見るのではなく、「国」全体を従属させる外国帝国主義者に対する民族闘争へと二段階的に解消させられたのであつた。

日本においても、解放軍規定にもとづく平和革命論が二・一ストの無惨な敗走によつて再検討が要求された時、日本共産党指導部は「革命の平和的發展の可能性」からさらに「民主民族戦線」へと四七年から四八年にかけてなしくずし的にその戦略を変更しようとした。だがこのなしくずしの変更に四九年の階級闘争の壮大な大敗北によつて決定的に破綻した時にこそ、それまでの階級闘争の厳密な総括と全客観情勢、とくに日本資本主義の現状の科学的解明にもとづいて、革命の戦略戦術の全面的再検討が行われなければならなかつたであろう。中西功などによつて端的に試みられたそうした方向での努力が、官僚主義的に弾圧されて不毛に終り、五〇年の党の大たのである。

だが、かれらの理論・革命戦略は現実の階級闘争を勝利に導くことができるであろうか。

公認の指導部によつて一度も正しい方針が与えられることなく敗北しつづけてきたプロレタリアートの一〇数年の歴史のうえに、資本主義は完全に力を回復しあらたな再生産の体系を完成させた。この資本主義は現代資本主義を明確に国家独占資本主義として把握、その生みだすあらたな諸現象に真のマルクス主義的解明を与え、階級諸関係のあらたな発展から真に革命的方針を導きだすことこそが相求されているのだ。

だが社会主義の世界体制への発展と植民地主義の崩壊を二つの要因とする「全世界の客観的機構の変化（トリアッチ）を基礎とした、民主主義の闘争、議會の利用、反独占と経済民主主義化、「労働計画」や「国有化」などによる構造的改良・民主主義・社会主義革命」というトリアッチ主義の戦略・戦術は、はたしてこの要求に応えるものであろうか。

## 十

国家独占資本主義は、独占資本と国家の癒着や一者の他者に対する従属として解明されるものでもなければ、経済の軍事化・戦争経済の結果としてのみ生みだされたものではけつてない。

われわれにとつて、なによりも明らかにされなければならないのは、国家独占資本主義は金融資本主義が極点にまで成熟させた矛盾の爆發によつてひきおこされた危機が、プロレタリアートの明確な革命への意志につらぬかれた断乎とした闘争によつて止揚されな

つたために、十数年にわたる永続的危機の後に、延命された資本主義がふたたび矛盾の資本家的解決のあらたな手段としてようやく出て見出した形式であったということである。その下で資本主義の矛盾は一層拡大されて累積される一方、その腐敗と墮落と歪曲も一層進行せざるをえず、これをおおいかくすべき数多くの欺瞞的諸機構をもとに発達させたのである。

一九二九年の大恐慌は前章で触れたように第一次帝国主義戦争の中で生産力をそのもとで許しうる極限まで拡大した金融資本が、固定資本の一層の巨大化と競争の激化が要求する膨大な資本蓄積を株式会社形式の枠内では実現しえず、その自己否定した特質をもつ自己金融の方式を援用することによってきりぬけようとした時に、倍加された矛盾によって爆発したものであった。資本市場は、資本の配分の規制による生産の社会的統制、景気循環の自動調整装置としての力を完全に喪失していた。それはかつてない深刻な資本主義の危機であった。階級闘争は熾烈化した。解決の方向はただ二つしかない。一方はもはや巨大化した生産諸力を包摂しえなくなった資本主義そのものを、生産の全社会的意識的統制、すなわち全面的計画経済によっておさかえることであり、そのためには、プロレタリア権力の樹立が不可欠である。これこそが問題を根本から解決するたゞ一つの革命的な方向である。それ以外の道は資本主義としてとどまることがきり不可避の道として、あらたに資本の配分と生産の社会的規制の資本家的機構を創造すること、すなわち自己金融方式の全面的導入と国家の介入である。——それは国家独占資本主義への推転を意味するであろう。だがこの道は、個々の私的金融資本による有形無

形の抵抗をうけることは不可避であり、さらに労働者階級の激烈な組織的反抗、中間層の絶望的抵抗をよびおこさずにはおかないだろうことは必然であり、国家独占資本主義への転化はこうしたもろもろの反抗に鉄の弾圧を加え、階級闘争の熱火を資本家の勝利によってくぐりぬけた所のみ可能であった。

歴史は、すべての主要な資本主義国（アメリカ・イギリス・フランス・ドイツ・日本・イタリア）が、そのたどった道に若干の差はあれ（アメリカのニュー・デールと、ドイツの国家社会主義）、数年ないし十数年にわたる長い階級闘争の後に敗北したプロレタリアートの屍の上に、第二の道へ進んだことを示している。

だが、国家独占資本主義は、恐慌とそれに次ぐ過熱化した階級決戦の数年間の後にただちに確立したのではけつてなく、その確立には第二次世界帝国主義戦争とその後の数年を要したのである。

自己金融は投資力を一杯に緊張させ生産力を極限にまで拡大したから、予想独占利潤を基礎に成立していた株式市場は投資が生産力化して商品が市場にあふれこの独占利潤の幻想性が暴露された時、急激に崩壊し恐慌は信用恐慌としてはじまったのである。だから、この恐慌に対する第一の応急処置として要求されたのは、独占利潤実現のための需要の造出であった。それは一部分は私的資本の枠内でも消費者信用の拡大などで行いえたのであるが、同時にそれは自己金融を一層進行させて矛盾を拡大再生産する傾向があった。ここで、需要の枠を社会的規模で拡大することが国家に要求されたのである。租税の引上げ、財政の拡大による購買力の再配分、あるいは大規模な公共土木事業・社会保障制度・失業保険など国家財政によ

直接再生産能力を拡大することなしに購買力のみをつくり出すような諸政策がそれである。ブルジョアジーが比較的安定した力をもつたアメリカはニュー・デールでこれを典型的に実行して国家独占資本主義への道を歩みはじめ、ヒットラーの国家社会主義、あるいはフランス人民戦線においても同様の方向がとられたのであった。

ここにおいて、国家は再生産過程の全く外部にあった存在から、まず最初は流通過程・商品の実現の過程へ、すなわち再生産の実現を援助する条件として再生産過程の内部に入ってきたのである。国家独占資本主義はその第一歩をふみ出した。

それは、第二次帝国主義戦争の過程で他の側面から一層促進された。戦争は無限の生産力の拡大を資本に要求した。しかも軍事産業は巨大投資を必要とした。原子力産業などの出現はこれに拍車をかけた。また軍事産業にともなう投資リスクは、私的資本に投資を躊躇させる。こうしたすべての事情が国家財政をもって直接（あるいは補助金・利潤保証などで間接に）に生産を組織する方向を強めたのである。国家はこの部面では、再生産の主体になった。主要軍事産業・エネルギー産業などは国有化される。戦争の過程で国家は再生産の内部にまで急速に立ち入る傾向を強めたのである。それはまた、ドイツ・イタリア・日本では、排外主義的民族主義によって、ほかの資本主義国では「反ファシズム民主主義擁護戦争遂行のため」、全国民（もちろん共産主義者もプロレタリアートも!!）によって熱烈に支持されたのである。

戦争の終了とともに、国家の介入は一層進められた。なぜなら、一方では戦争目的遂行のために膨大にふくれあがった生産能力を過

剰生産に追いやらぬための市場の造出が、他方では破壊された生産力の復興のために、とくに重化学工業、エネルギー産業・原子力産業等での生産を組織することの、この二つが同時に要求されたからである。戦後の復興の一時期、四八〇九年にいたる時期に、国家はこうして急速に再生産過程に消費と生産の両面が引きこまれ、再生産の不可欠の条件となり、国家独占資本主義としてから体制がむね整備されたのであった。

そして、この戦後の時期は、まさしくフランスにおいて、イタリアにおいて、日本において公認の前衛党が「生産の国民的復興」をプロレタリアートに呼びかけ、党はその先頭にたつていたのである。たしかに戦争の荒廃からの経済の復興は、とくに労働者・人民にとつて緊急の必要事であったにちがいない。プロレタリアートとその党はこの復興のために闘かわねばならない。だが、それを「国民的復興」として、超階級の事業として行おうとすることは絶対に誤りである。資本主義の下での、権力の問題をぬきにした「国民的復興」は不可欠的にその国の資本主義の復興・国家独占資本主義体制の確立を促進し、ブルジョアジーの階級支配の強化に導くのだから。

「反ファシズム解放戦争」「反ファシズム人民戦線」論はここでもすべての認識の根源となった。「ファシズムの根絶と民主主義の確立」が戦争直後の各国プロレタリアートの第一の課題であると共産主義者は宣言し、民主主義的共和国の確立、経済の民主化と復興、国の民主主義的復興が具体的任務であるとされた。そしてブルジョアジーに対する非難・攻撃は、この「国民的復興をあらんかぎりの手段で妨害しサボタージュしている」というかぎりで行ったので

ある。プロレタリア前衛のなすべきことは、国民的復興資本主義の再建強化の主体に「ブルジョアジーがなれ！」と要求することではなくて、「復興をなす能力がないなら、われわれがひきうけて行うであろう」ことを宣言し、戦争の荒廃の中で極度に弱化したブルジョア支配を、労働者の鉄の一撃で打倒し、プロレタリアートの手によって生産を組織することでなければならなかった。

イタリアでは、一九三四年三月のドイツ占領下に北イタリア大政治ストライキを闘った組織を中核に結成され、四五年には一三〇万を組織し五月には全くイタリアにその力を拡大したC・G・I・Iは、完全な共産党のヘゲモニーのもとにあった。トリアッティは副首相として入閣も、四八年七月のトリアッティ襲撃に際して労働者は自然発生的大ストライキをもつて応えたのであり、もしも前衛党に明確にその意志があれば、権力の掌握はまったく可能なことであつたにちがいない。

四八年八月一日に零だつた労働組合を一年の間に数百万にまで組織し、四六年には一〇月スト、工場占拠をともなう産業復興闘争を闘い、四七年には空前の二・一のストにまで昇まつた日本の労働者階級の力量も、当時完全に労働運動の指導権を掌握していた日本共産党に真に階級的で革命的方針があつたならば、ブルジョア支配に決定的打撃を加えこれを打倒することは決して不可能ではなかつたにちがいない。

だが、公認の前衛はすべての国でこの意志に欠けこの任務を放棄し、資本主義的復興に忠誠を誓うことで国民的支持をかちえようとしたのである。そしてブルジョアジーが四七・四八年に資本主義の再興をなした時、彼らは一挙に政権から追放されたのである。

持するといったものへと性格を変化させた。株式市場は資本市場としての規制の機能、蓄積の自己規制装置としての役割をいぢるしく低下させたのである。この結果、景気循環は攪乱され、過剰投資による新生産方法の生産力化と同時に独占価格は崩壊して恐慌に導く危険は拡大された。あらたに生みだされた消費者信用は、自己の過剰商品をその管理独占価格のままで実現するために多額の銀行遊休資金を動員するという、つまり過剰商品と過剰貨幣資本が将来の大衆所得をあてにして独占価格と高利子率を維持する機構であつたが、それは同時に自己金融を一層強化することになって矛盾の拡大再生産に帰結するにすぎなかつた。

ここにはじめて国家の介入が不可避になる。自己金融というあらたな資本蓄積様式を保護し維持しつつ、同時に極度に緊張した生産力が不安定な景気循環として暴力的作用をもたらさぬために、国家権力による資金の再分配、その再生産過程への主体としての介入等が必要となつたのである。

その諸政策は、権力によって国家的規模で集中された莫大な社会的資金(租税等)を、財政投融资等の長期低利金融として、重要産業に供給し再分配して、生産と資本の配分の規制を行い、あるいは税制、補助金制度、価格維持制度(農産物など)、国債・政府購入による過剰商品の実現などによる独占利潤維持政策、あるいは、差別税制、配当制限、低金利政策などによる蓄積促進、自己金融強化の諸政策である。

そのうえ固定資本の極度の巨大化によって、私的企業としては危険性や利潤率の低さなどによって私的資本によってはおもはや担当しえないが、しかもなお資本主義的再生産の存続や補強には絶対不可

国家独占資本主義は勝利した。国家独占資本主義は誕生の苦しみの時期に人民戦線によって援けられ、戦争中の成長期に「反ファン解放戦争」の国民的熱狂によって看過され、戦後の確立の時期には「国民的復興」のスローガンによって支持されたのであつた。

## 十一

国家独占資本主義に対する基本的説明は、共産主義三号の姫岡論文においてすでに簡潔に与えられている。〔共産主義〕No. 3. 79頁以下)

株式会社自己否定として生みだされた自己金融方式というあらたな資本の蓄積様式(第二章参照)は、国家独占資本主義を他と段階的に区別する現象である。自己金融方式の展開・確立は、資本市場の制約から解放された資本蓄積を可能にし、企業の拡張はある程度自由に行いうる基礎がつくられ、生産力は極度に緊張させられる。

自己金融の可能な企業は限られているため、蓄積の不均等性(産業部門間の、あるいは大小企業間の)はいちじるしく拡大し、独占と集中は異常に進行する。これに対し、国家は低金利政策の実行を基礎にした配当率の切下げ、国家市場の形成などによる独占利潤の維持、償却資金・蓄積準備金などの課税水準引き下げ等の差別税制の実施、さらには直接の配当制限によってこの自己金融を一層促進し資本の集中と生産の拡張を早めるのである。だが、こうした自己金融の強化は、企業の他人資本への依存度を低下させ株式市場の狭隘化をもたらし、自己金融でカヴァーできぬ部分の追加投資を株式市場に求めるため、零細な大衆投資家の開拓、大衆所得の資本転化を媒介し、そうすることによって企業危険の転嫁の最終負担者を維

欠の部門は、会社所有より高度な公的所有あるいは国家所有に移されるのである。軍事産業・原子力産業・通信運輸部門(日本での国鉄・郵便・電々公社)・エネルギー産業(電力・ガス・水道などは公益事業として一般私的企業からは区別されている。石炭産業も一定の条件の下では国有化の対象となろう)道路港湾さらに最近口やかましく叫ばれている工業用地・工業用水工事などがその対象となろう。

こうした国家の再生産過程への全面的介入は一面では私的所有の制限をなすといえ、同時にそれは私的所有の基礎のうえにおける私的所有と国家的所有の結合であり、国家による私的所有の補強・強化、その集中の擁護にはかならない。これが国家独占資本主義であらう。

同時に国家独占資本主義はその成長とともに階級諸関係を救済的に隠蔽する多くの機構・幻想性をもつくりだした。それらの大部分は帝国主義段階が成立した一九世紀末から一九〇〇、一九一〇年代に形成されたものであつたが、単なる金融資本から国家独占資本へと進む過程で、これらも一層完成させられたのである。そしてこれが、国家独占資本主義の下でのあらゆる修正主義・日和見主義に物質的基礎を提供しているのである。

金融資本を成立させた株式会社形式は、すでに所有をこえる支配の集中を可能にし、所有資本家(一般中小株主)と経営資本家の分離をもたらしただであつたが、自己金融はこれを基礎として群小株主の金利生活者化によって配当率の切下げが可能になったところに成立した。それは所有と支配の分離を完成し、所有の集中に比してこれをいぢるしくこえる支配の集中をもたらしただである。こうして

この段階を特徴づける会社の株主からの自立化、「会社それ自体」が成立した。本来の私的所有である個人所有からみれば一つの擬制的形態にすぎない。「会社所有」「会社財産」などにみられる所有主体（「法人」）が設定されたのである。同時にこうした所有と支配の分離は反面では大衆株式投資家の大量の造出を要請し「株式民主化」といった現象が生じ「所得革命」などという貧富平準化傾向の主張となり、一般大衆が資本家の末席に一層広汎にあづかることができるとなどの「人民資本主義」論を始頭させるのである。

こうした幻想的擬制的現象は技術的革新や国家の公共性の増大などの現象と相まって多くの現代資本主義に対する幻想を生み、革命運動における日和見主義の基盤となつたであろう。

だが、こうした現象は単に擬制的であるというだけではすまされない物的基盤をもつものであった。大衆投資家の増大という現象はこうした投資の源泉となる中間層を資本主義そのものが大量に造出したことにかかわつていた。すでにあまりにされてきたように帝國主義段階ではあらたな資本蓄積様式のもとで前資本主義的諸関係（小農・中小生産者など）を未分解のままに広汎に残し、集中の不均等性の中で中小企業は恐慌の際の危険懸架の緩衝地帯として存続させられた。これらが、中間層を形成した。だが、現代ではこれは一層推進されている。農産物価格支持制度や補助金制度により農民を中農として広汎に維持することが意識的に追求される。中小企業などにしても、一方では新技術の導入による完全一貫工場の新設などによって大企業に吸収される傾向をもちながら、他方では国家の政策的援助によって、専門メーカーとして親企業からの独自性をかちとる方向も追求され、大企業の極度の巨大化に並んで保護維持さ

れるのである。とくに巨大企業においては新技術の採用にもなる新設備投資による企業の拡張も、既存の労働力でまかなおうとし、不況期にも首切りではなく換短によってこれに対処するなどのため、景気循環にともなう過剰労働力の形成、吸収と反撥はもっぱら中小企業に依存することとなる。（日本でも一九五四・五五年の雇用労働者三〇〇万中、一〇〇〇人以上の企業に吸収されたものは、二〇〇用労働者の七割弱、一〇〇人以上としても一〇〇万の三〇％強にすぎない。）その結果、国家にとって中小企業対策はきわめて重要なものとなり最賃法や中小企業振興法などの中小企業保護政策が採用され一層維持される傾向を強めるであろう。

またいわゆるサービス業といわれる部門の急膨張はホワイト・ハンドのサラリーマン層を増大させる。

さらに日本における賃金の定期昇給制、終身雇用制、退職金制度、年金制度、また失業保険・国民皆保険などの社会保障制度は、中間層の形成を援けるとともに、消費者需要を維持することによって独占価格の維持と景気循環に対する緩衝装置としての役割を与えられる。さらにアメリカのA I L、C I O、あるいは日本の全労の如くユニオン・ショップ制がとられ失業保険が組合から自動的に支給されるとすれば、これらの改良主義的組合自体は、資本主義に対して労働力をプールの潜在的過剰人口の保有装置としての役割を果し、景気循環の攪乱をたすけるだろう。

こうした「人民資本主義論」に基礎を与える中間層の造出と維持は、同時に消費者需要の維持機構としての役割を与えられるのであるが、それは国家財政の比重の増大・財政政策による資金の社会

的再配分と相俟って、国家の財政政策によって景気循環を克服しうるかの幻想を生みだすのである。ケインズのスペンディング・ポリシーにはじまり、ハンセンの補助的財政政策、そして現在その効果が誇張されているビルト・イン・スタビライザーなどがそれである。だがこうした国家財政の極度の膨張は不可避免的に好況・不況を通じて構造的に存在するインフレ圧力をくりだし、さきにもた自己金融促進のための差別税制の採用と相まってビルト・イン・スタビライザー等の機構そのものが過剰投資を助長するものとなり、国家の介入による消費需要の「社会的」規模での拡大とも衝突せざるをえなくなるだろう。

こうした国家財政の役割の増大、国家所有の出現は、国家の「公共的性格」を刻印すけ、超階級的な存在であるかのごとき幻想を生み出さずにはおかない。

国家財政資金は、それが私的所有権からはなれた瞬間からあたかも「公的」資金であるかのような幻想を生み、国家資金の投入は私的所有に対する全国民による制限であるかのように現象する。国家所有は、それが私的所有の基盤の上に私的所有を補足強化する役割と目的をもって存在するものであるものもかわらず、私的所有の部分の止揚あるいは超階級的全国民的所有であるかのように主張される。

そしてかかる幻想的現象は、他国金融資本との対立が加つた時、国家独占資本主義にあたかも一国の超階級的利害を代表するかのような様相を与え、ブルジョアジーによる民族主義的煽動に恰好の地盤を与えるであろう。第一次帝國主義戦争において、第二次帝國主

義戦争においてこのブルジョアジーの救済的煽動を革命的に粉碎しえたのは、わずかにレーニンにひきいられたロシアプロレタリアートのみであった。国家独占資本主義を完成させた現代資本主義の世界において、五八年から五九年にかけてようやく激烈に開始された市場競争戦に対して公認の前衛党は国家の超階級性的幻想を打破して権力奪取にまでプロレタリアートの導く用意があるだろうか。

## 十二

このようにして階級諸関係を隠蔽する擬制的諸機構・幻想的なイデオロギーを援用してプロレタリアートをあざむきつつ自己を確立した資本主義の新たな段階、国家独占資本主義段階におけるプロレタリア革命の戦略戦術は何か。

第一に明らかにされねばならないのは、いかなる意味においてもプロレタリアートをはじめとする全人民に解放をもたらすものは、プロレタリア社会主義革命以外にはありえないことであり、

第二に、資本主義が国家独占資本主義として自己を維持している現在、革命にとって国家権力の奪取・プロレタリア独裁の樹立は絶対的に不可欠であるということであり、

第三に、プロレタリア権力の樹立にあたっては、組織されたプロレタリアート、なかならず基幹産業に集中したプロレタリアートの闘争が決定的であるということであり、

第四は、現代資本主義に対して幻想をふりまくブルジョアイデオロギーがいたるところにおり、国家独占資本主義の諸現象がそれに物的基盤を提供しているなかで、プロレタリアートに権力への強い固な意志をうえつけ、また権力との衝突に発展する闘争が戦争・恐

情・政治ゼネストばかりでなく、日常的要求にもとづく闘争からも容易に生じる可能性のあることから、真の意識的・前衛的存在と指導はプロレタリアートの闘争に決定的な意味をもつということであり、第五に、国家独占資本主義の確立によって一層深まったブルジョアジーの国際的結合と対立、および後進国も国家資本主義的發展の道を追求することによってこの国際的関係の一構成部分となつたということによって、危機は国際的なものとしてうみだされ、一國における革命的闘争は不可避的に他國の危機を深化させるということによって、プロレタリア革命の国際性は倍加され、いかなる革命も世界革命として遂行されねばならない、ということである。

帝国主義の段階においては、いかなる真の革命もプロレタリア革命以外にありえない、ということは一レーニンの時代に明らかになるべきものであつた(第一章参照)。この原則は、国家独占資本主義のもとではいよいよ明確にされねばならない。前資本主義諸関係というブルジョア民主主義的諸変革と対象として一般に認められている諸関係も、現に資本主義の一つの構成要素として相互依存的に存在するかぎり、この諸関係の変革は独自の革命の課題とはなりえず、まさに現代資本主義の打倒によってのみ達成されるのである。民族的課題も同様である。先進帝国主義諸國間の諸関係(法律的・政治的・経済的)は、国際通貨基金・世銀などに補強されたこれら国際ブルジョアジーの世界支配維持のための手段であり方法であるかぎり、それを不可欠にした社会制度・ブルジョア支配の打倒なしには清算しえないものである。戦後の一時期、とくに四八年以後イギリス、フランス、イタリア、日本等の主要帝国主義のプロレタリアートが、共産党によって「アメリカ帝国主義の支配からの独立」を主

要な課題にさせられ、今またベルギー共産党がポリナーシュ炭鉱労働者の生死を賭した闘争に際して、「欧州共同体への屈服反対」を叫んだことは、プロレタリアートの闘争の方向をねじまげ敗北を容易にしたのであり、現在の安保条約の問題もまったく同様である。問題はむしろ逆である。国家独占資本主義の段階において市場争奪の激化は諸帝国主義國家間のあらたなブロック化を生みだす。このブロック化は欧州共同体の仏・西独間にみられるように、第一、第二次大戦当時のような単なる政治的同盟より以上のものとして、生産力の發展によってすでに極端に化した國境を資本家的方法である程度徹廢して(完全に徹廢し、兩國が統合することにはありえないが)資本と労働力の自由な移動を実現しようとする。これは、兩國のプロレタリアートの闘争を不可分のものとして結びつけ、一國の革命は即座に他方へ点火せざるをえないという、革命の国際性を獲得することこそが強調されなければならない。

後進國においても、帝国主義支配からの離脱の後に可能な道は、国家独占資本主義的發展の道か、プロレタリア権力の下での社会主義への道か、の二つしかありえない。帝国主義も爛熟期の、すでにまったく分割しつくされた世界市場におかれて登場するこれらの國が、資本主義にとどまり資本主義的發展を追求しようとするならば、資本の原始的蓄積の過程をまったく欠いたこれらの國々においては、市場競争に耐えぬく国際競争力の獲得・資本蓄積は、私的個別資本をもってはきわめて困難であり、國家の援助は不可欠となる。しかも、巨大な固定資本を要する重化学工業、建設事業の創設に要する莫大な資本は、外國からの導入によらざるをえず、これをなしうるのは國家のみであるから、これらの國の資本主義的發展は

必然的に國家資本主義としての道をたどるのである。

いかに独立闘争が全人民的に革命的にたたかわれようとも、その國が資本主義としてとどまるならば、どれだけ國家的統制・国有化・計画経済が遂行されようとも、それはまさしく國家資本主義以外ではありえず、私的所有を補足強化し集中的に擁護するという規定からまぬがれないのであつて、労働者階級に対するブルジョア支配は強化されるのである。それはけつして社会主義への過渡などではありえないのは明白である。これらの國の國家資本主義的發展は、やがて國際市場競争を一層激化する要因となることは疑いない。

したがって、これらの國の革命は、プロレタリア独裁の樹立(その形態が農民的、あるいは平民的であらうとも)による社会主義への前進としてしかありえない。

インドネシア・インド・エジプト・インドシナなどをもって「その経済的・政治的・社会的發展においては、資本主義の道をもはやとらぬという傾向」にあり、「社会主義の道にすすむことの必要性、すなわち、経済的・政治的・社会的諸関係を、社会主義によってしめされる偉大な方向に変化せしめることの必要性を宣言」している(トリアッティ、五六年六月二四日、党中央委員会報告)などという評価は國家独占資本主義段階の後進國の發展についてのまったく無知を暴露するものであり、最近一カ年余の間に急速に階級的性格をあらわにした中近東・東南アジア諸國のポナパルティスト的支配者へのプロレタリアートの武装解除をもたらした当の思想である。

こうした一連の誤りはプロレタリアートの戦線から追放されなければならぬ。現代における革命の本質は、なにを契機に爆發し、どんな現象形態をとって發展しようとも、その本質的内容はプロレ

タリア革命ではなければならないし、その権力はプロレタリア独裁としてのみ有効である。

### 十三

たしかに、國家独占資本主義の確立は一方における極度の巨大企業への独占の集中を生み出し、他方には前資本主義的諸関係と中小生産者・新中間階層を広汎に生み出した。これはプロレタリア独裁をめざす闘争において、プロレタリアートと諸中間層との同盟関係樹立の可能性と重要性の問題を提起するであろう。イタリア共産党の「社会主義へのイタリアの道」は、この点に視角を定め「反独占」と「民主主義擁護・憲法擁護」の統一戦線を提起し、いわばあらたなる労働(中間層)同盟論、したがって新労働民主主義の権力「プロレタリアート独裁でもなければ、ソヴェエト制度でもなく、権力のことなつた形態である新しい型の民主主義」(イタリア共産党の綱領的宣言要綱・一九五六年一月二日、「社会主義への前進」一三七頁)の樹立、すなわち民主主義・社会主義革命という展望を提起したのである。

「土地所有の構造がおくられており、その上に工業的および金融的独占のあたらしい寄生的構造がつぎ出されているため、またその結果、社会の一方の柱には巨大な富が蓄積されているのに、広範な勤労者や土地をもたない農民や失業者がそこで生きることをよぎなくされている社会の他方の極には、言語に絶した貧窮が蓄積されているため、農村でも都市でも、プロレタリアおよび半プロレタリア人々のもつとも広範な層が、わが國の社会の民主主義的・社会主義的な改造を要求するようになってきている。」

「独占体に反対し、資本主義を打倒するためにたたかっている労働者階級は、もはやプロレタリアおよび半プロレタリア大衆だけでなく、さらに農村の直接耕作農民の大衆や、都市の中間層生産者の大きな部分とのあいだにも、客観的に目的の一致をみている。そしてこのことは、民主主義的・社会主義的革新のための労働者階級の同盟体制と大衆の基礎とを拡大する新しい可能性を生みだしている。」したがって

「資本主義の歴史的發展と現在の構造とから生まれる経済的および社会的利害の一致によって、労働者階級と都市および農村のいくつかの中間層との恒久的な同盟の可能性が規定されている。(傍点は引用者)」「(同上書、一四二〜一四三頁)」

「われわれの政治路線の基本的要素とはどのようなものであったか？ われわれはイタリア社会の経済機構および政治機構の分析から出発した。資本主義的旧指導階級にたいする闘争には、労働者階級と農民大衆の階級的・政治的・同盟が確立されるべきであったが、この分析は、労働者階級と農民のなかに、民主主義的および社会主義革命(この二つの要素がわれわれの運動を特徴づけているがゆえ、私はこういふ辞句をつかうのだが)の原動力を明らかにした。とくにわれわれは南部の後進地域の状態のなかに、わが国の歴史的諸条件をはっきり見た。この諸条件こそは、この階級的・同盟に特殊な内容を与えるものであり、これらのおくれた地帯においては、この階級同盟の巾を、都市中小ブルジョア、農家の広範なグループさえも包含するところまでひろげるのである。(傍

点は引用者)」「(五六年六月二四日党中央委員会での報告、「スターリン批判と各国共産党」九一頁、「社会主義・民主主義」二六四頁)」

こうしたイタリア資本主義の現実に対する分析は、スターリン主義ドグマティストたちの「本質不変論」的分析に比して、現象論にとどまっている(それは致命的ではあるが)とはいえず、あらたな階級関係を把握し、その闘争の方向を民族独立革命あるいは民主民族革命等に二段階的に固定するのではなく、まがりなりにも社会主義革命に求めている点において大きな優越性をもちえたであろう。

だがそれは真に正しい方向を決定しつづけるだろうか。たしかに、国家独占資本主義のもとでは、いかなるブルジョア民主主義的諸変革も基本的にはこの制度の破壊なしにはかちとりえない。したがって、プロレタリアートと中間諸階級の間には「客観的に目的の一致」は存在するのであり、「同盟体制……を拡大する……可能性」は客観的にはあるのである。だが注意しなければならないのは、それは「客観的」にのみあるのであって、実際には同時にさきみみた通り国家資本主義の生みだす幻想と擬制的機構をブルジョア階級は最大限に駆使して、これら中間層を(否)プロレタリアートの一部までも)幻想のなかに埋没させ、「現代資本主義」の支持者にしようとするのである。農民に対する価格支持制度・補助金制度による彼らの現体制内での安定的上昇の保障、中小企業保護政策。最低賃金制もその一部を構成しうる。社会保障制度の拡充による。半プロ層の急進化の阻止など。これらは、単に「幻想」をうつつけるのにとどまらず、これらの中間層の反動化に一定の物質的基礎を提供するのである。だからこそ、革命的プロレタリアートとその前衛は、あら

ゆるときにあらゆる機会をとらえて、こうした欺瞞の暴露を不断に展開することによって彼らをブルジョア階級の影響から切りはなしプロレタリアート側にひきつけねばならぬのであるが、同時になによりも、プロレタリアートを完全にこれらの幻想から解放し権力奪取への鉄の意志をうえつけ、断乎とした行動に立たせることこそが追求されねばならないであろう。

なぜなら、独占と集中の極度の発展は、その国の資本主義的体制の中軸を少数の基幹大産業(鉄鋼・合成化学・石油化学・電機機械自動車・石炭)および国有産業・公共企業(鉄道・運輸・通信・エネルギー)に依存させ、同時にここに集中された組織されたプロレタリアートの闘争に決定的役割を与えるからである。これらの組織労働者の決起とその闘争の勝利的遂行なしには、いかなる究極的勝利も保障されないだろう。権力の奪取のみならずその維持も、この勝利なしには考えられない。すべての労働者の闘争は、この中枢的プロレタリアートの闘争を防衛し、その勝利を保障するものとして展開されるべきであろう。もちろん時間的展開は逆にもなりうる。中小産業のプロレタリアートの流血の闘争から全社会をまきこむ激闘が開始されることもありうるのだから。だが究極的勝利はかくしてのみ可能である。

中間諸階級の役割は、単純化していれば、決定的瞬間にこの大プロレタリアートの闘争を支持して革命の側に立つか、反対してブルジョア反革命の側に立つかの問題である。プロレタリア前衛に課せられた課題は、革命の全過程でいかにこの中間諸層を自己の側にひきつけ、敵の側に追いやらぬか、そのためにどのような具体的方針を彼らに提示するかである。民主主義的諸要素を、大土地私有

の廃止、労働時間の短縮、大巾賃上げ、あるいは弾圧反対・政治活動の完全な自由・再軍備・核武装反対などをその時の条件にしたがって定式化することが必要であろう。だが、プロレタリアートの闘争こそがなにもまして決定的なのであり、都市中小ブルジョア階級から農民にいたる中間層との「恒久的同盟」などによってその闘争を民主主義的の中間段階にとどめることは拒否されなければならない。

中間層との同盟はすではなんどもふれたように、一般的課題(民主主義・経済民主化)による恒久的同盟という形で提起されてはならないのであり、この同盟の必然の延長上に、権力の形態として、「労働民主独裁」あるいは「民主主義的形態」などとして予定することは明らかでない。中間層はその経済的基礎からして浮動的であり、階級としての独自の統一した利害を定式化しえないのであって、したがってプロレタリア党、あるいはブルジョア政党と区別された独自の政党を組織しえないであろう。だから、問題はプロレタリア党が具体的問題でいかに中間層との同盟関係を保持しプロレタリアートのヘゲモニーを守り、その闘争の障害を除去するか、であり、獲得された権力における問題は「農民(あるいは諸中間層)に支持されたプロレタリア独裁」してのみ解決されねばならない。

だが、イタリアにおいては問題はどのようにたてられてはいない。

「労働者階級と人民大衆のまえに提起されている大きな目標は、なによりもまず、大巾な経済的進歩と、実効ある民主主義制度をかちとるとのことである。」「(社会主義への前進「一四二頁)とし、具体的には「憲法と民主主義の道」を提起するのである。

「憲法に規定された構造的諸改革は、資本主義的生産関係の解消を予想したのではない。しかし、これらの改良は、この関係の枠内で実現可能でありながら、もつとも遅れた前資本主義的構造を解体することにより、またもつとも寄生的でもつとも重層的な独占構造を制限しまたは除去することによって、資本主義的生産関係の基礎を握りくずすものである。」(イタリア共産党八回大会テーゼ「社会主義への前進」二五頁)

それは社会主義ではない。だがこうして「独占グループの権力をほりくずすための必要な構造的諸改革」によって「自由と社会進歩の敵の反抗やわなを粉碎しながら、……あたらしい道を通って、社会主義を建設する」のである。(同綱領的宣言)

具体的にはなにもによって。農地改革と経済民主化、「独占体に対する民主的統制」によって。そして「独占体の活動の統制」ということは、憲法第四三条にもとずいて『重要な公益事業、動力源、または独占状態と関連する企業ないしは企業部類で、高度に一般的利益に關係する性格をもつもの』のすべてを段階的に国有化することまで到達しなければならぬ。」(「社会主義への前進」二〇一頁)

だが、明らかかなように権力がブルジョアジーのもとにあり、資本主義が転覆されていないかぎり、それは国家独占資本主義を促進強化するもの以外ではないのではなからうか? この問に答えて言う。

「こうした危険は、経済生活の指導にあたって勤労者および集団の利益を優先させるための広範な行動を、民主主義と憲法との基盤の上に展開することによって排除することができるし、排除しなければならぬ。」より具体的には「国家の指導への勤労者階級の参加」「公共の富の運営を勤労階級が効果的管理すること

」(「そのための闘争によって。」(同一五一頁))

だが、権力がブルジョア独裁であるかぎり、事情はまったく不変ではないだろうか。——ここにはじめて国家の二重性などの国家論の修正があらわれるのであろう。

「国家の公民的性格」が確立されるならば、国家の階級的性格が変化するというのだろうか。イタリア共産党はその任務として、「国家とすべての公共行政機関の純粹に非宗教的で公民的な性格を確立し、それを守りぬくこと」を提起する。国家の公民的性格の拡大がブルジョア支配維持のための、ブルジョアジーの欺瞞的政策となっている時に! シェルラターナはい、う。「国家の二重の性格……すなわち、社会組織が個人的活動の組織化、すなわち個人的活動の調整であるかぎりにおいて必要としている権力(權威)としての機能と、このおなじ社会組織が対立する階級に分裂しているかぎりにおいて必要としている権力としての機能」(「マルクス主義国家論とイタリアの道」「現代革命の展望」九三頁)つまり、「公的権力の諸機能(行政的諸機能)」と政治権力・階級的権力としての諸機能、の二つが国家の二重の性格としてある。だからこの国家権力の二つの機能を「プロレタリア独裁でもなければ、ソヴェト制度でもなくて、権力のことになった形態」である「あたらしい型の民主主義」国家がうけつぎ、階級的力関係の変化によって「公的機能」を確立し増大させ、「階級的機能」を制限してゆくならば、労働者階級が国家の現実を介入することを可能にするあたらしい民主主義の諸形態」によって、漸次的に社会主義権力へ発展するであろう。……だからこそ、議会の利用、憲法の実現は革命の途上で大きな意味をもちえ、国有化は、「独占体に対する民主的統制」、具体的には「経営管理への労働者の参加」「国家による……経済計画の漸次的実施」「国家の経済機関の民主的運営」「税制の改革」などがおこなわれることによつて社会主義への道をきりひらくものとなる。

だが、これは国家の問題を国家の機能の問題にすりかえたスターリン的誤りによって、国家独占資本主義のもとでの国家の公共的性格に幻惑され、私的所有の集中擁護の機構として現われる国家の階級の本質を隠蔽することによって最悪の改良主義へ転落している。

そもそも国家は、その社会の成員が階級に分裂した階級社会において、一つの階級が自己の特殊利害を全社会の共通利害として表現するところに生じた幻想的共同体にはかならない。このような国家の本質は、その階級社会の発展にしたがって種々の形で現象し、それぞれの発展段階に応じた機能をつくりだし発展させたのである。

資本主義の発展段階に応じて、国家もその機能を変化させた。資本主義の発生期には、絶対主義などの権力形態のもとで、重商主義政策などの遂行によって原始的蓄積をたすけ、資本主義の生成に積極的に介入した。だが、その成長期・産業資本主義の段階では、資本主義そのものが自己の機構内で自己完結的に再生産を続ける能力を獲得したことに対応して、再生産過程からみずからを隔絶し、その機能を資本主義の与件を外部から維持確保する(たとえば、治安・国防・一般教育など)という外部的なものに限定したのである。

「自由主義」「チープ・ガヴァメント」がそのスローガンとなつた。だが帝国主義段階に入つてそれは変化した。いわば資本主義が自らの政策を遂行することが必要となつたこの段階では、国家と資本主義との結合は明白となり、資本の利益を公然と代弁した政策を国家は遂行する。諸財政政策、帝国主義戦争、そして国家独占資本

主義の形成とともに、国家はみずから資本主義的再生産の主体となり私的所有を集中的に擁護するという性格をあらわにした。だが、こうしたこうしたあらわとなった国家の階級の本質をおおいかくすための欺瞞的諸形態をも同時につくりだしたのである。国家の公共的

性格。こうした資本主義の段階的發展に対応した国家の役割の段階的変化の最後の段階で、権力の問題を不明確なままにして提起される国有化のスローガンは、反動的な欺瞞的なものでしかありえない。いかにも、国家独占資本主義は、ある意味では社会主義への物質的前提をまったく成熟させたものである。そのかぎりでは社会主義への過渡である。国有化のスローガンは、権力の問題が現実、提起されざるをえないような、階級闘争の過熟した状態のもとでは革命的スローガンたりえよう。(一七年のロシア、第二次大戦直後のヨーロッパ)。だが、こうした条件のないブルジョア支配の比較的安定した時期には、なんの革命的意味ももたない。一定の条件のもとでは、国有化はむしろブルジョアジーの、スローガンでさえある。(三〇年代のナチス・ドイツ・フランス・日本、現在の日本の石炭産業)

国家独占資本主義のもとでは、国家権力の奪取が決定的な意味をもつのだ。

X X

「構造的改良」はここに破産した。

それは、スターリン主義の不毛と化したドクマ主義に対する批判に出発し、世界の情勢とイタリア資本主義の現実の具体分析によつて国家独占資本主義の諸現象を把握することに成功し、社会主義革命を明確に提起した点において、彼らにたいする批判に際してマルク

ス・エンゲルス、あるいはレーニンの古典の引用による原則の対置しか行いぬにもかかわらず具体的革命の戦略としては相もかわらぬ二段階革命戦略（民族民主革命、あるいはブルジョア民主主義革命、ドゴールに対する共和制擁護）をプロレタリアートになげつけることしかできないオールド・スターリン主義者（ガロディ、志樹義雄など）より前進してはいる。だが彼らは、国家独占資本主義を資本主義の段階的發展として明確にとらえず、その個々の混沌とした現象を把えたにとどまったために、国家諸機構（議会も含めて）の公共性の増大に幻惑されて、国家独占資本主義段階におけるもとも徹底した日和見主義を完成させたのである。

#### 十四

あらゆる国において、ようやく帝国主義の植民地支配から解放されたおくれた国においても、資本主義は疑いようもなく国家独占資本主義の道を歩みつづけている。それが熾烈な市場競争を展開しつつやがてはげしい政治的対立にまで発展しようとしている現在、世界プロレタリアートは一刻も早く真の革命的綱領を手にしなければならぬ。あらゆるブルジョア支配の欺瞞的機構・イデオロギーは徹底的に暴露され、すべての日和見主義は根底から粉碎されなければならぬ。

そして、この綱領の基本的内容は、プロレタリア独裁の樹立と世界プロレタリア革命である。

巨大な破壊力をもつにいたり、人類の皆殺し戦争・両階級のとも倒れをも現実の可能性とするにいたったといわれる原子兵器の出現も、この綱領にいささかの変更を要求するものでもない。原子戦争

の危機そのものが、国家資本主義において腐敗を極点にまですすめた資本主義の矛盾の表現にほかならないのであり、ブルジョア支配の転覆とプロレタリア世界革命のみが、この危機に革命的血路をひらくものだからである。

プロレタリア世界革命を妨害する、いかなるイデオロギーもいかなる組織も、プロレタリアートの敵として抹殺されなければならないのだ。

#### 《時評》

### ポーランド映画をめぐって

九 井 喬

ポーランド映画『灰とダイヤモンド』がわれわれの前に提起した問題は非常に興味深いものがあり、ここに二カ月間の映画評論家たちの、また前衛的な芸術家たちの話題をすっかりさらってしまった感がある。

だがこれをめぐっての論議はあきらかにありきたりの映画評に終りうる性質のものでなく、とくに、この映画についての花田清輝と武井昭夫の間にたたかわされた議論は、江藤文夫の指摘をまつまでもなく（読書新聞、八月八日号）体験談や世代の対立をこえてどこまでも下降しつづけ、つい最近花田清輝と吉本隆明の間の論争によってはつきりと火ふたを切られたこの二つのイデオロギーの対立を含みながら、刻々とその対立を一か八かの爆発点まで追いあげてゆきつつある今日の現実の姿を、見事に浮

彫にしているように思われる。われわれにとってさらに一歩前進するための契機をこの中から掴みだして行くことは、絶対に必要なことに違いない。

映画の内容については詳しく述べる必要もないであろうが、監督アンジェイ・ワイダにとつては前作『地下水道』に続いて、三部作の第二番目の作品であるといわれ、内容の上でももちろん重要な関係がある。

『地下水道』は一九四四年の有名なワルンヤワ蜂起に際して蜂起した抵抗軍の一部隊が指令により市の中心部へ結集するため地道へ入り込むのだが、ついにそこを脱出することができず、空しくその生命を燃焼してゆく過程をドキュメンタリー・タッチで描いたものであり、今度の『灰とダイヤモンド』の主人公であるマチュックは、こ

の地下水道へ潜入した抵抗部隊の生残りである。物語はナチス・ドイツ降服の日、一九四五年五月八日から翌日にかけてのほぼ二十四時間の出来事である。というより戦時中をナチの占領の下にくぐり抜けてきてこれからまさに新しい時代が始まるという歴史的な屈折点に立たされた当時のポーランドの複雑な状況を、終戦の日の二十四時間の中に圧縮し典型的に描き出そうとしたものであり、構成は隔から隔まで緊密に計算しつくされており、ここにあらわれたワイダのシネマトラルギーは、相当に見事である。

ポーランドは第二次大戦にあたって、一九三九年九月、西部をドイツの、東部をソ連の占領下へと分割され、四一年六月、独ソ戦開始とともに全土をナチの支配下に置かれている。そしてその間のレジスタンスは旧支配階級によるロンドンの亡命政府と、共産党を中心とした革命勢力によって行われたのであるが、四三年ごろから、戦後の新政府の構想など、レジスタンス内部での両派の意見の対立は次第に激化し、そのためレジスタンス内部で種々の悲劇が起る。『地下水道』にしても、カワレロヴィチ監

『影』にしても、当時の状況を扱ったポーランド映画は、いずれも多かれ少なかれこれをテーマにしている。『灰とダイヤモンド』の主人公マチュックはロンドン亡命派の抵抗組織に属していた青年で、そのため第二次大戦が終局に近づき、それと同時に内部対立が激化してくると、もっぱらレジスタンスの蜂先をソ連軍および革命勢力の指導部へ向け変え、上部からの指令によって共産党の幹部などを暗殺するテロリストとして活動しているが、彼自身そのような上部からの指令に対し、またみずからのそのような行動に対し、なんら懐疑的ではない。そして終戦の日、たまたまいくつかのきっかけから自分の価値をみずから対して問わざるをえない立場に追い込まれるのだが、彼はそれらの疑問を押しつぶし、テロリストとして死んでゆくといった話である。第二次大戦当時のポーランドの状況を、この映画はかなり典型的にとらえている。すなわち、マチュックがその暗殺すべき相手をつまわしている間に、ドイツの降服と祖国ポーランドのあらたな出発を祝う宴會が、市長そのほかソヴェト軍將校などのおえら方を集めて派手に行わ

れるが、これは当時の新政権（民族解放統一戦線とロンドン亡命派の連立政権）の象徴であると同時に、それへの辛辣な批判であろう。マチュックが暗殺すべく指令を受けた相手というのは、共産党の地区委員でドイツの降服とともにモスクワから帰国した人物であるが、そこで彼はかつてポーランドに残っていた一人息子が現在ではマチュックたちと同じ反革命の部隊に属していることを知るのである。ラストシーンに近く、祝宴は夜を徹して行われ、煙草のけむりが立ちこめるホールに朝の光がさしこむ中で、市長を含め最後に残った五、六人の客がショパンのポロネーズを踊るところがあるが、当時の新生ポーランドの奇怪な有様をたくみに描いているといえよう。つまりすでに打倒されるべきはずであったところのものがいまだに生き残って、あらたな出発を祝っている。そして一方ひたすらに対独レジスタンスを闘い抜き、その中に青春を埋没させてきたマチュックは反革命テロリストとして死に、モスクワ帰りのコムニストは反共ゲリラ隊の一員としての息子を目前に、マチュックの手に倒れねばならない。

この映画の積極的な意義を武井は次のように評価した。すなわち、第二次大戦後現われたイタリアン・リアリズムの背後にはレジスタンスの経験といったものがあつたわけだが、今日のポーリッシュ・リアリズムの背後には、とくにワイダの場合などは、戦争体験と戦後ポーランドにおける戦後体験とが二重写しになって出てきている。そしてワイダによって代表されるポーランドの若い世代をしてそのような探求におもむかしたものは、やはり五六年の十月政変がそのきっかけだったのであろう。戦後十三年の体験を戦争体験との関連で掴みなおしたという要求がポーランドの戦後派をつかんだのである。主人公マチュックの死によってワイダはなにを言おうとしたのであろうか。生命を賭けた、あるいは賭けさせられた戦争（あるいは革命運動）が終って、（あるいは方向転換して）、時代は大きくカーブを切る。器用にカーブを切れない精神というものが青春にはある。それが革命にとってかけがえのないエネルギーだと思われるが、それらが方向を見失い、時代や秩序からとび出してゆく。ワイダはそのように方向を見失い、浪費されていったエネルギー

の存在を指摘することによって、そのようなエネルギーを組織しえなかつた運動の責任というものを追求しているのである。そしてそのことは同時に、いまだにそのようなエネルギーを組織しえない十月政変後の今日の政治状況の追求でもある、というのである。

『灰とダイヤモンド』に対する花田の否定的評価は次のごとくである。これは武井が『ヤンガー・ジェネレーションの戦後意識』（記録映画八月号）で、花田が『無邪気な絶望者たちへ』（映画評論七月号）や『座談会・危機意識と新しい人間像』（新日本文学八月号）において主張したことを彼なりに整理しているのだ、それを引用する。「戦争と抵抗の時代が終り、新しい革命と建設の時代が始まろうとするとき、そうした歴史の曲り角をのりきれず、ために現実変革のたたかいから脱落したものになんかの価値があるか。まして状況の変化に対応できず、反革命に転落したものなどは、非情に突放して断罪すればよい。ところがワイダは、おのれの青春へのノスタルジアから、このテロリストの末路に惜みなく慟哭の涙をそそいでいる。その結果、かれは新

生ポーランドを真にささえ、その建設を推進した積極的エネルギーを描きだすことができなかつたのだ。そこには今日、すなわち五十六年十月政変以後の状況下におけるコムニストとしての責任に欠けるものがある。——これが、わたしなりに整理してみた、花田の『灰とダイヤモンド』批評の要旨であつた。要するに花田は、ワイダがおのれの青春をいささかナルシズム的に追憶していると解釈し、そこに、『地下水道』からの後退を感じとっているらしかつた。それは、いかにも花田らしい発想であり、なまなかの肯定論より、わたしにははるかに面白かつた」と武井はいつている。しかしさらに花田が「燃えあがり、燃え朽ち、すでにひとにぎりの灰と化しきつているにもかかわらず、なお、自分を一個のダイヤモンドだと思ひこまないではいられないような人間の手にかかると、政治は、すこぶるメロドラマチックな様相を帯びてくる。しかし、現実の政治は、革命や抵抗の場合であつてもひどく散文的なものではあるまいか」と青春のナルシズム批判を敷衍し、ワイダは「若くして追憶のとおりとなり、新生ポーランドの支配者たちの姿を、

極度に矮小化しながら、例のフレインを——あの当時は、青春とロマンチック時代だつた。ところが、いまはどうだ。国家と法令の時代なのだ。——を、たえずくりかえしているようにみえる。むしろ、ポーランドの戦後の政治には、弾劾に値するような幾多の事実があつたであらう。しかし、そこには、また、現在の生活の一行一行が抵抗生活の一ページに相当する——といったようなスリルとサンペンスにとんだ日常闘争がなかつたとはいえない。」という時花田はわれわれの前に多くの問題を提起しつつも、はつきり克服されるべき対象としての姿をあらわすのである。

武井は続けていう。「花田の攻撃の鋒先は、『灰とダイヤモンド』そのもののみに向けられているのではなく、実はこの映画によって惹き起されるであらう、甘つたれた青春追憶のムードにむけられているのかもしれないと思ひあたつた。なぜなら、批評の卓越した戦術家である花田の論法にはたえず裏があると見なければならぬからである。」

たしかにわれわれはある部分において、花田の発言の有効性を認めるべきかも知れ

ない。花田は終戦後一貫してそのエッセイ『笑う男』や『作家と予言者』などの中で「革命とは、老廃した組織を破壊することではなく、新しい解体しなかった組織を整理したる組織に再組織する、きわめて地味なうごき」なのであるとして、破壊よりもねばり強い組織化を絶えず強調し、その場合の組織者主体に対し、つねに無機物へ同化しその中からまったたく新しい有機的な結合の可能性を見出してくるような組織力を要求しつづけてきたといえる。あるいは別のいい方をすれば、進化のおわったところからはじまり、ふたたび進化のはじまるところでおわる革命のいくつかの段階において、革命家の自己否定は、まず第一に進化の期間中に形づくられ過去の彼自身と断然手を切る事によって行わねばならずさらに革命の期間が過ぎて進化の期間がふたたびめぐってきた場合、彼はみずからの手で革命家としての彼自身を完全に葬り去らねばならないという一層困難な第二の自己否定に直面する、という考え方あたりに、明かに彼の今日の青春のナルシズム批判の萌芽があるのだ。たとえば、スターリン批判に際して反応を示したところの一連の批

判勢力の中から、それが単なる即自的な批判勢力に止ることを欲しない、スターリニズムに対する単なるアンチ・テーゼの域から脱皮して一つの革命勢力として大衆闘争の先頭に立つてゆこうとするに当って、いたずらにスターリン批判のみを、党内闘争のみを自己目的化することによって、大衆闘争の中に自己を位置づけえなかつた部分があった。今あげた例を考えてみる時、花田の指摘が、決してそのような部分に対して直接向けられたものではなく、単にスターリン批判に際してのリベラリティックな右からの反応に対して向けられたものであること、そしてそもそも彼自身スターリン批判に対する反応としてはそのようなリベラリティックな右からのものしか眼中になく、逆に左の方からこのスターリン批判をとらえた部分の存在についてはまったく気がついていないらしい、あるいはすでにそういう動きをとらえる能力を喪失しているらしいということが認められる。そうだとすると、また、花田の主観的意図がどうであろうと、われわれのそれに対する受けとめ方によっては、一定の有効性を発揮しようということとを認めることができるの

ではないだろうか。  
それならばその有効性とは、果してなんだろうか。

『地下水道』、『灰とダイヤモンド』におけるアンジェイ・ワイダ、『影』におけるカワレロヴィチなどの立場は、おそらくタブラ・ラサへの志向であろう。それはなんら空虚なものへの志向を意味しはしない。それは彼らが現時点における眼まぐるしいほどの問題意識の充満にあえていることを示しているのだから。そして彼らが今日の現実に対する危機意識を深めれば深めるほどつまり彼らが戦後十数年の、十月政変を経過する過程を、肯定的にはなく、ますます進行する危機的状況としてそれらを否定的にとらえればとらえるほど、みずから出発点へ今一度立ち帰り、それに続く戦後の体験を再検討しなくてはならぬという彼らの志向は、のびきならないところまで追いつめられるのだ。それはけっして花田のいうような、『現在に対する単なる消極的な批判に転化する』ところのノスタルジアではなく、かえって、徹底的な現状打破の精神に貫かれているのではないだろう

か。そして武井がこれら若いポーランドの作家たちの危機に敏感な反応を示したのに対し、花田がこれを汲みとりえなかつたということは、花田における一つの眼界の暴露であるといえることができるであろう。すなわち、このようなテーマの設定自体に疑問を抱く花田において、今の状況に対する危機意識がまったく欠如していることは明らかだ。彼にとって、ポーランドの戦後十数年の歩みは社会主義への着実な前進であり、そういう『公認』歴史の流れに対する一切の疑問は、彼の眼から見ればまったく反革命でしかありえないらしいのである。彼にいわせれば第二次大戦後のポーランドは進化の期間に突入したというわけだろうか。しかし、ワイダがあえてドイツ降服の日を描いたものも、そもそもそういう考え方に対し痛烈な批判をあげせかけるためではなかったか。ナチスドイツの降服とともに、今までよりもさらに熾烈な革命的状況の中へ突入すべきであった当時の情勢をまったく逆に、これで革命は完了した、これから社会主義建設の時代だとして違えてしまった(少なくとも結果的にはそうだった)のは、はたしてどこに間違いがあっ

たのか。ワイダは執拗にそれを問い続けているのではないだろうか。武井にしたところで、ポーランドにおける社会主義建設はいぜんとして疑われておらず、戦後の歴史をまったく敗北の歴史としてとらえているわけでもないであろうが、ともかく十月政変以後の混乱を危機的にとらえるだけのみずからの危機意識があった。花田の戦後の状況に対するとらえ方には、それさえもないのではあるまいか。  
しかしはたしてポーランドの若き世代たちは、現状打破の明確な現点をうちだしているであろうか。日本の若き世代である武井はいう。「ワイダが『灰とダイヤモンド』で試みたのは、異なった状況におかれたならば、まさに積極的エネルギーとなったであろうおびただしいポーランドの青春が、いかに無意味に灰と代したかを描くことによつて、真の青春の燃え方を逆に照しだすことであつた。さらにまた、それは、このエネルギーをいまだに再組織しえぬ現実への批判である。それは言いかえれば、十月政変の中でゴムルカ政権が青年のエネルギーに注目し、アナキーな拡散をいとめ結集し、再生の道をきりひらこうとした政治

コースへの、側面からのバック・アップであつたとわたしは思う。」

ここでおそらく武井は、いくぶん花田の影響もあつてか、いささか結論を早まりすぎているような気がする。それがはたしてゴムルカの政治コースへの側面からのバックアップであつたかどうかということは早急に論断を下すべきではあるまい。むしろ、彼はより大きな問題への発展の可能性をここでみずからおしつぶしているのである。そこには花田とよく似たごくごく安易な現状肯定へすべりこむ道がひらけている。そしてまさにここに青春のエネルギーを無意味に灰と化する第二の道があるように見えるのである。日本における戦後十数年の革命運動の敗北の歴史をつぶさにならめてきた武井が、現在ふたたびみずからの戦後体験や競争体験をとらえかえすことによつて新しい方向を追求しようとし、その地点からポーランドの若き世代に共通の課題を見出したとするならば、彼は当然、みずからポーランドの若き世界の志向する方向を、けっして今日の時代の支配的傾向・革命の戦略論から外れるものではないというところをあらかじめ主張することによつて

みずからの立場の合理化をはかったり、まず安全な立場を確保しておいてから問題を検討するといった姿勢をきつぱり切り捨て一直線にタブラ・ラサの精神的な状況へとびこんでゆけばいいのだ。それに対して青春のナルシズムだなどという連中にはいわせておけばかまわない。もしそれが青春のナルシズムであるとするならば、まさにそれはわれわれにとって青春のとく権ではないか。有益なものはずっと利用すべきだ。あるいはその結果すべての革命的といわれる既成の権威をすつぱり否定してしまわねばならないことになるかも知れない。その時彼はタブラ・ラサ的な物質的状况の中にある自分を見出すことだろう。

要するにわれわれの根本的な姿勢は次のところになくはならない。すなわちポーランド映画にあらわれた、ワイダ、カワレロヴィッチなどの戦後派をして、今ふたたび彼らの戦後体験を検討するという欲求を起さしめた、十月政変に象徴されるところの今日のポーランドの現実への危機意識、これをいかにして深め——しかも、武井のように現政権への側面からのバック・アップであった、といった安全圏内にそれをお

しとめるのではなく——より明確なスタリリン批判へ、より決定的な現体制への批判へ、そして現状変革のための明確な理論的なプログラムへその危機意識を止揚してゆくか、というところにある。そしてそれは基本的には日本におけるわれわれの問題と、なんら異なるものではないであろう。われわれは戦後十数年の日本の革命運動の挫折の歴史を、現在の時点で深く根をおろすことによって、自らの危機意識をねばり強く過去へさかのぼらせ、その病根をえぐり出してゆく必要がある。武井は、ポーランドの場合に比して、日本においていまだこのように危機意識をはらんだ作品が生れてこないことの理由を、作家主体における危機感の喪失に求め、この点からも、今改めて戦争体験とか戦後体験といったものを振りかえつてみることの必要性を強調しているが(キネマ旬報No.二二六における座談会)はたして危機意識喪失症への治療法は戦争体験、戦後体験を振り返れというよびかけだけで十分であろうか。

『灰とダイヤモンド』の場合に即していうならば、われわれは次のようなことはいえるだろう。すなわち、われわれは主人公

マチュックと、それを見つめるワイダとの距離に、もつと注目する必要がある。そして花田の再度主張する、非情に突放して断罪する視線を、ワイダがマチュックに対してよりも、より一層自分自身に対して注ぐならば、今日の危機的状况をより尖鋭にとらえうる可能性が現われるだろうということである。よし花田が政治的にはまったく革命的な言辭を弄するにいたり、どうみても、彼自身のことばを借りるならば、意識的なドライ・フルから本物のドライ・フルへ移行してしまつてとしても、彼が戦後一貫して追求してきたドキメンタリズムを頂点とするアヴァンギャルド芸術の方法が実際に有効性をもつようになるのは、これからかも知れないのだ。そしてすでに一部の記録映画作家たちの間で、戦後のアヴァンギャルド芸術運動の理論をふまえた地点から、戦後責任をとらえかえそうという動きが出てきていることに注目する必要があるだろう。

## 現代における革命と労働組合(Ⅰ)

### プロフィンテルンの教訓(二)

——(二回大会から英露委員会まで)——

清 川 豊

### 革命的労働組合運動の発展とその戦術

#### 八

「プロフィンテルンはいまだ非常に若い組合である。それは最初の一年は国際労働組合評議会の名の下に存在した。だが国際的革命的労働組合運動の中心点、結晶の中心としては、プロフィンテルンはようやく九十五カ月間存在して来た。この期間全世界に於ていかなる活動が遂行されたかを検討するならば、我々は大胆に主張することが出来る。労働大衆の結集のために大きなことがなされた。だが、このなされた活動も、我々になお迫って来る為すべき仕事に比すれば消えてなくなるほど小さいものである。」

一九二二年十一月、プロフィンテルン第二回大会を前にしてのべたこのロゾフスキーの言葉は、革命的労働組合運動の第一期の様相を正しく伝えている。

前身でのべたプロフィンテルン創立までの活動から、一九二三年までは、革命的労働組合が全世界にひろがる時期であった。プロフィンテルンは二一年、二二年に開かれた二回の大会において方針を決定し、この期間の闘争の先頭に立ったのである。(この表現は不正確である。正確にはコミンテルンの指導を大衆的な形で実践したというべきであろう。)

プロフィンテルン一回大会はコミンテルン三回大会で採用されたものと同一の行動綱領を採択した。四十一カ国三百八十名の代議員の参加の下に、二週間にわたって行われた大会討論は、当時の赤色労働組合運動の方向を定まるところなくあらわしていた。大会討論は、プロフィンテルン創立までの諸論争の総決算であった。サンディカリストと共産主義者の論争が二週間の討論の中心であった。

大会討論の中心の第一はここにあった。サンジカリストはコミンテルン——共産党自体を否定し、労働組合の独立を主張したのに対

しロゾフスキーを中心とする多数派は次のように主張した。

「筆者の意見は、唯一個のインターナショナルのみ存在し得るのだ、というものである。なぜならば吾々がインターナショナルを防衛的及び攻撃的闘争行動のための世界的組織と理解する限りは、それた何等諸政党、諸グループの機械的統計ではないからだ。インターナショナルには大衆の全革命的エネルギーを自己の中に集積しなければならぬ。そのエネルギーが如何なる組織形態——党の形態にあるいは労働組合、あるいは協同組合の形態に——現われていようと、何れにせよ、である」(ロゾフスキー、コムニステイッシュ・インターナチオナル誌第十八号の論文)これは第四回全ロシア労働組合大会においても採用された見解であった。大会は結局「自主的な、独自の組織としての労働組合インターナショナルは、その活動をコミンテルンの活動と同格ならしめ、且つあらゆる行動に於いて後者との協力を志す。」との表現の下に、両組織が代表を交換することを決定した。

この決定は他のあらゆる問題の方向を決定したものとされた。フランス代表はこのためについてプロフィンテルンに参加をしなかった。(翌年の二回大会においてこの条項をとり消すことを条件に加)

今日われわれが世界革命の主体としての新しいインターナショナルの結成を語っていることと対比するならば、こうした組織に対する思想は奇妙にさえ感じられるのである。一國において共産党と革命的労働組合がともに存在する場合、インターナショナルに両方とも入る、ということとは一体どういふことなのか？

だが当時の情勢は、サンジカリストが労働組合として強大なのに

「組合することは不可能である」ことを宣言し、イタリア労働者ヘモスクワへくるよう檄を發した。アムステルダムとの闘争においてこの決定は大きな指標をなすのである。

\*その後イタリアではファシストの支配の下に労働組合そのものが非合法化されてしまった。一九二六年プロフィンテルンはイタリアにおいて、約一万の支持者をもっていると発表している。

#### 〈革命的組合の組織〉

サンジカリストと改良主義者に対する基本的な態度の上に立つて大会は革命的労働組合の結成に対する方針を打出した。「労働組合の破壊ではなく獲得」のスローガンは、その中心をなすものである。

プロフィンテルンは一國の労働組合の中央組織のほか、いわゆる「革命的少数派」の参加を認め、それは大きな割合をしめていた。当時の労働組合は、今日のそれとちがって個人的に加盟するものがあり、一つの工場内において、色々な組合に属するものがあり、しかもいずれの組合にも入っていないものが大部分を占める、というものであった。したがって組合幹部に反対するものが、少数の新組合を作ることはたやすいことであった。「現在の官僚的労働組合は運動を毒するのみである」との立場から、サンジカリストや極左分子は改良主義組合を脱退して自分たちの組織をもつ傾向にあった。大会は、レーニンの「左翼小児病」の思想をもとにこれを激しく排斥し、各国別の組織方針を決定した。

基本的な方針は、(一)産業別組合に再編成することであり、(二)その上に立つてその國の組合全体をアムステルダム・インターから脱退

反し共産党は生れたばかりというものが大部分であった。ノルウェーにおいては、労働組合員のほとんど全部が共産党員であったのでこの問題は存在しなかった。スペインにおいては約百万人のサンジカリストに対し、共産党は半年ばかり前に成立したばかりでその数一万人に過ぎなかった。こうした中においては、一方においても労働組合の連合として巨大な潮流が作られる一方、全世界共産党を建設するという作業がなによりも必要であった。レーニンが各國におけるこの論争は、組織問題の形をとりながらも、サンジカリズムに対するボルシェヴィキの思想の闘いであったのである。

翌二二年の第二回大会において、これほどの論議をつくして決定されたコミンテルンとの「相互代表派遣」はあっさりとして下げられた。これこそコミンテルンとの友好関係を明白にしつつプロフィンテルンは資本主義國における最大の部隊としてフランス統一労働総同盟(CGTU)をその隊列に加えた。

#### 〈イタリア労働総同盟問題〉

コミンテルン論争とともにプロフィンテルンの方向を決定する今一つの討論はイタリア問題であった。前号の宣言書にみた通り、イタリア労働総同盟は、プロフィンテルン創立準備者の一人であった。しかしその後、イタリア國內においては改良派と革命的分子の激しい闘争が展開されていた。イタリア社会党がコミンテルン加盟をめぐって分裂し新しくイタリア共産党が結成されていた。こうした中で労働総同盟は社会党に残った分子に多く握られており、彼らはアムステルダムとモスクワの両方に同時に所属することを決定して大会に出席した。大会はこれに対し「両インターナショナルを混

させ、プロフィンテルンに加入させることにあった。

今日日本においては「産業別組合」が万能薬のごとく語られているが、当時の事情はそれとはいちじろしく異っている。プロフィンテルンが「産業別」に編成がえを要求したものは、「職業別(職能別)といった方が正確であろう)組合」に對してであった。かつてのギルドの発生を残す職能別組合は、同じクルップ工場ならクルップ工場の中で、機械組立工は組立工組合、鑄造工は鑄造工組合、に属している、といった形で組織されていた。このため組合はきわめて閉鎖的であり資本に對して階級として闘うことは困難が多かった。革命的労働組合がこれに對してかかげた組織スローガンは、「一企業、労働者と従業員は総べて一組合へ」であった。「一工場——一組合」に結集された組合員を、全國的ないくつかに結集し、かくして産業組合を作るのである。

こうした組織方針は、大戦後の階級闘争の必然的課題であった。帝国主義段階に入ったブルジョアジーが、巨大な独占資本——カルテル、トラストなど——を結成する上に多くの先進國において、企業家の産業別の協会が結成されていた。労働者階級の団結は、資本家にはるかに後れたとはいえ、一般的風潮となりつつあった。ドイツにおいては十一月革命の直後作られた二つの組合——一つは企業家と改良主義者による協調組合、今一つは革命的労働者評議會——はともに同じ方向で組織を開始した。ドイツ労働組合総同盟は、全經濟を十五に分類し、ベルリンの工場委員会中央評議會は、同じく十四の分類を決定し、産業別組織をつくった。ロシアにおいても革命前後の二十の産業別組合を十七—八にする作業が当時進められていた。プロフィンテルンがこの新しい組織方針をもって發展するの

に対し、アムステルダム派もまた、特権的職能組合の地位を保ちつづこれにならった。

プロフィンテルンは、組合脱退を主張する極左分子を排して、旧来の組合と、未組織の労働者とを合わせて獲得することを中心とした。共産主義者ないし革命的サンジカリストの握る組合では（ノルウェー、チェコなど）未組織の獲得のみでことたりたが、改良主義者の支配する組合では、革命的少数派（その名称は色々であるが）を組織した。組合内部における公然たる反対派として活動し、組合の多数獲得のために、幹部と闘争を開始した。

工場委員会は、この場合、最大の足がかりであった。「工場委員会」は、一九一八年のドイツ革命にその起源を求められているが、それはロシア革命におけるソヴェト（労働者・農民・兵士評議会）と類似のものである。これは同一工場内において、その所属する組合、あるいは政治的、宗教的見解にかかわらず全労働者から選出される機関である。ドイツ革命の当初発生したこの組織は、労働組合指導部に大きな恐怖となつた。情勢の発展によつて、組合幹部の手をはなれて、大衆がみずからの選んだ指導部の下に動き出したからである。

革命的労働者は、これを足場に、闘争の指導部に喰込むことができ、改良主義者を暴露し大衆の前にみずからの方針を示すことができるからであった。

改良主義者は、この工場委員会を自己の支配下におくために色々の謀略を行った。一つは工場委員会の構成を自由組合員にかざれという形であった。プロフィンテルンは彼らの「キリスト教組合員や、組合にも入らぬような連中と妥協はできない」という馬鹿げた

主張に対し、全労働者の団結と平等選挙をかかげて闘った。今一つは、ドイツ、オーストリア、チェコなどに当時（社民党政府の影響で）行われていた「合法的工場委員会」の組織であった。ブルジョア法律の保護の下に、作られた工場委員会に対しても、プロフィンテルンは積極的な参加を要求した。今日日本に見る企業組合のごとく、ブルジョアジーは労働協調の機関に転化することを狙つたものであるが、革命的労働者はこの選挙に進んで参加しその細胞を組織するよう要求されていた。もちろんそれは、ドイツ共産党などに行われていたボイコット戦術を根本から否定したものであった。

こうして、工場内における革命的組合（または少数派）——産別全国組織（同）——全国労働中央直織（同）——プロフィンテルン、の組織体系のほかに、アムステルダム派の大きな拠点となつてきた、国際業職的別組合組織に対しても、革命的反対派の結集がはかられた。大は国際的な金属組合連合から、その組織人員わずか千五百人といわれる国際理髪職工組合書記局にいたるまでの組織に対し、プロフィンテルンは、ロシアの当該労働組合を加盟させるとも、「職業的国際宣伝委員会」を作つた。後述のごとく、ロシア労働組合の参加はアムステルダムよりことごとく拒否されるが、国際宣伝委員会は、後に作られるプロフィンテルンの各大陸支局とともに反対派の中心としての役割をはたした。

（世界的な組織化と婦人労働者の獲得）

組織上において、アムステルダム・インターと著しく異なる今一つの点は、いちやく植民地・後進国の労働者とその隊列に加えたことであつた。ドイツ・イギリス・フランス・オランダなどという、西欧諸国のみから成り立っている上に、帝國主義を支持するアムス

テルダムに先んじて、事情および植民地の闘争をその隊列に加えることは共産主義者の当然の任務であつた。東洋および南米の植民地労働運動の指導は、年とともに具体化されるが、すでに創立大会に集つた四十四カ国という数字は、当初からのその方向を示している。支那（当時の呼称によつて）印度・ジャワ・日本などにおける闘争の発展は、直接プロフィンテルンに結合された。二十年代後半以後、アムステルダム派が意識的な東洋工作にのりだすまで、プロフィンテルンはこの分野で独り活動していた。

また大会はイギリスなどで現れた婦人労働者の追放——改良主義者のその是認と闘い、米・米・バルカンなどにおける人種問題を、階級的立場に立つて解決すべきことを提起した。

（革命的労働組合の戦術）

一回大会は、労働組合の戦術に関する長文の決議を採択しているが、その中心点は、当時の改良主義者の協調政策——経営参加、国有化、最低協約——などに対する、実力行動の強調であり、その政治闘争への転化、資本主義打倒の闘争への発展であつた。ブルジョアジーの攻撃は、戦後の混乱をのりこえるための露骨なものであつた。終戦直後、改良主義者によつて作られた「国有化」や「合理的賃金」「労働機構」などは、八時間労働の破棄・賃金引下げ・大量首切までとつてかえられつゝあつた。ストライキは激発し、資本家側のスト破りは、強力な自衛団となつていった。

大会は、賃下げや工場閉鎖に対し、労働者階級の實力闘争——しかも全国的・国際的統一闘争を呼びかけた。大会は失業反対闘争は資本主義の打倒なしに勝利しえぬことを明らかにしつつ、失業者と元所屬せる組合との統一行動や企業引渡し、失業保険、家賃・教

育費の全負、自治体への援助強要などの戦術を打出した。大会の決議は次の言葉によつて結ばれていた。

『諸君はこの闘争において犠牲となつた最初の人々だ。だがまた諸君は攻撃に移るであろう最初の人々でもあろう！ けれども思へ諸君は他の労働者と結束した陣列につき、全労働者階級の利害を護る時のみ勝利することができるとを！』

工場で働いている労働者は失業者の運命を分ち与へられることはないとい決して信じてはならない。失業した諸君の兄弟の闘争は、全労働者の闘争でなければならぬ。赤色労働組合は、失業者の闘争を労働組合の旗の下に遂行し、また闘士の戦列が失業者と従業者を包括するようなあらゆる方策をとらねばならぬ。』

三十七年後の今日、改良主義者の下にあえぐ日本の同志よ、この決議は今も生きてゐるのだ。

紙数の関係で、このほか多くの戦術についての決定は省略するが大会において重大な論点となつた「労働者管理」の問題のみをふれておきたい。今日炭坑労働者への大々的な合理化攻撃が加えられている。労資の間に妥協の余地のなくなったこの闘いにおいて民同・共産党、あるいは革共同の諸君から「炭坑国有化」のスローガンがかかげられている中で、この紹介は有益であらう。

当時——一九一九年から二二年ごろの間、「労働者管理」の問題は二つの面から論争的となつてきた。その一つは社民指導部によつて出された「計画」であり、今一つはイタリアを中心に全ヨーロッパに荒れ狂つた実力による「工場占領」の戦術からであつた。

大戦中に政権をにぎつた社会民主主義者は片山内閣の炭坑国有化のごとく、さまざま「国有化」計画を行おうとした。ドイツでは

労働者と企業家が同権的に代表される「協調組合」がつくられた。イギリスではフェビアン協会会員たるシドニー・ウェップの「産業における民主主義」が論ぜられていた。フランスでは、ジュオーらによって「復興のための組合運動」が労働総同盟（CGT）の方針として作られた。「われわれの方向は実質的な活動に向けられなければならない。単に街頭で騒動をおこすだけでなく、生産の管理も自分でできなければならない」（一九一八年CGT全国委員会の決議）という思想がその中心であった。彼らは「最低綱領」を発表しその改良の要求をとることによって資本主義の復興、援助にはげんだのである。

「共同の富とそれを生産する手段とを所有することにたいして、国民がその社会的権利を回復し維持しまたはあらたに確立するのでないかぎり、経済的再編成も十分に有益な効果をあげることができない。」と。（第二次大戦後はこれとまったく同じことが共産主義者によってかかげられていることは後に明らかにするであろう。だが当時も今もこの思想はブルジョアのもののなのである）

改良主義者が資本家とともに復興に腐心している時、労働者階級はまったく別に生産の管理を自分でやり始めていた。

「工場占領という観念は、労働者大衆のうちに非常に大衆化されている。（ロゾフスキー、プロフィンテルンの行動綱領解説）ロシヤにおいてはすでに十月革命において行われたこの闘争形態は、一九二〇年末イタリアにおいて巨大に爆発し、全ヨーロッパにひろがった。「工場閉鎖は、現在、労働者に対する闘争もしくは威嚇の方法として利用される。このブルジョアジーの抑圧方策に対するもつとも有効な闘争手段は、労働者による企業の占領だ。だがこれは常に

よる生産管理を権力獲得の準備のためにかわめて重要な学校であるとし「労働者による生産管理は、総べての資本主義国において、日常における労働運動の闘争スローガンの一つとして掲げられねばならぬ、そして特に権力をあげて商取引と金融との秘密の暴露に利用されねばならぬ」と決議した。

プロフィンテルンは生産管理に対し、一方において「革命的組合の任務は企業家なしに生産を続けて行くことの可能を実証で証明することにある」として、とくに最大の弱点である資金——現金の準備を指摘する一方、「工場占領は、大衆行動と闘争との出発点になる場合においてのみ、一つの役割を果し得るのだ」ということを強調した。

「工場を占領することは、工場を維持するよりも容易だ、ということとを忘れてはならない」

ロゾフスキーはこうのべている。「イタリアの労働者が工場を占領した時にも、これによって彼らはただ一歩前進したにすぎぬ。ところでイタリアではなにが起ったか？ 多くの地区の労働者が製造場を占領、生産を続けさせたが、しかもこれと同時にブルジョア政府は軍隊・警察・裁判所のような全権力機関をそなへたまま損はれもせず存続した。……企業を占領した労働者は、之に反していぜん半途に立ちどまっていた。労働者は、今やすでに一切をかちえたかのごとく見えた。けれども工場の占領は、一個の闘争要因に外ならない。工場の維持は、労働者階級が経済的権力獲得と同時に、政治的権力をも獲得する時のみ、すなわち旧ブルジョア制度を打破して新たな権力機関をつくる時のみ可能である。」

尖鋭な方策であり、もつとも優秀な組織と、かつかくのごとく諸事情の合致することを要求するものである。（同前）とロゾフスキーのべた通り、一九二〇年トリノの金属労働者は、閉鎖を目論んだ工場を占領した。イタリア・プロレタリアートの前衛、トリノ労働者のこの闘争はたちまち全イタリアに波及し、大産業は一挙に労働者の手に落ちた。労働者自身が作り出した工場委員会と工場監視委員会とは、完全な組織と実務の手腕を発揮し、労働者自衛軍の守備の下に活動をした。だが、若きグラムシの心配通りイタリア総同盟は決定的な瞬間に妥協し、レーニンが「革命前夜」と期待した情勢はくずれ去りファシストが占領したのである。

\*「このころグラムシだけがひじょうに心配していた。この運動がすみやかに権力獲得のための闘争に転化されないならば、そして政府と改良主義者が若干の経済的改善の代償に、労働者が工場を放棄するよう労働者に説得することに成功したならば、全イタリアに想像もつかぬ、歴史に類例のない反動と恐怖の夜がおしよせることになるだろうと、彼は考え、われわれに説明した」（山崎功、イタリア社会運動史）——グラムシはこの後イタリア共産党創立の中心となる。

フランスでもドイツでもイギリスでも占領は行われた。一九二一年九月ブルール（イギリス）の製粉労働者は工場を占領し、失業者を編入し生産を続けた。工場の門には次の声明が高くかかげられていた。

「ブルール労働者委員会の製粉製パン工場のわれわれはパンを造り儲けを造るにあらす。」

こうした情勢を背景に、プロフィンテルン第一回大会は労働者に

## 九

プロフィンテルンが一回大会の以上のような方向において活動した一年間、いかなる成果を生じたか？ これを検討するためには、各国内における階級闘争をくわしく検討しなければならぬが、その前にプロフィンテルン二回大会とその後（一九二三年六月に開かれた中央評議会第三回会議からは、前号の最後のべた「方向転換」のきざしが見られる）の概略をのべておきたい。

一九二二年十一月に（コミンテルン四回大会と関連して）開かれた二回大会は「根本的な原則的な諸問題は第一回大会において決定された。来るべき大会は十五カ月間の闘争経験を反省し、然るべき実践的な結論をそこから引き出さなければならぬ。原則的な問題が大体において解決されているとしても、実践的な問題についてはいまだ多くのことを仕上ねばならぬ。」という立場でもたれた。

第一回大会の決議の下に闘ったプロフィンテルンは二回大会の中心に資本の攻撃に対する「統一戦線」の問題をかかげる一方、コミンテルンとの関係を規定した規約を変更しなければならなかった。サンジカリストはプロフィンテルンの成立により分裂した。とくにフランスのサンジカリストは、その共産主義者——コミンテルンの成員を指す——とともに労働組合の絶対的独立のために活動した。一九二二年二月コミンテルン第一回執行委員会においてロゾフスキーはこう報告している。「諸君は「ユマニテ」——党の中央機関紙である！——の中に最初の数カ月間この重要な問題（一回大会の決定を指す）についてただ一つの論説もただ一つの注意も見出されないであろう」もちろん第一回大会に参加していたフランス労働

総同盟(CGT)内の左翼は、この間改良主義者と闘っていた。そして彼らは後述するように改良主義者と分かれ独自の組織CGTUを作った。CGTUはプロフィンテルン加入を拒否しつつ、ほかのサンジカリストはかつて臨時大会を要求した。これと同じ傾向はイタリー、スペイン、アルゼンチン、アメリカを中心とするI・W・W\*、スエーデン、オランダにも見られたが、多数とはならなかった。サンジカリストたちは二月十二日ベルリンで大会を開き、純サンジカリスト・インターグの建設さえ決議した。

\* 世界産業労働同盟、アメリカを中心とするサンジカリストの組織。

第二回大会は、これら純サンジカリストを含めて開かれた。レーニンはこの問題に対して「これらの組合はわれわれの方へくるだろうかそれともわれわれから離れて行くだろうか?」と問い、こゝろを断した。「譲歩してもいいし、しなければならぬ。……もしもわれわれの前に革命的労働者運動——よしそれがサンジカリズムの伝統をもって貫かれていようともわれわれの方へ向ってくる——があるとすればその運動がもっと近づくために、この運動が将来においてこれらの偏見をなくすべくフランスの労働運動に働きかけるた歩しなければならぬ。」両インターの相互代表交換を決めた規約第めに、護十一條は撤回され、CGTUは以後プロフィンテルンの中心部隊となったのである。

だがロシア革命以後の共産主義者の指導する大会においてはじめて取扱われた「統一戦線」の問題は、明確なものとするにはできなかつた。これは当時の直勢の直接的反映であり二三、四年ごろからあらわれる「統一戦線」論とくらべて、未完成でもあり同時に右

翼的でもなかつた。ここでは統一戦線は資本の攻撃に対する労働者大衆の闘争であり、いかにして大多数の労働者を闘争に組入れるかであった。いぜんとして存在する改良組合からの「脱退」の傾向をいましめつつ、各国においてプロフィンテルンの部隊となっている「小党派」に対して「労働組合の統一」を闘争目標にかかげせられたのである。

## 十

革命的労働者は、いかに闘ったのか。一九二〇年ごろから、爆発的革命情勢は一つ一つ低下しつつあった。イタリーの情勢は二〇年末の敗地以来ファシストの支配が強化されていた。イギリスの二一年ゼネストの敗北も同様の結果をもたらしていた。資本の攻撃がようやく本格化してきた時でもあった。労働組合への大衆的結集も止つた。ソビエトロシアにおいても、新経済政策が導入されるのである。だが革命的エネルギーはけつして低下してはなかつた。資本の攻撃に対して労働者階級の闘争は、ふたたび激化しつつあった。

——二三年にはドイツに最後の革命情勢がおとずれ、二四年にはイタリーにムッソリーニの支配がつきくずすべき情勢が、そして二六年にはイギリスに大ゼネストがおこつたのである——「昨年はとくに分裂、除名渉汰が多かつた」とロゾフスキーがのべている通り、アムステルダムと資本家は、赤色労働者を組合から追放することによってプロフィンテルンの誕生を祝つた。金属・印刷・紡績・建築木材・郵便などの国際産業別組合は、ロシアのその支部をいちはやく除名した。フランスでは後述の壮大な分裂がおこつた。『ドイツでは改良主義指導者は、組合幹部の選挙が共産主義者に有利な結果と

なるや否や、ただちにその選挙を取消するのが通例となつていゝ。その際プロフィンテルン所屬員が責任ある地位を手渡さないならば全地域グループの解散すらやり兼ねないのである。』チエコスロバキアでは、ただ組合大会でプロフィンテルンとの思想的連帯を表明しただけで、幾千の労働組合員が除名された。改良主義者は今日全労が第二組合にやつていゝ通り、自分たちが少数になつた時は進んで「分裂」する。

またより反動化したところ——ルーマニアとユーゴスラヴィアにおいては、労働組合は破壊されてしまつた。ルーマニア議会は、労働組合がなんらかのインテラーと関係を持つことを禁ずる法律を作つた。

こうした攻撃の中で、ノルウェーを除くすべての国でプロフィンテルンは改良主義者の中に入りこみ、除名されれば「組合復帰」を要求して闘つた。

\* ノルウェーは全組合を統一した労働組合の中央が改良主義者ではあるがプロフィンテルンに加盟していた。

ドイツでは九百万の組織労働者(なんらかの組合員であることの意味)のうち共産党の勢力下にあるものは二年ははじめ二百五十〜三百万と報告されている。ここでは改良主義組合内の細胞、フラクのほか、独立組合(サンジカリストや極左派などによる)がその中心であり、これらの代表により「活動委員会」が組織されていた。しかし統一した反対派としては作られていない。

イギリスでは、二一年の敗北で破壊された抗夫組合は、いぜんとして八百万組織労働者の最左翼をしめていた。トレードユニオンの伝説と官僚支配をはこる英国労働総同盟の内には、反対派的運動が

ひろがりつつあった。南ウエールズ鉱夫組合(十九万)はプロフィンテルン加入支持を打出した。しかし反対派の全国的な組織は一九二四年、トム・マン、ハリー・ポットにひきいられた運動(NMH)の成立までまたねばならぬ。

\* 一九二一年三月月にわたるロックアウトに対し闘つた炭坑労働者の闘争は、運輸・鉄道組合とともに作られていた「三角同盟」が決定的な段階に連帯ストを中止したために孤立し、敗北した。

イタリーではプロフィンテルン創立宣言に署名したダラゴナをはじめ、労働総同盟の指導部はこぞってアムステルダムにいった。しかしその内部には共産主義者に指導された少数派がよく組織されていた。全組合員の1/3を占めていゝといわれる小党派は地方別、産業別の委員会をもつていた。さらにイタリー・サンジカリスト同盟内のプロフィンテルン所屬員とこれとは統一方針をもつて活動した。

スペインではサンジカリストの労働総同盟と改良主義者の労働総同盟があるが、改良主義組織の中に留りつつ、両者に間に「合同委員会」をもつて行動の統一をはかつた。

アメリカでは——「ゴンバースの国」として有名なこの超右翼的アメリカ労働総同盟(AFL)に対し、サンジカリストのI・W・W(世界産業労働連盟)が独立して闘つていたが、共産党系の「左翼」は合同し「労働組合宣伝連盟」をつくつた。これがAFL内で闘つていたが、プロフィンテルンはこれに全アメリカの左翼を結集するようよびかけた。

フランスでもっともはげしい衝突の結果、ついに労働運動に分

裂した。

一九一九年から二〇年かけて、フランス全土はストライキの海につつまれていた。公式統計でさえ一九年にスト二二〇〇件、参加者一六万人と発表しており、労働者は賃下げをはね返して八時間労働、平均二〇〜二五%の賃上げを獲得していった。

二〇年は鉄道労働者が全面的に立上がり、前年を上回る闘争がひらがる。二月ヴェルヌーヴリトリアージュ駅の首切に抗議した闘いはたちまち鉄道セネストとなった。だが鉄道労連の指導者ビドガレールは、労働総同盟が政府と結んだ協定によってストを中止させた。

四月の大会でビドガレールは追放され、鉄道労連は新書記長モンムッソー以下左翼の手に、握られた。メーデーには、高揚の波をうけてモンムッソーがストライキ・アピールを發した。老かいな総同盟指導部は、スト指導権を鉄道労連が放棄することを条件にストを支持を決めた。これが受入れると総同盟は、鉄道労働者の要求綱領に代って「鉄道国有化」のスローガンをかかげ他の単産を次々と（五月三日は炭坑、七日は金屬、十日は電氣、十一日はガス、といった具合に）ストに入れた。もちろん政府は軍隊を使い、ストを一つ一つ撃破した。五月二〇日総同盟全国会議はセネストを主張する一派をおしのけてスト打切を決め、鉄道労働者は孤立して戦い続ける。

その直後、モンムッソー以下の左翼指導部は「國家の内外の安全にたいする陰謀」のかどで逮捕された。時をうつつさずビドガレール一派は鉄道労連の指導部を握って五月二十九日ストを打切り、六月鉄道労連大会を開いたのである。だが（政府との打合せが不十分だった左翼指導部は無罪釈放されこの大会に出席した。そこでふたたび敗ためか）化したビドガレール派は退場し、あたらしい労連を結成、総

同盟はこれを承認する。

九月オルレアンの総同盟大会で反対派は前回（一九年九月）の六分の一から三分の一に勢力をました。少数派は大単産において進出したまた県連合では正確にその力を反映させセーヌ県（パリを含む）はまずその手中におちた。

この大会後反対派は「革命的サンジカリスト委員会(CSR)」をつくって対抗しはじめた。多数派はこれを口実に多数派のにぎる単産から反対派の除名をはじめめる。だが、次のリール大会（二一年七月）では一五六票対一三四八票と反対派の勝利は目前に迫ってきた。九月CGT全国委員会はCSRに最後通牒を發した。主流の握っているところでは除名が、反対派の握ったところでは別の組織をつくり、総同盟本部はこの「分派」を承認して本組織を除名した。（この時の勢力は単産では二七対十二、県連では三十六対四四であった）二一年十二月反対派は大会を組織し、CSRから組織としての加盟を退会させることを決めた。しかし四日後に開かれたCGT執行委員が除名を承認にするにおよび分裂は確定された。CGTには三十七万人が残るのみとなった。一方、反対派は翌二十二年六月サン・テチエンヌに大会を開き統一労働同盟(CGTU)を作ったのである。

できるかぎり要約したフランスの事件は、当時多かれ少なかれ全世界に見られたものである。そしてわれわれは今日なおそれと同じ現象を日本において見るのである。

プロフィンテルンは、このフランスの分裂を喰止めようと努力した。サンジカリストの支配するCSRの闘争は彼ら本来の極左的かつ非政治的な欠陥をもっていたであろうことがうかがわれる。ロソ

十一

フスキーは二回大会において「CSRの連中までが統一を主張し出した」と喜んでいた。しかし事態は逆に進み、CGTUはプロフィンテルンの最強部隊となる一方、フランス労働運動は全般的な退潮期とともに困難におちいつて行くのである。

一方ではコミンテルンに反対するかつての共産主義者によって、プロフィンテルン解消の声も弱くなった。当時なおドイツの党内に影響力をもっていたパウリ・レーヴィ一派はこんな決議をしていた。

「プロフィンテルンの実践は結局労働組合運動を分裂せしめることになり、危険な矛盾に導くものである。これを実証すれば、プロフィンテルンはフランスにおいて分裂防止のためアムステルダムの方に手を差出しているにもかかわらず、ジノヴィエフはノルウェーで、プロフィンテルンはイタリアでそれぞれ組合のモスクワへの政宗を要求している。これは事実上分裂を意味するものである。この実践は労働組合のいかなる分裂にも反対しているコミンテルンの決議に矛盾するものである。ソビエトロシアの隣接政策は全世界のプロレタリアートのとくに労働組合の支持を切実に要望している。このためもつともよき保証はかくのごとき状態の下においては、アムステルダム内の反対派を強めるために、プロフィンテルンが加入しているすべての組合の、アムステルダムインスターへの参加である。プロフィンテルンはコミンテルンの労働組合部としてはもはや存在しえない。」

\* 一九二二年二月第一回コミンテルン執行委員会におけるロソフスキーの報告にフリースラントの提案として引用されているもの。

一九二三年、ブランドラーなどの「指導」によってドイツ労働者階級は最後の革命の機を逸した。国際共産主義運動は、二四年一月レーニンを失い、最悪の事態に投げこまれる。プロフィンテルンは前節に引用したフリースラントの決議を——ロソフスキーは「清算主義」ときめつけたにもかかわらず——是認するかの方向に動いていく。

ではこれまでに見てきた、プロフィンテルンの第一期というべき時期は、いかなる教訓をわれわれに与えるであろうか。これだけの資料のみでは筆者は深い評価を加えることはできないただ一つだけ指摘しておかなければならぬことは、（九）に引用されたロソフスキーをはじめボルシェヴィキのインスターに対する考えである。労働組合も政党も、単一のインスターに組織せよとの意見は、インスターナショナルの意味を、党の意味を誤って理解した思想である。

プロフィンテルンが、革命的労働者の結集点としてその姿を表したことは正しいものであり、その戦術もまた、おおむね正しかったといえよう。だが、あらゆる革命情勢的確にかみ、これをプロレタリア独裁へもっていくものは、独立に組織された「前衛政党」である。ボルシェヴィキがサンジカリストと徹底的に争ったのも、実はこの思想ゆえであつたはずだ。しかし各国において労働組合の左傾、あるいはサンジカリストのボルシェヴィキ化は大衆的に進みそれはしばしば大衆の革命的高揚力となった。だが、一九二〇年のイタリアの工場占領においても、一九年から二三年にいたるなんたがのドイツの革命情勢に対しても、二十年のフランスの闘争の時

にも、「前衛」は、まに、あわなかつたのである。

この状態は、その後改善されたであろうか。前衛政党の弱体の中でたゞさえ過重な負担を負わされていたプロフィンテルンは、今度は背負うに値しない誤まつる方針をになわされたのである。

## 統一政策とプロフィンテルンの敗北

——右への偏向——

### 十二

ドイツ革命の敗北を境として、資本主義は革命の心配なしに発展を続け出した。労働者階級の中に生まれていた「統一」の声は、あからさまな資本攻勢によって一層強くなった。資本家はあらたに「合理化」のはじめともいふべき経営改善を打出し、ストライキに對しては経営者が団結してロックアウトをかけるのが定石とさえなってきた。労働組合はこれに對し分裂し、その数も減つていった。

たとえばフランスにおいて二四年から二七年の間争議件数は年間一千以下、参加者三〇万ならず、という統計が出ている。(J・ブリエア フランス労働運動史、二七) イタリアではファシストの力があらゆるものを破壊しつゝあつた。たゞ資本主義諸国の安定と復興に一人英国のみが取りのされ、不気味な空気が失業者の群とともにあふれていた。

一方、レーニンを失つたコミンテルン——ソビエトロシア共産党内では、スターリンの暗躍が開始されつゝあつた。プハーリン、ルイコフ、トムスキーと、党・政府・労働組合を支配していた右翼プ

ロツクと結んで左派追放のり出ししたスターリンの策動は、こうした一時的な挫折を、ソ連国家擁護に利用する道をもとめていた。

一九二二年十二月、ヘーグで開かれた国際平和会議に、ロゾフスキーを先頭とするロシア労働組合代表がのりこみ、「戦争に反對する統一戦線」を提案した。もちろん「軍隊における反戦宣伝」に色をなして反對する「平和主義者」が大部分であつたこの会議はこれを受入れる与地はなかつたが、その後大きな変化がおとずれた。

一九二三年一月十一日フランス軍は賠償問題をたてにベルギー軍を従えてルールを占領した。ヘーグ平和会議(わずか三週間まえの)では国際セネストで闘うと囁語していたアムステルダム・インターは、たちまちその内部でドイツ對フランス、ベルギーに分裂し、問題を「国際連盟に持込め」というのみに終つた。これはプロフィンテルンに有利な地位を与えた。フランスではCGTUがローレヌの炭坑地帯で連帯闘争をおこし、エッセンのデモでは民兵は発砲を拒否した。マルセル・カンヤン、G・モンムツソー、ガブリエリ・ペリらがこのため逮捕された。戦争の再発を防ぐため労働戦線の統一をよびかける声は、プロフィンテルン系のドイツのいくつかの工場委員会から発せられたフランクフルトに、アムステルダム、プロフィンテルン、第二、第二半、第三インターの合議をよびかけた。この合議を改良派はボイコットしたが、アムステルダム翼下のいくつかの大組合が参加した。

ついで二三年五月、ベルリンにおいて国際交通労働者連盟(アムステルダム翼下の職業別国際連合組織の一つ、二三〇万)とロシア交通労働者を中心とするプロフィンテルン系との合同会議が開かれた。六百人の代表を集めたこの会議は国際労働組合連盟(アムステ

ルダム・インター)の書記であるフイメンの活躍によって、左右の統一を計り「ファシズムに對する闘争、労働組合運動の統一戦線樹立、戦争に對する闘争」の議題を討議し宣言を発表し、具体的には「港湾都市鉄道連絡点・重要鉄道中心地に統制委員会を設置し、これによって戦争に對して闘争すること」という決議を採決した。

この国際交通労働者会議の成功は、改良主義者に大きな反響を与えた。その決議自体はきわめて単純なものであつたが、戦争に(頭上の一撃は意識を明瞭にする作用をもつて)。ルール占領は広汎な労働者に明瞭なそして指導者にも若干の衝撃を与えた——ロゾフスキー)に對し、資本の攻撃に對し「ボルシェヴィキと一緒に」になつて闘うということが目の前できめられた以上、分裂している労働者は考えざるをえなかつただろう。

アムステルダムは動揺した。ベルリンにおいて書記のフイメンがボルシェヴィキと手を握っている同じ時、ハンブルクでは第二インターと第二半インターの合同会議が開かれており、そこには今一人の書記ウ・ドゲートが参加してボルシェヴィキの「統一」の謀略といかに闘うかを論じていた。(ただしこの会議の出席者は九名だといわれている)ロゾフスキーはしばしばアムステルダムは二本の手を持つていて、右手はウ・ドゲートであり左手はフイメンであつた。それぞれの手はそれぞれの傾向の文書に署名するのである。

だがフイメンの今日の行為はアムステルダムの左手には過ぎたるものとされた。しばらくの論争の後、彼は辞職し、ベルリン会議の決定は交通インター総務部で修正されて「統一戦線樹立ははなはだ結構だが、この問題はアムステルダム・インターによって決議され

ねばならぬ」となり、なら実行に移されぬまま葬られたのである。だがその反響は止らなかつた。八月に開かれたベルギー労働組合の大会では、改良主義者は統一擁護の決議を自分から誤らねばならなかつた。その後アムステルダムはモスクワに統一会談のため招待状を送つた。

翌二四年六月二日からウィーンで開かれたアムステルダム・インター第三回大会は、統一問題で大きくあれた。イギリスのパーセルをはじめとする色々な考えもつた「左翼」はベルリン会議を問題として闘つた。国際職業組合書記局の中の左翼(交通・被服などの)は、ベルリンの失敗をなくすため、各国書記局がアムステルダムから独立に行動する自由を要求した。もしこれが通つたならば交通を先頭に単一の国際組織が生まれることは明らかであつた。プロフィンテルンの側はこれが実現するならば「国際宣伝委員会」を解散することをすでに明らかにしていた。

当然のことながらこれは否決された。これに代つてアムステルダムは二つのことをなした。一つは、ロシア労働組合に對してアムステルダム加入を呼びかけた——ただし、コミンテルンおよびプロフィンテルンとの一切の関係を断つことを条件にして。今一つは、議長に有名な右翼、マクドナルド内閣の植民地大臣トーマスに代つてプロフィンテルン創立に参加した一人パーセルを、辞職したフイメンのあとに英国改良主義左翼の一人ブラウンを選出したのである。

(このアムステルダム内の変化を見て、左傾ぐと喜ぶのは早過ぎる。パーセルの評価に代表される共産主義者内部の論争が、その後の事態を左右する。また、アムステルダムの勢力争いというのは「思想」にではなくて「国の利益」によるものであることを忘れてはな

らない。ウィーン会議におけるイギリスの進出は、次にはドイツの反撃に敗れるのである。

### 十三

プロフィンテルンは、こうした動きに最大の重点をおいた。二三年六月、これまでならば当然開られるはずの大会にかわって行なわれた中央評議会第三回会議は、植民地労組獲得への多くの決議とともに、ルール占領と、ファシストの勢力拡大に対して統一戦線を決議し、ベルリン交通労働者会議の成果にもとづいて赤・黄両インター所属組合の「共同会議」を提案した。

アムステルダム・ウィーン会議の直後開かれたコミンテルン五回大会において、ジノヴィエフはこう演説した。

「われわれは、もっとゆっくりと、もっと困難で回り道の多い方法によって彼ら（社会民主主義者）と闘わねばならぬ……われわれは、われわれの基盤を大衆の中に準備しなければならぬ。われわれは『労働組合の統一』にかんするプロバガンダを国際的規模で組織しなければならぬ。われわれは直ちにこの問題にかんして全世界を通じて商議を準備する。」

ついで七月五日から開かれたプロフィンテルン第三回大会はこの問題を中心にした。大会は労働組合統一のよびかけを發し、一七名の特別委員会をこの問題のために選出した。大会はアムステルダム側の決議に答えて統一のたの条件を出した。それは、

「各組織が、その構成員に比例して選出した代表によって構成される世界労働者大会をただちに開くこと。この会議においては各派はその主張を展開する。大会で多数をえたものが指導を行いが、

少数になったものは決して排除されることはない」というものであった。これについて討議するための会談を聞くことをよびかける手紙が送られ、また下部組合では除名された者が組合復帰を提案した。この間の両インターの間の往復書簡の要約を引用しよう（外務省資料「共産主義インターとその補助機関」より）

アムステルダムより 七月二十二日着  
同志諸君

アムステルダム・インター第三回大会は……全会一致をもって左記決議を採決せり。

大会はアムステルダム事務局と全露労働総合中央議会との間に行われた交渉に関する報告を聴取し、連邦の労組が全世界の主要労組代表によって承認せられたる「アムステルダム・インター」の規約及び綱領を認めず、未だ国際労働組合連盟の外にあるを遺憾とす。大会は（中略）アムステルダム・インターの威厳を損ぜざる限り、我がインターの規約決定を無条件に遵守すべきことを前提としてソビエト聯邦労働組合を国際連盟に引入れる交渉を続けることを決議する。（後略）

議長 パーセル 書記 オーデゲースト

全露労組中央評議会の返書、（七月二十六日手交）

（前略）卿等が卿等の「インター」の規約又は原則の承認以て交渉の前提とせらるるは前後転倒にして、右に關してこそ将来交渉せられるべく、卿等の主張は合併せんと目的と矛盾せりと認む。（中略）吾人ロシア労組も亦職業組合赤色インター（プロフィンテルン）の一部なることを承認せられたし。（中略）卿等と

相会し具体的に交渉せば確実に実現し得べしと思考す。依て両インターの会合には何等の前提条件を附せざるを以て正当なりと信ず。（後略）

議長 トムスキー 書記長 ドガドフ

アムステルダムの返書、九月十一日

（前略）卿等の「労働対資本の激戦に於てはプロレタリアの経済的機関の有する力を集中し世界の労働組合運動を統一することによりてのみ勝利を得べし」との主張は吾人の主張と一致す。されど（中略）口頭に以てする交渉の以前に（略）書面を以て卿等の提案を提示せられたことを請う（後略）

署名

全露労働組合中央評議会議長

トムスキー

アムステルダム・インターナショナル 御中

ドガドフ

往復書簡でも明らかな通り、この商議はいつころにちが明かかなかった。アムステルダムはプロフィンテルンを相手としてでなく、「全露労働組合中央評議会」を対象に、アムステルダムの規約、綱領を認めた上での加入の線を譲らなかつたからである。

ロシア労働組合—ソビエトロシア共産党は、この間イギリス工作に全力を傾けた。アムステルダム書記局が旧然依然としてその立場を守っている間に、英露の商議は進み、翌二十五年二月の国際労組連盟（アムステルダム・インター）の総評議会において、議長パーセルとイギリス代表団は、ロシア労組の無条件加盟動議を提出するにいたつた。

だが、会議は一三対六でイギリスの提案を否決してしまつた。そこでイギリス代表は、ロシア側がプロフィンテルン三回大会におい

モスクワの返書、十月三十日着

（前略）吾人は今本書を以て個々の問題を論議し、国際的労働組合運動の分裂は何れに罪ありきやを極めんとすべきにあらずと思考す。吾人は唯直接に全世界の労働者を包括し強固なる組織を有し統一せられたる眞の労働組合運動は今日まで全然存在せざりしことを断言せんと欲するのみ、（中略）即これによりプロフィンテルン、アムステルダムのみならず更に他の組合も総て合併せんと努力しつゝあるなり。唯条件として必要なのは此等他の組合をして階級戦の原則を承認せしむることなり。（略）彼等も亦労働組合を統一することは、資本よりの攻撃、ファシスト的反動及全資本主義社会制度の撲滅に成功する為の重要な前提たることを熟知す。

て打出した「統一委員会」方式に踏み切り、ここに「国際的統一を促進するために」共同の英露委員会——正式には「イギリスソ同盟労働組合諮問委員会」——が設立されるのである。

「労働組合の統一」は、これまでの「統一戦線」とははっきり違つたニュアンスをもつたスローガンであった。

「統一戦線のスローガン、即ち共同的進出のスローガンは、労働組合の統一、即ち各国における単一組合運動のための闘争、単一インターナショナルのための闘争なるスローガンによって追補された。」(ロゾフスキー、プロフィンテルン十周年記念講演より)というところ、それは当面の闘争のために労働者の大多数を結集する必要から結ぶ統一戦線ではなく(この必要は、三回大会においてもやはり強調されている。とくにアムステルダム派の除名政策の反動として「新組合樹立」がまたも叫ばれていた所であったから)はっきりと組織そのものを、永久に統一しようとするものであった。もちろんそれによって近い将来改良主義者を暴露し、組合をそっくりいたなく考えは捨てられてはいなかったが、共産主義者が組合の組織的統一を真に望んでいたことは改良主義者も認めていた。

「この新政策は、たまたま共産主義者の戦術の結果として起つたものであるとしても、単なる作戦だけでなく、真の統一に同意していいという若干の覚悟が、奇妙ではあるが混つていたのである」(A・シュトルムタール、ヨーロッパ労働運動の悲劇)

シュトルムタールが正確にも「奇妙ではあるが」と指摘した事實は、労働組合のみでなく、共産主義者の全政策の中にひろがっている。一方においてはフランス共産党の草分けの一人であるフロツサーが「社会主義共産主義連合」を作つたり、多くの分子が「統

一戦線」の限界を逸脱し党を追われた。清算主義的な右翼の路線はいたるところでひろがり、各国において「革命的少数派」としてその旗じるしを鮮明にすることを誇りとし、多数獲得につとめていた部分は「統一」のための条件を有利にする道具にされる傾向にあった。イギリスに対する共産主義者の工作は、その最良の例であった。

#### 十四

先にふれたごとく、イギリスはヨーロッパ各国の安定をよそに、経済的にも低迷をつづけていた。一九二一年、石炭産業(イギリスにおいてこれの占める比重は巨大なものであった)の危機におこつた大ストライキは、改良主義者の手により敗北したとはいえ、炭坑労働者にある程度の安定を保障する協約を与えていた。石炭産業を中心とする事態は、その後数年間、根本的な変化をもたらしてはいなかった。階級間の緊張の間隙をぬって、労働党はその議席を増しつづけた。一九二三年十一月、ポールドウインは保護関税導入を総選挙に問い、失敗した。一九一名の議席をえた労働党は二四年一月はじめて政権の座についた。だが、労働党内左翼たる独立労働党(マクドナルドはそれまでこの指導者だった)の「この好機をきたるべき社会主義への宣伝に使え」との要求を党首であり総理大臣であるマクドナルドは「妻はまだ青い」と拒否した。彼は自由党と協力のもとに奇妙な「社会主義」の見本を示していた。マクドナルド内閣の成立によって胸を張った右翼社会民主主義者、組合幹部も、その年の十月、労働党が選挙で敗北するにおよんで、左派の力に抗しきれなくなつてきた。

労働党や労働総同盟内の左派は別として、労働者大衆の中には革

命的反対派が勢力をのびていた。二一年のにえ湯と相変らぬ官僚支配に対する反撥は、炭坑労働組合を中心に結集しつづつた。

コミンテルン五回大会に出席し、プロフィンテルン三回大会では「イギリスにおける革命的少数派の任務」について基調報告を行ったトム・マンやイギリス左翼の中心的存在であったハリー・ポットらは、二四年八月革命的反対派を集めて「全国少数派運動(NMM)」なる組織を結成し反抗の火の手をあげた。左傾しつづける大衆の中にNMMは発展し、炭坑労働組合は書記長にNMMのメンバー、プロフィンテルン加盟員アサー・H・クックを選出した。

二二年、敗北の中で残された炭坑労働組の協約は二五年七月が満期であった。情勢はこの時期を中心に日一日と深化していった。

このような中で、コミンテルンが考えたのは、アムステルダム・インター議長・英労働組合の実力者、パーセルとの連帯であった。パーセルは労働組合あるいは労働党の中で右翼でなかったことは事實である。多くの歴史家は彼を「中間派」に入れていたが、その分類はともかく、彼は少数派運動やイギリス共産党とはまったく縁もゆかりもない改良主義者であることははっきりしていた。

パーセルは大英帝国と、自己の支配のためにはすぐれた腕をふるうものであったことは、いちはやく革命ロシアに飛び、プロフィンテルンの創立に参加し、さつさとこれから手を引いたことで明らかであった。

イギリスは、新しい市場を必要としていた。アムステルダム・インター内部でドイツの勢力を封ざる必要があった。NMMの発展の中で大衆の総同評議会からの離反を防ぐ必要があった。

パーセルが、まだひ弱なイギリス共産党や、のびはじめた赤色労

働運動をとびこえてさしのべられたコミンテルンの手を喜んで迎えたのは当然であろう。だがイギリス共産党や革命的労働運動は、この奇妙な二正面作戦をどう利用すべきかにとまどつたであろう。

二四年末、モスクワに招待された英代表はアムステルダムへのロシア労働組加盟のために努力することを約束し、それが失敗するや英露委員会として独自行動に入った。

プロフィンテルンにとって、少なくとも表面上こうしたロシア——イギリスの合同委員会設置は、全世界にわたる組合の統一のための戦術であった。ロシア——フィンランド委員会など、いくつかのものが成立し、その交渉のために各国の代表はモスクワに招かれた。だがおそらくロゾフスキーの意志に反して、ソビエト・ロシア共産党中央(スターリンとブハーリンのブロックが作られていた時である!)の心はイギリスに向いていたようだ。

英露委員会は、ついに爆発した大ゼネストの中で完全にその役目を果たして——もちろん英国改良主義者にとつての——解消した。

一九二五年、協約の期限切れ前に、石炭経営者は大幅下げを要求していた。新書記長アサー・クックは「賃金は一ペニイたりとも、労働時間は一分たりともゆるぎない」との名スローガンに労働者の要求を結集していた。新しく編成がえされた労働組合評議会(TUC)は炭坑の闘争指導を引き受け、使用者がロックアウトとにおわした七月三十一日運輸労働者に対し炭坑がストに入ればただちに石炭輸送を止めよとの指代を發した。この先制攻撃は完全に勝利した。政府は経営者に補助金を与え二六年五月一日までこれまで通りの賃金を払わせることを宣言した。そして事態調査のため、H・サミュエルの王室委員会が設立された。クックは「単に使用者のみで

なく、現代における最強の政府をも打破した」と宣言した。

だが全ては翌年五月までの、九カ月間にかかっていた。政府はつきりと五月の決戦を意識しあらゆる準備を開始した。陸軍将校の指揮するファシスト的スト破り団をつくり、輸送と食糧供給の私的機関を準備した。だが労働者の方は、ゼネストの準備を考えるようには指導されなかった。まして内乱以上のものを政府が予期している時に、「政府の打倒」さえ見通す者はいなかった。

サミュエル委員会は「賃金引下げ」を中心とする勧告を出した。だが経営者は「全国一率交渉方式を認めている」点でこれを拒んだ。炭労の前書記長ホッジはこの報告を歓迎したが、炭坑労働者はこれを一蹴した。

しかしTUC幹部はすべてこの報告書を基礎に交渉をまとめる気でいた。ストを準備せぬことを自慢していたし、ストは彼らにとって恐怖だった。ところが経営者はポールドウィン首相支持のもとに交渉のたびに反動化した。ついに五月三日深夜をもってゼネストに入る以外に道がなくなってしまった。TUCはストをやる気持も準備もないままゼネスト指令を発した。火は「炭労に同調するものはすべて革命主義者である」という社説をのせたデイリー・メールの印刷を、その社の印刷工が自発的に拒否したことによってついでに終わったのである。

五月四日ロンドンが目醒めてみると「自動車もバスも電気も新聞も食糧さえもなく」なっていた。ストは完べきに続いた。政府は長い訓練の部隊を出動させてストを攻撃した。武器はラジオとスキャップの手で印刷した政府機関紙「ブリティッシュ・ガゼット」。ポールドウィンはこれに「憲政は攻撃されつつある。ゼネ・ストは議会

に対する挑戦であり、無政府と破壊への道である」と書いた。ラジオは四六時間中「内乱に近づいている」とがなり立てた。しかしスト破りはほとんどなく、ストは尻上に完全なものになってきた。

だが、政府の宣伝とは逆に、労働者の指導部は「本気」でこれは内乱ではない。「否政治闘争でもない」と弁明しつづけた。もう内乱で勝つ以外にない時に、だれも「内乱にせよ」とはいわなかった。共産党とその関係者(五〇〇万のゼネスト参加者中三、四千人といわれる)さえスト前には「反動新聞の発行停止」を要求しているにすぎなかった。

だから、TUC指導部は、妥協して終ることが不可能と見るや、無条件降服に行った。五月十二日、九日目にストは解除された。

サミュエル報告が炭労に有利に解釈されたから、と発表されたが、これはほんとうにうそだった。ただTUCがこれに全面的に賛成しただけだった。ストの中止は大混乱をよびおこしたが、翌日トーマスは「何らかのはずみで、それが何んらかの統制をなしうる人々の手を離れたならば果して何が起ったか。……私はそれが起こらなかつたことを神に感謝する」といった。

炭坑労働者は二一年の「暗い金曜日」とはくらべものならぬ敗北を受けたが、同様に単独でストを続けた。これは六カ月続き、十一月、ほんとうに餓えと寒さのために、サミュエル報告よりはるかに悪い条件——ほんとうに資本家のいうなりで屈服した。

その後には最大の悪法「労働争議ならびに労働組合法」をはじめありとあらゆる報復が加えられ、英労働運動はたまたまめされる。TUCの組合員も大きく減ってしまう。

チャーチスト運動以来最大といわれるこの大階級闘争は、さらに

イギリス共産党の増大に何の役に立たず、逆に右傾化したTUCを一層強固な組織としてしまった。

英露委員会は、なにをしていたのか？ゼネストの最中ソビエト労働者が送った三五万ポンドの資金をTUCは拒否した。——財政援助はゼネストが終ってから、孤立した炭坑労働者に続けられた。

「現実生活は、左翼アムステルダム派との条項に訂正をもたらした。彼等は英露委員会をもって、共産主義者がお互いに攻撃しないことの条約だ、という様に理解した。……ソビエト労働組合の中にも、彼等との協約は、彼等のスカップ的役割を断乎として裁断してはならぬと義務づけている、と考えた人々もいた。だが、か様な傾向は全露労働組合評議会の活動にも又彼等との即事分離という提案にも反映しなかった。」(ロゾフスキー、プロフィンテルンの十年)

傍線の提案はトロツキー等の反対派の主張であった。炭労が孤立している間、一方ではこれに財政援助を与えながら、一方では炭労の死ぬのを待っているTUCとの「分離」を絶対にさせていた。これは相敵対する二者を同時に支持することではなかった。

「経済ストの支持は孤立したものでさえ、絶対に必要であった。しかしこれは財政上ばかりでなく、又革命的に政治的性格を保つべきであった。全露労働中央評議会はイギリス鉱山労組と全イギリス労働者階級に向けて、鉱山労働者のストは……これが新しいゼネストの勃発への道を準備し得た時にのみ、成功をあてにし得るのだと云うことを公然と宣言すべきであった。それは……総評議会に対する猛烈な政治的及び組織的戦争をあらわさねばならなかった。かかる戦争への第一歩は、英露委員会との断絶でなければならなかった。」

(トロツキー、レーニン死後の第三インター)

巨大な裏切りが行われた中で、闘争の再起をはかるものは、当然ゼネストの推力となった革命的少数派運動等にあるはずであった。ところが、そのあたりの資料、そして英露委員会がその間いかなる「商議」を続けたのか——この内容がほとんど不明なのは、筆者の能力のせいではなさそうである。スターリニズムの一つの恥部は歴史から消されているのか。

とにかく、炭坑労働者も敗北し、「報復」が荒れ狂っている二七年八月パリで開かれたアムステルダム・インター四回大会は、モスクワの手を切るよう要求した。この大会は、パーセル失脚を狙うドイツのライバルの策動によって大いに荒れ退場さわぎの末、労働運動の新星、ゼネスト解除の実行人TUC書記長ウォルター・ントラインを議長に選んで終った。もはや右翼が完全に支配したTUCは二七年九月エジンバラ大会で、はつきりと英露委員会の解体を宣言した。

モスクワは、必死にパーセルにしがみついていた。二十七年四月ベルリンの会議でもしつように努力した。

「イギリス人の策動は(しかもそうまずくない)ソビエト労組をアムステルダムに引入れ、自己の右翼的实践を左翼的言論で覆いかくさんとするものであった。英露委員会分離後、アムステルダム・インターの指導部はがっかりと固った。」(ロゾフスキー、プロフィンテルンの十年、一九三〇年)

「イギリス労働組合会議の裏切にかかわらず、英ソ労働委員会は、やはり、きわめて大きな意義をもつものであった。これは全世界プロレタリア、とりわけイギリス労働者に、よりはつきりつつき

のことをわからせた点にある。資本の攻撃とたたかにおいて勝利しようとおもうなら、国際労働組合運動を統一し、労働者の統一戦線をうちたてたかかわなければならぬ、ということ。」「(マルコフ、ソビエト労働運動史一九五三年)

「(1) 資本家と保守党は……労働者と彼らの指導者よりも、経験があり、組織されており、決意にみちており、したがってより強力である……(2) 資本家と保守党は完全に確実な準備……労働運動指導者は……突然おそわれた(3) 労働運動の参謀部……意気消沈して腐敗していたのに反して……(4) 資本家がこの闘争を本質的に政治闘争としてたかたか……労働者の指導者はこれを経済的闘争として指導しようとした。(5) 資本家は……完全な国際的援助を発展させたのに、労働者の指導者はこれをしなかった(6) アムステルダムがこのストを積極的に援助しなかったことがその失敗の決定的一因となった。(7) イギリス共産党は「絶対正しい」政策を押しすすめながらも、まだまだストの方向に影響をあたえるに必要な規模と、大衆にたいする権威に欠けていた。」(スターリンイギリスのストライキとポーランドにおける諸事件において)

以上が共産主義者の「総括」である。筆者はスターリンの総括の後にはほんの少し補足したい。

## 十五

イギリス・ゼネストの敗北は、イギリス内の革命的勢力を一掃し

たための日常闘争において共産主義的前衛が真先に進むことを意味する。その上共産主義者はこの闘争において社会民主党やアムステルダムの裏切的指導者と商議する準備さえもっているのである。……独立した共産党の存在と、ブルジョア及び反革命的の社会民主主義者に対する其の行動の完全な自由は、プロレタリアートの最も重要な歴史的獲得物であり、共産主義者は如何なる事情の下においても之を放棄しないであろう。共産党のみが全プロレタリアートの利害を防御する。」(レーニン、コミンテルン四回大会におけるジノヴィエフの戦術に関する報告に対する論綱)

プロフィンテルンがその力を増し、アムステルダムをおびやかしている中では、有利な闘いが進める時であった。アムステルダムには「分裂」しか武器がない所が多かった時である。

しかし、ここに引用したロゾフスキーの言葉は苦しい弁明である。ロゾフスキーおよびプロフィンテルンの中心メンバーであった者の考えはどうであったかは、この期間の党内論争の資料がないため明らかにできないがコミンテルンの指導思想は明らかな偏向のきざしを見せていた。

プロフィンテルン三回大会の議題を並べてみよう。

一、執行局の報告 二、革命的労働組合の緊急使命(ロゾフスキーの基調報告——両インター統一問題が中心) 三、八時間労働制々定の闘争 四、工場委員会 五、国際宣伝委員会の職業組合インターへの態度 六、ストライキ戦術 七、植民地、半植民地におけるプロフィンテルンの任務 八、農業労働者の組合および農民インターとの関係 九、消費組合と労働組合 十、婦人および青年運動について 十一、移民問題 十二、ファシストとの闘争 十三(順はも

ただけでなく、最後に先進資本主義国の革命を終息させた。アムステルダム・インターは、二七年八月の大会において、イギリスの「火遊び」を止めさせる決議を行った。ドイツ改良主義者はイギリス追放のためにこれを最大限利用した。書記ブラウンは敵対するオデゲーストを遂げずにして辞職した。議長の座をめぐる争いはドイツ側がパーセルでなく、シトラインを引出すことによって結着した。こうしてアムステルダムとの「統一」の望みは完全に敗北したが、そればかりでなく各国の「革命的少数派」はあおりをくらってその力を決定的に失ったのである。

なすが、プロフィンテルンにこのような末路を強いたのであろうか。

プロフィンテルンは英露委員会の結成を「第一にそして一番主要なのは、大衆に向って、ソビエトの労働組合は言葉の上でなく実践において統一戦線に賛成すること、ソビエト労働組合は反動、戦争および資本の攻撃に反対する共同行動のためにはどんな労働者組織とも協約することを証明せんと欲したからである。」(ロゾフスキー、プロフィンテルンの十年より)といっている。はげしさを加える資本攻勢の中で、労働組合の組織そのものが弱体化してくるのに拍車をかけていた場合の分裂をなんとか喰止めようという大衆の声は、たしかに尊重するに値するものであったろう。統一を破り資本との闘いを放棄するものはだれかを大衆の前に明らかにしつつ当面の防衛戦を闘うことはボルシェヴィキの戦術であり、「統一戦線から労働組合の統一へ」のスローガンはこの意味からは否定されるべきものとはいえないであろう。

「統一戦線の戦術は、広汎な労働者大衆の最も緊要な生活利益のつと前であるが) 各国における情勢分析と各国別テーゼの決定(とくにイギリス)となっている。大会討論の重点はヨーロッパにおいては「統一」問題におかれ、今一つの重点が植民地の労働運動に、もちろん後者は創立大会から出されている問題ではあるが、二七年以後の方針と比べて見る時ここに、その基盤を感じるのである。このほかに、農民インター(クレスチンテルンと呼ばれ、コミンテルン五回大会の方針により設立される。階級闘争の歴史に關係したということはついぞ聞かない)との關係であるとか、国際スポーツ問題などの「多面的」な活動がある。さらに「戦術問題」——「経済偵察活動の問題」などは、戦後プロフィンテルンの特徴づけた「ストライキ戦術」のほう芽である。

これまでの大会が階級闘争の原則的な問題についての言葉ですべてうめられていたのに対して、この変化は、プロフィンテルンが発展し、多彩な活動を展開しうろようになったということ、これまでの論争の中心であった、サンジカリストがすでにその存在を失ない、もはや論議の相手でなくなった、ということと説明されてよいものでは断じてない。

この方針の基本を流れるものは、「ヨーロッパにおいては改良主義者との統一(したがって革命の放棄)それに代るものとしてアジアなどの植民地の民族闘争の強化——その基調をなす農民の重視」という思想である。

すでにほかの多くの同志によって語られている国際共産主義運動の歪曲は、このように反映しているのである。プハーリンと結んだスターリンの思想、一國社会主義と二段階革命は、こうして右翼的第一曲線をえがいた。ヨーロッパ革命を放棄した彼らが二段階革命

の方針で植民地に目を向けたことは、「目を向けた」点は悪くなかった。アジアにおける労働運動はこれより大きくプロフィンテルンに結集されてくる。(四回大会の項においてこの点はのべる)だが古くからメンシェヴィキと紙一重にあったプーハーリンの方針は、ヨーロッパにおける「統一」を敗北のための道しるべにしたのである。プーハーリンの思想からすれば、共産主義者が常にみずからの旗をかかげてこの方向を明らかにしつつ、大衆の中に入り込みそれを共産主義者の側に獲得する、というよりも、急進的改良主義者と協議し、「統一して」行動することでも十分であった。レーニンが四月テーゼをもって粉碎した古参ボルシェヴィキの「臨時政府の政策をかえさせる」といった思想は、ヨーロッパ各国の改良主義者に対して復活したのである。一方、すべての価値判断を「ソビエト共和国を攻撃するか否か」におくスターリンの思想からすれば、労働組合を握り、時と所によっては政府をにぎる改良主義者が、モスクワをどんな形でも支持するとなればすべては満足であった。火中に粟をひろうようなブルジョアを打倒することよりも、ブルジョア、あるいはそれと大きな関係を持つ改良主義者と協定したほうがずっと得であった。かくして、この二人の「統一戦線」は、ヨーロッパの改良主義者に食指を動かしたのである。そして先述したごとくみずからの保身と、大英帝国の経済的進出と、ヨーロッパ労働運動の指導権確保のためのスポンサーを求めていたパーセルは、彼らにとって「労働者国家の守護神」(トロツキー)に見えたのである。

『一九二六年七月に、スターリンは中夫委員会と中央統制委員会との合同統会において次のごとく講演した。

「このブロック(英露委員会)の仕事は、新しい帝国主義戦争に

偏向は労働組合のみでなかった。パーセルが英露委員会を結成したこれと同じ時、イギリス労働党は、イギリス共産党の加入申込を正式に拒否した。これはいっただいなを意味するの。一九二二年コミンテルン執行委員会は労働党への加盟のための精神的闘争はイギリス共産主義者の任務である、との決議を採択しているが、この拒否はイギリス労働党に対して共産主義者が加入を要求するためには、その支配があまりにも反動化していたことを示すものだった。そしてそれを拒否した当の労働党のメンバーと、御本尊のモスクワが手を握っているという事は、明らかに「弱い共産党を見捨ててこれをとびこえて、改良主義者と結ぶ」こと以外のなにものでもない。第十一節の最後に引用したドイツの右翼の提案は、スターリンプーハーリンらの手によって「党」にまでも実現されたのである。(中国においては蒋介石と、もつともすばらしい握手がなされていた。)シュトルムタールが、ジャーナリストのケイ眼で見た「奇妙な混じりもの」とは、未だ当時は失われていなかったボルシェヴィキの思想と、モスクワからあふれ出てきたスターリン主義との関係であったのだ。

「最も正しい戦略でさえ、それだけは常に勝利をもたらすことはできない。戦略的正確さは、これが階級諸力の現実の発展の路線に従っているかどうか、又それがこの発展の諸要素をリアリスティックに評価しているかどうかによって立証される。運動にとつても致命的な結果をもつ最も重大で最も恥すべき敗北は、諸階級の誤った評価、革命諸勢力の過少評価、と敵勢力の理想化と、による典型的にメンシェヴィスト的敗北である。」(トロツキー前掲書)という指摘は重要である。だがわれわれが問題としなければならないのはそ

対し、又一般に(特に)わが国への干渉に対してヨーロッパの最盛の帝国主義権力の側において、特にイギリスの側において労働者階級の広汎な運動を組織することにある。彼はわれわれ反対派に「干渉に対し世界最初の労働者共和国を守るために決意せねばならぬ」と云う意味で教えつつあった時に(われわれは、勿論これに気がかない)スターリンは付け加えた。

「もしイギリスの反動的労働組合が彼ら自身の国の反革命的帝国主義者に対してわが国の革命的労働組合とのブロックを締結せんと用意しているならば、何故われわれはかかるブロックを喜んで迎えるべきでないのだろうか?」

もし、反動的労働組合が自国の帝国主義者に対する闘争を指導する能力をもっていたならば彼らは反動的ではなかったであろう。スターリンは反動的と革命的という概念をこれ以上区別する能力がない。……

スターリンの後から、我が党のモスクワ委員会は、モスクワの労働者に説得した。

「英露委員会は、ソ連に対して向けられる可能なすべての干渉に対する闘争において巨大な役割を疑いもなく演じ得、演じねばならず、又演ずるであろう。これは新戦争を挑発せんとする国際ブルジョアジーのあらゆる試みに対する闘争のためのプロレタリアートの国際勢力の組織的中心となるであろう」(モスクワの委員会のテーゼ) 反対派はなんと答えたか?

「国際情勢が一層尖鋭になればなる程、英露委員会はますますイギリス及び国際帝国主義の武器へと変えられるであろう」と。『(トロツキー、レーニン死後の第三インター)』

うすることができない思想である。

統一戦線——労働組合の統一という戦略は、スターリンやプーハーリンの頭から出たものではない。彼らにとって統一戦線はその誤れる戦略の基調であった。ただ、それが当時の情勢に有利に使えた——だから一層悪かった——だけなのである。

もはや革命の思想を失ったコミンテルンの指導部は、パーセルへの幻想がイギリス労働者の取返しのかぬ犠牲をとまなび消えうせると、自分の思想を改めるのではなく、百八十度方向を転じて極左に入る。——しかも敗北の上に一層強大な安定をきざぎざあげたブルジョアジーや改良主義者に、満身創夷で、である。プロフィンテルンは悪名高き時代を二七年から迎えるのである。そしてこの変化をおしやくすためか、

「統一戦線」時代の資料——プロフィンテルン三回大会——はきわめて少ないことを記しておくかねばならぬ。

たとえばマルコフ「ソビエト労働組合運動史」には英露委員会時代のことは全編千ページ中四百三十字しか書かれていない。(つづく)

**共産主義 第五号**

発行日 一九五九年十月一日

(年六回偶数月の一日発行)

編集 共産主義者同盟書記局

発行所 **リベラシオン社**

東京都練馬区豊玉北五の八の一  
振替 東京 三七〇九九

定価 一部 一〇〇円

年(六回)五五〇円

全5分冊

新し い 教 科 書

10月25日完結!

# 連邦共産党史

レーニン主義のすべての問題―党、プロレタリア独裁、労働同盟、民族問題等々を世界的見地より解明し、その実現の過程を叙述した画期的労作!

人間の知恵は経験を必要とする。現代の知恵と名誉と良心の体現をめざすソ連邦の偉大なる歩みをのぞいて若い世代が世界改造の革命的闘争の経験をくみとる場所がどこにあるか!

第1分冊 (一九二〇―一九二二年) 発売中!

第2分冊 (一九二〇―一九三〇年) 発売中!

第3分冊 (一九二二―一九三三年) 発売中!

第4分冊 (一九三三―一九四五年) 発売中!

第5分冊 (一九四五―一九五八年) 発売中!

発売中!

ソビエト科学アカデミー会員ベ・エヌ・ポノマリョフ監修◇モスクワ国立政治図書出版所発行  
日本語版監修ソ連共産党史研究会◇翻訳ソ連政治経済研究会  
新書判・平均二四六頁 各価一五〇円

第4と5分冊の二〇数年間は、歴史的意義において一世紀にも匹敵する。社会主義社会の進化、発展をめざす闘争の時期(戦前)、ファシズム暴政における共産党員の組織者としての役割、世界戦争において鋭く暴露された、その史的二重構造、党が国民経済の急速な復興に努力をかたむけた戦後期、さらに社会主義を共産主義的な自主管理に発展させる問題など現代的課題の解決を指示する。

東京都新宿区南山伏町一  
振替東京102740 電話(34)9293

現代社版